

ありふれない旅人は第
二の生を歩む

骸の海

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは、新たな出会い

それは、もう一つの旅路

それは、ありふれることのない

少年の物語

*自分に合わないと思ったらブラウザバックをオススメします。

目次

- 第一步 歩き始めるプロローグ — 1
- 第二步 「またレイシフトか……えっ？
異世界召喚？」 — 26
- 第三步 「ステータス？レベル、種火、素材
……うっ頭が」 — 41
- 第四步 「（今は）最弱とイジメ（るのはこ
ちら側）」 — 93
- 第五歩 「月下の語らい……あつまたオリ
オンが射殺された気がする」 — 121
- 第六歩 「迷宮、トラップ……アステリオス
くん元気かな」 — 157
- 第七歩 「ベヒモスVS立香&ハジメ。そ
して……」 — 183
- 第八歩 「お粗末な悪意は僕の掌の上」
218
- 第九歩 「奈落の底は動物園……ハハッ!!」
（白目） — 238
- 第十歩 「豹変する錬成師と未だ戻れない
旅人」 — 264
- 第十一歩 「兵器誕生後に覚醒さ！（あくま
でステータスのみ）」 — 290
- 第十二歩 「宿敵討伐されど（ヒロイン
の）フラグが折れる事は無し」 — 320
- クラスメイトside1（よそ見の一幕：
1）「失意と決意と……百合の花と。」

第一歩 歩き始めるプロローグ

少年の話をしよう

数多の世界時代を

様々な物出会いと別れ語を

多くの者達と共に旅歩んできたした

少年の新たな物語旅を

主人公が落下する少し前

月曜日、大抵の人が昨日の日曜に思いを馳せ、これからの1週間を憂鬱に思う1日。そんな日の学校の廊下にて二人の男子高校生が歩いていた

「折角の休日なのにゴメンね手伝ってもらっちゃって、『立香』」

「それは言わない約束だよ、『ハジメ』。それに手伝ったって言っても、今回はご飯作ってた位だし」

「それがウチにとっては死活問題なんだけどね。集中すると空腹の事なんて全く考えないからさ」

「だからだよ、隣人の家族が空腹で死ぬなんて笑えないでしょ」

「何時も美味しいご飯をありがとうございます」

「はい、どういたしまして……」

（にしても、最初はマーリン辺りがまた何かしたのかと思っただけ、まさか転生するなんてな。）

そう、今作の主人公ことふじまるりつか藤丸立香は転生者である。前世において人理焼却や人理

漂白、様々な事件を解決した後、カルデアの職員や彼と契約し絆を結んだサーヴァント達と平穏な日々を過ごしたり、一部のサーヴァントとはサーヴァントとマスター以上の関係になったりして。最期は皆に見届けられながら安らかに息を引き取った。

だが、彼はどういう訳か転生し前世の記憶を持ったまま第二の人生を過ごしていた。

「(もしかして、それがわかってたから皆はコレを創ってくれたのかな……)」

そう考えながら立香はカルデアスの形をしたネックレスを触っていた。

「……か、りつか……立香！」

「ん？ どうしたの？」

「『どうしたの？』じゃないよ、もうすぐ教室に着くよ」

「あつ、ホントだ」

「珍しいね、立香が考え事だけに集中するなんて。何時もなら考え事してても周囲が見えるという何気にチートなことしてる癖に」

「いや、ここ最近寝不足気味でさ」

「(チートな部分は否定しないんだ……) そうなの？」

「今週は南雲家の手伝い以外でも色々あったからさ。中々寝れなくて」

「僕が言うのも何だけど、身体には気をつけなよ」

「ホントにハジメが言えたことじゃないよね」

「立香が倒れたら誰が美味しいご飯を作ってくれるのさ!」

「ハジメ、本音が漏れてるぞ」

「あつ」

「はあく全くと」

「ぼつ、僕は悪くない! 美味しくて、身体に良いなんていうご飯を僕達に作り続けた立香が悪いんだ!」

「ほお、俺が悪いんだつたら今度からは作らない方が良いのかなあ。なにせ俺が悪いんだもんね、ハ・ジ・メ・?」

「ごめんなさい、許して下さい、もう二度と言わないので。そんな事になったら僕が母さんと父さんに殺される」

その言葉を聞いた瞬間ハジメの行動は早かった、流石に土下座はしなかったが、しかし見事なまでの直角90度の謝罪を見せた。

立香の料理によって南雲家の胃袋は完全に掴まれていた。

「全く、そうなるくらいなら初めから何も言わなきゃいいのに」

「でも、立香のご飯が美味しいのは事実でしょ」

「教えてくれた人が良かったからね……………」

（エミヤやブーティカ、タマモキヤツトのカルデアキッチン組とか紅閻魔や頼光、他にも色んなサーヴァント達が色んな料理を教えてくれたからなくまあ俺が作った料理を食べたいって色んなサーヴァント達が騒ぎだして最後にオカンが説教と共に鎮静化させるっていうのも見慣れた光景になったけど。）

「どうしたの？ 立香」

「何でもないよ、オカンは強いんだなくって再認識しただけ」

「何故？」

何処からか「私はオカンではない!!」という声が聞こえた気がしたがきつと気のせいであろう。

それはともかく
閑話休題

そうして二人は何気無い会話をしながら自分達の教室にたどり着き扉を開けると、クラスに居るほとんどがこちらに目を向ける。その目を向けたクラスメイト達の中で好意的な視線もあるにはあるが、その殆どが大なり小なり悪意の籠もった目線だった。しかも、一瞬目を向けてすぐに逸らした者たちは兎も角、一部は未だに悪意を宿した目を、特にハジメに向けていた。

ハジメは極力意識しないように、立香は少し呆れながら自席へ向かう。しかし、毎度の如くちよつかいを出してくる者がいた。

「よお、キモオタ共！ また、徹夜でゲームか？ どうせエロゲでもしてたんだろ？」
「うわっ、キモ〜。エロゲで徹夜とかマジキモイじゃん〜」

一体何が面白いのかゲラゲラと笑い出す男子生徒達。

声を掛けてきたのは檜山大介ひやまだいすけといい、毎日飽きもせず日課のようにハジメに絡む生徒の筆頭だ。近くでバカ笑いをしているのは斎藤良樹さいとうよしき、近藤礼一こんどうれいち、中野信治なかのしんじの三人で、大体この四人が頻繁にハジメに絡む。

檜山の言う通り、立香とハジメはオタクだ。と言ってもキモオタと罵られるほど身だ

しなみや言動が見苦しいという訳ではない。

ハジメは髪は短めに切り揃えているし寝癖もない。コミュ障という訳でもないから積極性こそないものの受け答えは明瞭で大人しくはあるが陰気さは感じさせない。単純に創作物、漫画や小説、ゲームや映画というものが好きなのである。

立香も髪型は所々ハネてたりするが不潔さを感じさせる訳ではなく身だしなみも整っている。更にコミュ力に至っては前世でも第二の人生でも「彼となら3日は余裕で喋り続けられる」と一部で言われる程の天然チートぶりを発揮している。

世間一般ではオタクに対する風当たりは確かに強くはあるが、本来なら嘲笑程度はあれど、ここまで敵愾心を持たれることはない。では、なぜ男子生徒全員が敵意や侮蔑をあらわにするのか。

その答えが彼女だ。

「藤丸君、南雲くん、おはよう！ 今日もしギリギリだね。もつと早く来ようよ」

ニコニコと微笑みながら一人の女子生徒が立香とハジメのもとに歩み寄った。立香は例外として、このクラス、いや学校でも、ハジメにフレンドリーに接してくれる数少

ない例外であり、この事態の原因でもある。

名を白崎香織しらさきかおりという。学校で二大女神と言われ男女問わず絶大な人気を誇る途轍もてつもない美少女だ。腰まで届く長く艶やかな黒髪、少し垂れ気味の大きな瞳はひどく優しげだ。スツと通った鼻梁に小ぶりの鼻、そして薄い桜色の唇が完璧な配置で並んでいる。

いつも微笑の絶えない彼女は、非常に面倒見がよく責任感も強い。ため学年を問わずよく頼られる。それを嫌な顔一つせず真摯に受け止めるのだから高校生とは思えない懐の深さだ。

そんな香織はなぜかよく立香とハジメを構うのだ。徹夜のせいで居眠りの多いハジメは不真面目な生徒と思われる（成績は平均を取っている）、生来の面倒見のよさから香織が気に掛けていると思われる。

これで、ハジメの授業態度が改善したり、あるいはイケメンなら香織が構うのも許容できるのかもしれないが、生憎、ハジメの容姿は極々平凡であり、“趣味の合間に人生”を座右の銘としていることから態度改善も見られない。

そんなハジメが香織と親しくできることが、同じく平凡な男子生徒達には我慢ならぬのだ。

「なぜ、あいつだけ！」と。

逆に立香は先も上げたコミュニケーションで周囲と良好な関係を築いており、顔もそこそこに良く、他人に勉強を教えられる程成績が良いのは周知の事実なのだが、それを理解していても男子生徒達にとつては香織と関わりを持っていて故に嫉妬の対象になってしまうのだ。

*余談だが、立香に教えて貰った者は、必ず成績が良くなったり、苦手を克服できたり、中には不良を辞めて、今では積極的にボランティア活動に参加するようになった者までいるという噂があるらしい。

それはともかく
閑話休題（2回目）

女子生徒の方は単純に、香織に面倒を掛けていることと、なお改善しようとしないうちに不快さを感じているようだ。

立香の場合は女子生徒からの人気がある為ハジメの様に軽蔑している者は少ない。

「あ、ああ、おはよう白崎さん」

「おはよう、白崎さん」

すわつ、これが殺気か!? と言いたくなるような眼光に晒さらされながら、ハジメは頬を引き攣つらせながら、立香は華麗にスルーしながら人当たりの良い笑顔で挨拶を返す。

それに嬉しそうな表情をする香織。「なぜそんな表情をする!」と、ハジメは、更に突き刺さる視線に冷や汗を流した。

立香は変わらず華麗にスルーしていた。

ハジメはいつもの事だと理解しながら立香に少しだけ批難の目を向けた。なぜなら、学校一の美少女である香織が自分達にこうまで構うのか。その理由をハジメは察していたからである。

だからこそ、ハジメの目には周りと違い、香織が “立香とハジメ” に構っているのではなく “立香” に構っているようにしか見えなかった。

しかし、それを指摘する勇氣はハジメにはなかった。以前から香織が時折立香に向ける “ヤバイ” 目を見てしまっており、もし下手なことを言おうものなら自分の身の安全が保証できないと考えて、ハジメは

(立香も大変だなあ)

と心の中で同情する事しかできなかつた。

そして、いい加減現実から目を逸らすのが出来なくなってきたので「この殺気を孕んだ眼光の嵐に気がついて下さい！」と内心懇願することにハジメは思考を割くことにした。だが、香織は立香との会話に夢中で気づいておらず、立香は気づいていただろうが自分かハジメに直接関与しない限りスルーするスタンスなので気にしていなかった。だからハジメもは口には出さないことにした。余計な火種をから生み出すのは流石に嫌だったから。

故にハジメが会話を切り上げるタイミングを凶っている時に、三人の男女が近寄って来て一瞬良かったと思つたが来たのはその一秒前の自分を殴りたくなるメンツだった。

「立香、南雲くん。おはよう。毎日大変ね」

「香織、また彼らの世話を焼いているのか？ 全く、本当に香織は優しいな」

「藤丸おはよう。全くだぜ、そんなやる気ないヤツにやあ何を言つても無駄と思うけどなあ」

三人の中で唯一二人に朝の挨拶をした女子生徒の名前は八重樫雫やえがししずく。香織の親友だ。ポニーテールにした長い黒髪がトレードマークである。切れ長の目は鋭く、しかしその

奥には柔らかさも感じられるため、冷たいというよりカツコイイという印象を与える。百七十二センチメートルという女子にしては高い身長と引き締まった体、凜とした雰囲気は侍を彷彿とさせる。

事実、彼女の実家は八重樫流という剣術道場を営んでおり、零自身、小学生の頃から剣道の大会で負けなしという猛者である。現代に現れた美少女剣士として雑誌の取材を受けることもしばしばあり、熱狂的なファンがいるらしい。後輩の女子生徒から熱を孕んだ瞳で「お姉さま」と慕われて頬を引き寄せさせている光景はよく目撃されている。次に、些いささか臭いセリフで香織に声を掛けたのが天^{あま}之河^{がわ}光輝^{こうき}。いかにも勇者っぽいキラキラネームの彼は、容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能の完璧超人（笑）だ。

イケメンで誰にでも優しく、正義感も強い（思い込みが激しい）男であり、立香には珍しいと言える立香が「嫌い」と断言する人物だ。

まあ、その理由は追々。

え？その他の説明？ハハハ、アンチ対象に説明は必要無いでしょ……………

ナイデシヨ？（●？●）

最後に立香には挨拶したが、その後は投げやり気味な言動の男子生徒、坂上龍太郎^{さかがみりゅうたろう}は光輝の親友であり。

脳筋である!!

後はまあ、龍太郎は努力とか熱血とか根性とかそういうのが大好きな人間なので、ハジメのように学校に来て寝てばかりのやる気がなさそうな人間は嫌いなタイプらしい。今も現在進行形で、ハジメを一瞥した後フンツと鼻で笑い興味ないとばかりに無視している。

「おはよう、八重樫さん、天之河くん、坂上くん。はは、まあ、自業自得とも言えるから仕方ないよ」

「おはよ雫、坂上。まあ、何もして来ないだけ楽だと思うよ？」

雫達に挨拶を返し、苦笑いするハジメと挨拶をした雫と龍太郎のみに挨拶を返した立香に「テメエラ、なに勝手に八重樫さんと話してんだ？ アア!」という言葉より明瞭な視線がグサグサ刺さる。雫も香織に負けなくらい人気が高い。

「それが分かっているなら直すべきじゃないか？ いつまでも香織の優しさに甘えるのはどうかと思うよ。香織だって君達に構ってばかりはいられないんだから」

光輝がハジメ（と何故か立香）に忠告する。光輝の目には、ハジメ（と立香）は香織

の厚意を無下にする不真面目な生徒として映っているようだ。（因みに立香の成績は光輝より上である）

ハジメとしては「甘えたことなんてないよ！　むしろ僕をお世話してくれているのは立香の方だよ！」と正しいようで割とズレている反論を声を大にして言おうとしたが、そんなことをすれば強制連れションが実行されるだろう。光輝自身、思い込みが激しいところがあるので反論しても無駄であろうことも口を閉じさせる原因だ。

そして「直せ」と言われても、ハジメは趣味を人生の中心に置くことに躊躇いが無い。なにせ、父親はゲームクリエイターで母親は少女漫画家であり、将来に備えて父親の会社や母親の作業現場でバイトしているくらいなのだ。

既にその技量は即戦力扱いを受けており、趣味中心の将来設計はばっちりである。ハジメとしては真面目に人生しているので誰になんと言われようと今の生活スタイルを変える必要性を感じなかった。香織がハジメに構わうことがなければ、そもそも物静かな目立たない一生徒で終わるハズだったのである。

だが、それを理解していない光輝はまだ何か言おうとしていたが、自分の親友が言われっぱなしで黙っている程、我等が主人公は薄情ではない。

いつもの口調から少し温度を下げた立香は言葉を紡ぐ。

「天之河はさあ、まず自分の行動を見直すべきじゃないの？」

「何だと、藤丸」

「だってそうでしょ？ 人に挨拶もしない癖に横からグチグチ言うのはおかしいと思わない？」

「くっ…」

立香の正論で光輝は何も言えず、黙り込んでしまう。

光輝が黙り込んでいる間に立香は龍太郎にも言葉を掛ける

「坂上も。毎度言ってるだろ？ 自分が見てるものだけで物事を決めつけるなって」

「ああそうだったな藤丸。南雲、すまん。そして、おはよう。」

そう言われ、龍太郎は素直に反省し、ハジメに頭を下げる。

「改めておはよう坂上くん。ううん、僕は気にしてないから大丈夫だよ」

龍太郎の件が終わったので改めて立香は光輝に声を掛ける

「それで？ 光輝も言うことあるんじゃないの？」

「……だがそれでも、香織の優しさに甘えているのは確かだろ！」

先程言い負かされたにも関わらず光輝は立香に噛み付く。

すると、空気を一切気にせず、その言葉に反応して我らが女神は無自覚に爆弾を落とす。

「？ 光輝くん、なに言ってるの？ 私は、私が藤丸くんと南雲くんの2人と話したいから話してるだけだよ？」

ざわつと教室が騒がしくなる。男子達はギリツと歯を鳴らし呪い殺さんばかりに立香とハジメを睨み、檜山達四人組に至つては昼休みに立香とハジメを連れて行く場所の検討を始めている。

「え？ ……ああ、ホント、香織は優しいよな」

「どうやら光輝の中で香織の発言は立香とハジメに気を遣ったと解釈されたようだ。完璧超人(笑)なのだが、そのせいか自分の正しさを疑わなさ過ぎるという欠点があり、そこが厄介なんだよなあ」とハジメは現実逃避気味に教室の窓から青空を眺めた。

「……めんなさいね? 二人共悪気はないのだけど……」

この場で最も人間関係や各人の心情を把握している雫が、こっそり立香とハジメに謝罪する。ハジメはやはり「仕方ない」と肩を竦めて苦笑いし、立香は……

「いや、今回は白崎さんに感謝かな。ちよつとだけイラついてたから。ハジメもゴメン。変に空気悪くして」

と、香織に感謝しながらいつものテンションに戻してハジメと雫と会話を続ける。

「ううん、立香は本当に僕のことと思って言ってくれた訳だし、逆に嬉しかったかな」

「そっか、なら良かった」

「相変わらず仲良いわね。あなた達は」

「まあ、親友だからね」

そうこうしている内に始業のチャイムが鳴り教師が教室に入ってきた。教室の空気のおかしさには慣れてしまったのか何事もないうように朝の連絡事項を伝える。そして、いつものようにハジメが夢の世界に旅立ち、立香はそれを横目に見ながら教科書とノートを開き当然のように授業が開始された。

そんな立香とハジメを見て香織が微笑み、雫はある意味大物ねと苦笑いし、男子達は舌打ちを、女子達は立香には好意の、ハジメには軽蔑の視線を向けるのだった。

くくくくくくくくくくくくくくくく

教室のざわめきと嗅ぎ慣れた食欲を誘ういい匂いに、ハジメは意識が覚醒していくのを感じた。居眠り常習犯なので起きるべきタイミングは体が覚えている。その感覚から言えば、どうやら昼休憩に入ったようだ。

ハジメは、突つ伏していた体を起こし、十秒でチャージできる定番のお昼と今朝立香から貰ったオニギリを2つゴソゴソと取り出す。

なんとなしに教室を見渡すと購買組は既に飛び出していったのか人数が減っている。それでもハジメの所属するクラスは弁当組が多いので三分の二くらいの生徒が残っており、それに加えて四時間目の社会科教師である畑山愛子先生（二十五歳）が教壇で数人の生徒と談笑していた。

隣である立香の席を見れば、このクラスにとつてはもう見慣れた、とある女子生徒との「お弁当評論会」なるものが始まっており、それを遠目からチラチラと他の生徒が見ていた。

——じゅるるる、きゅほん！

早速、午後のエネルギーを十秒でチャージしたハジメは立香お手製のオニギリを食べようとしていた。だが、その瞬間我等の女神が、ハジメにとつてはある意味悪魔が、ニコニコとハジメの席に寄ってくる。

ハジメは内心「しまった」と呻うめいた。月曜日ということもあり少し寝ぼけ過ぎていたようだ。いつもなら香織達と関わる前に教室を出て目立たない場所で昼寝という

のが定番なのだが、流石に二日の徹夜は地味に効いていたらしい。

「南雲くん。珍しいね、教室にいろの。お弁当？ よかったら一緒にどうかかな？」

再び不穏な空気が教室を満たし始める中、ハジメは心の裡うちで悲鳴を上げる。いや、もう本当になしてわつちに構うんですか？ どうせならお隣の立香と直接絡んでくたせえ。と意味不明な方言が思わず飛び出しそうになった。

ハジメは抵抗を試みる。

「あく、誘ってくれてありがとう、白崎さん。でも、もう食べ終わるから立香達と食べたらどうかかな？」

そう言つて、ミイラのように中身を吸い取られたお昼のパッケージをヒラヒラとまだ食べていないオニギリを見せる。断るのも「何様だ！」と思われそうだが、お昼休憩の間ずっと針のむしろよりは幾分マシだ。

しかし、その程度の抵抗など意味をなさないとはかり女神は追撃をかける。

「うん！ 南雲くんを誘った後に藤丸くんも誘うつもりだったよ？ それに南雲くんお昼それだけなの？ ダメだよ、ちゃんと食べないと！ 私のお弁当、分けてあげるね！」

（もう勘弁して下さい！ 気づいて！ 周りの空気に気づいて！ それと、立香！ 笑ってないで助けて！）

刻一刻と増していく圧力に、ハジメが冷や汗を流しながら立香に助けを求めるが立香は腹を抱えながら声を出して笑わないようにするので精一杯な状況だった。するとそんなハジメに救世主が現れた。

光輝達だ。

「香織。こっちで一緒に食べよう。南雲はまだ寝足りないみたいだし藤丸はよく分からないが何かを食べられる状況じゃないみたいだし。せつかくの香織の美味しい料理をそんな状態のまま食べるなんて俺が許さないよ？」

爽やかに笑いながら気障なセリフを吐く光輝にキョトンとする香織。少々鈍感というか天然が入っている彼女には、光輝のイケメンスマイルやセリフも効果がないようだ。

「え？　なんで光輝くんの許しがいるの？」

素で聞き返す香織に思わず雫と立香が「ブフツ！」と吹き出した。光輝は困ったように笑いながらあれこれ話しているが、結局、ハジメの席に学校一有名な四人組が集まっている事実が変わりはなく視線の圧力は弱まらない。

立香の爆笑も収まらない。

こんなカオスな状況で深い溜息を吐きながらハジメは内心で愚痴った。

（もういつそ、立香を除いて、こいつら異世界召喚とかされないかな？　どう見てもこの四人組、そういう何かに巻き込まれそうな雰囲気ありありだろうに。……どこの世界の神か巫か巫女か誰でもいいので召喚してくれませんか〜）

現実逃避のため異世界に電波を飛ばすハジメ。いつも通り苦笑いでお茶を濁して退散するかと腰を上げかけたところで……

凍りついた。

ハジメの目の前、光輝の足元に純白に光り輝く円環と幾何学きかがく模様が現れたからだ。その異常事態には直ぐに周りの生徒達も気がついた。全員が金縛りにでもあつたかのように輝く紋様——俗に言う魔法陣らしきものを注視する。

その魔法陣は徐々に輝きを増していき、一気に教室全体を満たすほどの大きさに拡大した。

自分の足元まで異常が迫って来たことで、ようやく硬直が解け悲鳴を上げる生徒達。未だ教室にいた愛子先生が咄嗟に「皆！ 教室から出て！」と叫んだのと、魔法陣の輝きが爆発したようにカツと光つたのは同時だった。

数秒か、数分か、光によって真っ白に塗りつぶされた教室が再び色を取り戻す頃、そこには既に誰もいなかった。蹴倒された椅子に、食べかけのまま開かれた弁当、散乱す

る箸やペットボトル、教室の備品はそのままにそこにいた人間だけが姿を消していた。

この事件は、白昼の高校で起きた集団神隠しとして、大いに世間を騒がせるのだが、それはまた別の話。

第二步 「またレイシフトか……えっ？ 異世界召喚？」

両手で顔を庇い、目をギョツと閉じていたハジメは、ざわざわと騒ぐ無数の気配を感じてゆっくりと目を開いた。そして、周囲を呆然と見渡す。

まず目に飛び込んできたのは巨大な壁画だった。縦横十メートルはありそうなその壁画には、後光を背負い長い金髪を靡かせうつつすらと微笑む中性的な顔立ちの人物が描かれていた。

背景には草原や湖、山々が描かれ、それらを包み込むかのように、その人物は両手を広げている。美しい壁画だ。素晴らしい壁画だ。だがしかし、ハジメはなぜか薄ら寒さを感じて無意識に目を逸らした。

よくよく周囲を見ると、どうやら自分達は巨大な広間にいるらしいということが分かった。

素材は大理石だろうか？ 美しい光沢を放つ滑らかな白い石造りの建築物のようで、これまた美しい彫刻が彫られた巨大な柱に支えられ、天井はドーム状になっている。大聖堂という言葉が自然と湧き上がるような荘厳な雰囲気の間である。

ハジメ達はその最奥にある台座のような場所の上にいるようだった。周囲より位置

が高い。周りにはハジメと同じように呆然と周囲を見渡すクラスメイト達がいた。どうやら、あの時、教室にいた生徒は全員この状況に巻き込まれてしまったようである。

ハジメはチラリと背後を振り返った。そこには、やはり呆然としてへたり込む香織の姿があった。怪我はないようで、ハジメはホツと胸を撫で下ろす。

そしてそのそばには、周囲を警戒している様子の立香の姿もあり、自分もこの状況を説明できるであろう台座の周囲を取り囲む者達への観察に移った。

そう、この広間にいるのはハジメ達だけではない。少なくとも三十人近い人々が、ハジメ達の乗っている台座の前にいたのだ。まるで祈りを捧げるように跪き、両手を胸の前で組んだ格好で。

彼等は一様に白地に金の刺繍ししゆうがなされた法衣のようなものを纏まとい、傍らに錫杖しゃくじょうのような物を置いている。その錫杖は先端が扇状に広がっており、円環の代わりに円盤が数枚吊り下げられていた。

その内の一人、法衣集団の中でも特に豪華で煌びやかな衣装を纏い、高さ三十センチ位ありそうなこれまた細かい意匠の凝らされた烏帽子のような物を被っている七十代くらいの老人が進み出てきた。

もつとも、老人と表現するには纏う覇気が強すぎる。顔に刻まれた皺しわや老熟した

目がなければ五十代と言つても通るかもしれない。

そんな彼は手に持った錫杖をシヤラシヤラと鳴らしながら、外見によく合う深みのある落ち着いた声音でハジメ達に話しかけた。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ランゴバルドと申す者。以後、宜しくお願い致しますぞ」

そう言つて、イシユタルと名乗つた老人は、好々爺然とした微笑を見せた。

「ブフツ！」

あつ、立香が吹き出した。

~~~~~

現在、立香達は場所を移り、十メートル以上ありそうなテーブルが幾つも並んだ大広

間に通されていた。

この部屋も例に漏れず煌びやかな作りだ。素人目にも調度品や飾られた絵、壁紙が職人芸の粋を集めたものなのだろうとわかる。

おそらく、晩餐会などをする場所なのではないだろうか。上座に近い方に畑山愛子先生と光輝達四人組が座り、後はその取り巻き順に適当に座っている。立香とハジメは最後方だ。

ここに案内されるまで、誰も大して騒がなかったのは未だ現実には認識が追いついていないからだろう。イシユタルが事情を説明すると告げたことや、カリスマレベルMAXの光輝が落ち着かせたことも理由だろうが。

教師より教師らしく生徒達を纏めていると、愛子先生が涙目だった。

立香は相変わらずイシユタルの名前を聞くたび苦い顔をしていた。

全員が着席すると、絶妙なタイミングでカートを押しながらメイドさん達が入ってきた。そう、生メイドである！地球産の某聖地にいるようなエセメイドや外国にいるデブプリしたおばさんメイドではない。正真正銘、男子の夢を具現化したような美女・

美少女メイドである！

こんな状況でも思春期男子の飽くなき探究心と欲望は健在でクラス男子の大半がメイドさん達を凝視している。もつとも、それを見た女子達の視線は、氷河期もかくやという冷たさを宿していたのだが……

ハジメも傍に来て飲み物を給仕してくれたメイドさんを思わず凝視……しそうになつて慌てて立香に視線をやるとこちらをジト目で見ながら目で訴えていた

『お前までハニトラにかかつてどうすんだ』と

そんなアイコンタクトを受け取り咄嗟に別方向に視線をずらすと……見てしまった

なぜか満面の笑みを浮かべた香織や雫等の一部女子がジツと立香を見ていた。

しかし、立香はメイドに興味を示さず、それどころか目を向ける様子が全くなかった。故にハジメは見なかったことにした。

決して女子陣の目が怖かったとか、そんな事はない。ないっただけなのだ。

それはともかく  
閑話休題

全員に飲み物が行き渡るのを確認するとイシユタルが話し始めた。

「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され」

そう言って始めたイシユタルの話は実にファンタジーでテンプレで、どうしようもないくらい勝手なものだった。

要約するところだ。

まず、この世界はトータスと呼ばれている。そして、トータスには大きく分けて三つの種族がある。人間族、魔人族、亜人族である。

人間族は北一帯、魔人族は南一帯を支配しており、亜人族は東の巨大な樹海の中でひっそりと生きているらしい。

この内、人間族と魔族が何百年も戦争を続けている。

魔族は、数は人間に及ばないものの個人の持つ力が大きいらしく、その力の差に人間族は数で対抗していたそうだ。戦力は拮抗し大規模な戦争はここ数十年起きていないらしいが、最近、異常事態が多発しているという。

それが、魔族による魔物の使役だ。

魔物とは、通常の野生動物が魔力を取り入れ変質した異形のことだ、と言われている。この世界の人々も正確な魔物の生体は分かっていないらしい。それぞれ強力な種族固有の魔法が使えるらしく強力で凶悪な害獣とのことだ。

今まで本能のままに活動する彼等を使役できる者はほとんど居なかった。使役できても、せいぜい一、二匹程度だという。その常識が覆されたのである。

この意味するところは、人間族側の「数」というアドバンテージが崩れたということ。つまり、人間族は滅びの危機を迎えているのだ。

「あなた方を召喚したのは「エヒト様」です。我々人間族が崇める守護神、聖教教会の

唯一神にして、この世界を創られた至上の神。おそらく、エヒト様は悟られたのでしよう。このままでは人間族は滅ぶと。それを回避するためにあなた方を喚ばれた。あなた方の世界はこの世界より上位にあり、例外なく強力な力を持っています。召喚が実行される少し前に、エヒト様から神託があったのですよ。あなた方という「救い」を送ると。あなた方には是非その力を発揮し、「エヒト様」の御意志の下、魔人族を打倒し我ら人間族を救って頂きたい」

イシユタルはどこか恍惚こうこつとした表情を浮かべている。おそらく神託を聞いた時のことでも思い出しているのだろう。

イシユタルによれば人間族の九割以上が創世神エヒトを崇める聖教教会の信徒らしく、度々降りる神託を聞いた者は例外なく聖教教会の高位の地位につくらしい。

それを聞いて立香がより警戒を強め、ハジメが、「神の意思」を疑いなく、それどころか嬉々として従うのであろうこの世界の歪さに言い知れぬ危機感を覚えていると、突然立ち上がり猛然と抗議する人が現れた。

愛子先生だ。

「ふざけないで下さい！ 結局、この子達に戦争させようつてことでしょ！ そんなの許しません！ ええ、先生は絶対に許しませんよ！ 私達を早く帰して下さい！ きつと、ご家族も心配しているはずですよ！ あなた達のしていることはただの誘拐ですよ！」

ぷりぷりと怒る愛子先生。彼女は今年二十五歳になる社会科の教師で非常に人気がある。百五十センチ程の低身長に童顔、بوبカットの髪を跳ねさせながら、生徒のためにとあくせく走り回る姿はなんとも微笑ましく、そのいつでも一生懸命な姿と大抵空回ってしまう残念さのギャップに庇護欲を掻き立てられる生徒は少なくない。

“愛ちゃん”と愛称で呼ばれ親しまれているのだが、本人はそう呼ばれると直ぐに怒る。なんでも威厳ある教師を目指しているのだとか。

今回も理不尽な召喚理由に怒り、ウガーと立ち上がったのだ。「ああ、また愛ちゃんが頑張ってる……」と、ほんわかした気持ちでイシユタルに食ってかかる愛子先生を眺めていた生徒達だったが、次のイシユタルの言葉に凍りついた。



「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」

場に静寂が満ちる。重く冷たい空気が全身に押しかかっているようだ。誰もが何を言われたのか分からないという表情でイシユタルを見やる。

「ふ、不可能って……ど、どういうことですか!? 喚べたのなら帰せるでしょう!」

愛子先生が叫ぶ。

「先ほど言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかもエヒト様の御意思次第ということですね」

「そ、そんな……」

愛子先生が脱力したようにストンと椅子に腰を落とす。周りの生徒達も口々に騒ぎ始めた。

「うそだろ？ 帰れないってなんだよ！」

「いやよ！ なんでもいいから帰してよ！」

「戦争なんて冗談じゃねえ！ ふざけんなよ！」

「なんで、なんで、なんで……」

パニックになる生徒達。

ハジメも平気ではなかった。しかし、オタクであるが故にこういう展開の創作物は何度も読んでいる。それ故、予想していた幾つかのパターンの内、最悪のパターンではなかった。他の生徒達よりは平静を保っていた。

ちなみに、最悪なのは召喚者を奴隷扱いするパターンだったりする。

誰もが狼狽える中、イシユタルは特に口を挟むでもなく静かにその様子を眺めていた。

だが、ハジメは、なんとなくその目の奥に侮蔑が込められているような気がした。今までの言動から考えると「エヒト様選ばれておいてなぜ喜べないのか」とでも思っ

いるのかもしれない。

未だパニックが収まらない中、光輝が立ち上がりテーブルをバンツと叩いた。その音にビクツとなり注目する生徒達。光輝は全員の注目が集まったのを確認するとおもむろに話し始めた。

「皆、ここにイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに、人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシユタルさん?」

「どうですか?」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしませんまい」

「俺達には大きな力があるんですよね? ここに来てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうですね。ざっと、この世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると考えているでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

ギョツと握り拳を作りそう宣言する光輝。無駄に歯がキラリと光る。

同時に、彼のカリスマは遺憾なく効果を発揮した。絶望の表情だった生徒達が活気と冷静さを取り戻し始めたのだ。光輝を見る目はキラキラと輝いており、まさに希望を見つけたという表情だ。女子生徒の半数以上は熱っぽい視線を送っている。

「へっ、お前ならそう言うと思ったぜ。お前一人じゃ心配だからな。……俺もやるぜ？」

「龍太郎……」

「今のところ、それしかないわよね。……気に食わないけど……私もやるわ」

「雫……」

「え、えっと、雫ちゃんがやるなら私も頑張るよ！」

「香織……」

いつものメンバーが光輝に賛同する。後は当然の流れというようにクラスメイト達が賛同していく。愛子先生はオロオロと「ダメですよ」と涙目で訴えているが光輝の作った流れの前では無力だった。

結局、全員で戦争に参加することになってしまった。おそらく、クラスメイト達は本当の意味で戦争をするということがどういふことか理解してはいないだろう。崩れそうな精神を守るための一種の現実逃避とも言えるかもしれない。

ハジメはそんなことを考えながらそれとなくイシユタルを観察した。彼は実に満足そうな笑みを浮かべている。

ハジメは気がついていた。イシユタルが事情説明をする間、それとなく光輝を観察し、どの言葉に、どんな話に反応するのか確かめていたことを。

正義感の強い光輝が人間族の悲劇を語られた時の反応は実に分かりやすかった。その後は、ことさら魔族の冷酷非情さ、残酷さを強調するように話していた。おそらく、イシユタルは見抜いていたのだろう。この集団の中で誰が一番影響力を持っているのか。

世界的宗教のトップなら当然なのだろうが、油断ならない人物だと、ハジメは頭の中の要注意人物のリストにイシユタルを加えるのだった。

……そんな状況の中で立香は、ハジメにアイコンタクトしたこと以外は終始無言を貫

いていた。

## 第三步「ステータス?レベル、種火、素材……うっ頭が」

戦争参加の決意をした以上、ハジメ達は戦いの術を学ばなければならない。いくら規格外の力を潜在的に持っていると言っても、元は平和主義にどっぷり浸かりきった日本の高校生だ。いきなり魔物や魔人と戦うなど不可能である。

しかし、その辺の事情は当然予想していたらしく、イシユタル曰く、この聖教教会本山がある「神山」の麓の「ハイリヒ王国」にて受け入れ態勢が整っているらしい。

王国は聖教教会と密接な関係があり、聖教教会の崇める神——創世神エヒトの眷属であるシャルム・バーンなる人物が建国した最も伝統ある国ということだ。国の背後に教会があるのだからその繋がりの強さが分かるだろう。

ハジメ達は聖教教会の正面門にやって来た。下山しハイリヒ王国に行くためだ。

聖教教会は「神山」の頂上にあるらしく、凱旋門もかくやという荘厳な門を潜るとそこには雲海が広がっていた。

高山特有の息苦しさなど感じていなかったもので、高山にあるとは気がつかなかった。

おそらく魔法で生活環境を整えているのだろう。

ハジメ達は、太陽の光を反射してキラキラと煌めく雲海と透き通るような青空という雄大な景色に呆然と見蕩れた。

どこか自慢気なイシユタルに促されて先へ進むと、柵に囲まれた円形の大きな白い台座が見えてきた。大聖堂で見たのと同じ素材で出来た美しい回廊を進みながら促されるままその台座に乗る。

台座には巨大な魔法陣が刻まれていた。柵の向こう側は雲海なので大多数の生徒が中央に身を寄せる。それでも興味が湧くのは止められないようキョロキョロと周りを見渡していると、イシユタルが何やら唱えだした。

「彼の者へと至る道、信仰と共に開かれん——【天道】」

その途端、足元の魔法陣が燦然さんぜんと輝き出した。そして、まるでロープウェイのように滑らかに台座が動き出し、地上へ向けて斜めに下っていく。

どうやら、先ほどの「詠唱」で台座に刻まれた魔法陣を起動したようだ。この台座は正しくロープウェイなのだろう。ある意味、初めて見る「魔法」に生徒達がキヤツキヤツと騒ぎ出す。雲海に突入する頃には大騒ぎだ。



やがて、雲海を抜け地上が見えてきた。眼下には大きな町、否、国が見える。山肌からせり出すように建築された巨大な城と放射状に広がる城下町。ハイリヒ王国の王都だ。台座は、王宮と空中回廊で繋がっている高い塔の屋上に続いているようだ。

立香とハジメは、目を合わせると皮肉げに素晴らしい演出だと笑った。雲海を抜け天より降りたる「神の使徒」という構図そのままである。ハジメ達のことだけでなく、聖教信者が教会関係者を神聖視するのも無理はない。

ハジメはなんとなしに戦前の日本を思い出した。政治と宗教が密接に結びついていた時代のことだ。それが後に様々な悲劇をもたらした。だが、この世界はもつと歪かもしれない。なにせ、この世界には異世界に干渉できるほどの力をもった超常の存在が実在しており、文字通り「神の意思」を中心に世界は回っているからだ。

そして立香は前世のことを思い出していた。なにせ前世の人理修復の旅は常に命掛けで、時には自分の選択で多くの命が失われることがあった。だからこそ「命の重み」を人一倍理解している立香は、これからの事を考えると頭が痛くなった。

自分達の帰還の可能性も、世界行く末も、神のみぞ知るという現状のことを考え、徐々に鮮明になってきた王都を見下ろしながら、ハジメは言い知れぬ不安が胸に渦巻くのを必死に押し殺した。そして、とにかくできることをやっていくしかない拳を握り締め気合を入れ直し、立香はネックレスを握りしめた。

~~~~~

王宮に着くと、ハジメ達は真つ直ぐに玉座の間に案内された。

教会に負けにくいくらい煌びやかな内装の廊下を歩く。道中、騎士つぽい装備を身につけた者や文官らしき者、メイド等の使用人とすれ違うのだが、皆一様に期待に満ちた、あるいは畏敬の念に満ちた眼差しを向けて来る。立香達が何者か、ある程度知っているようだ。

ハジメは居心地が悪そうに、最後尾をこそそと付いていきながら立香に聞いた。

「ねえ立香……」

「ん？ なに、ハジメ」

「何でさつきは喋らなかつたの？ 立香なら天之河くんが戦争に参加するって宣言した辺りで止めると思ってたけど」

「あーうん。確かに、これがただの戦争だったら止めてたよ。でも……」

「あつ、そつか、今の状況は……」

「異世界召喚」

「つまり、戦争は戦争でも地球での戦争とは全く違う状況になるかもしれない」

「確かに……」

「それに、俺達はこの世界について殆ど知らない。だからこそ、おそらく最低限全員分の衣・食・住と情報が揃うであろう『勇者一行』という立場に落ち着いていた方が良いという訳。ちようど良く天之河の無駄なカリスマのお蔭でこの世界を救う素晴らしい勇者サマになれた訳だし。」

「なんか、『無駄な』の語彙が強くなかった?」

「気のせいだよ」

「えっでも『キノセイダヨ』アツハイ」

そうこうしている内に美しい意匠の凝らされた巨大な両開きの扉の前に到着すると、その扉の両サイドで直立不動の姿勢をとっていた兵士二人がイシユタルと勇者一行が来たことを大声で告げ、中の返事も待たず扉を開け放った。

イシユタルは、それが当然というように悠々と扉を通る。光輝等一部の者を除いて生徒達は恐る恐るといった感じで扉を潜った。

扉を潜った先には、真つ直ぐ延びたレッドカーペットと、その奥の中央に豪華な椅子——玉座があった。玉座の前で覇氣と威嚴を纏った初老の男が立ち上がって待っている。

その隣には王妃と思われる女性、その更に隣には十歳前後の金髪碧眼の美少年、十四、五歳の同じく金髪碧眼の美少女が控えていた。更に、レッドカーペットの両サイドには左側に甲冑や軍服らしき衣装を纏った者達が、右側には文官らしき者達がざつと三十人以上並んで佇んでいる。

玉座の手前に着くと、イシユタルは立香達をそこに止め置き、自分は国王の隣へと進んだ。

そこで、おもむろに手を差し出すと国王は恭しくその手を取り、軽く触れない程度のキスをした。どうやら、教皇の方が立場は上のようなのだ。それを見て「これで、国を動かすのが『神』であることが確定だな」とハジメは内心で溜息を吐き、立香は「あれ、王様が見たらブチ切れるだろうな」とか割と呑気なことを考えた。

そこからはただの自己紹介だ。国王の名をエリヒド・S・B・ハイリヒといい、王妃をルルアリアというらしい。金髪美少年はランデル王子、王女はリリアーナという。

後は、騎士団長や宰相等、高い地位にある者の紹介がなされた。ちなみに、途中、美少年の目が香織に吸い寄せられるようにチラチラ見ていたことから香織の魅力は異世界でも通用するようである。

その後、晩餐会が開かれ異世界料理を堪能した。見た目は地球の洋食とほとんど変わらなかった。たまにピンク色のソースや虹色に輝く飲み物が出てきたりしたが非常に美味だった。

ランデル殿下がしきりに香織に話しかけていたのをクラスの男子がやきもきしながら見ているという状況もあった。

ハジメから見れば、今の香織がランデル殿下を意識することはないだろうなと少し同情し。そもそも、十歳では無理があるか……とその同情を強めた。

一方立香の方は一人の女子生徒と話していた。

「このピンクのソース見た目は別として味は美味しい、どうにかして再現できないものか」

「確かに美味しいけど、これって再現できるものなの？」

「まあ、そこは俺の調理技術の見せ所でしょ」

「ふうん、まっ再現できたら教えてね、立香」

「わかつてるよ、*“優花”*」

その会話の相手である彼女こそ、立香とお弁当評論会をしていた女子生徒 *“園部優花”* その人である。

彼女との出会いは学校の調理実習の時間にまで逆上る

ホワンホワンワンワン (回想)

~~~~~

優花 Side

立香と明確に関わることになったのは学校の調理実習の授業の時だったわね。

その日はたまたまクジで私と立香が隣り合うことになったの、それまでは立香のことはただのクラスメイトとしか思ってたわ。

調理が始まる直前でも実習の内容であるハンバーグを作る時に何かあったらサポートしてあげようと考える程度。私の家は洋食屋で、店の手伝いをしながら料理の練習は

していたから、腕前もそこそこにあると自負していた。なのに、実際に調理を始めてみれば立香は私以上の手際でハンバーグを作っていく、完成したハンバーグを見ただけで正直、自信を無くしそうだった。でも、それで折れたら洋食屋の娘の名折れって自分を奮い立たせて立香に向かって行っちゃったわ。

最初、立香は不思議そうな顔をしていたけど私が一口貰いたいって言うのと特に嫌な顔をせずハンバーグを渡してきたから、遠慮なく食べさせてもらったんだけど。その瞬間、ついさつき奮い立たせたばかりの心が折れそうだったわ。

~~~~~  
 その時の美味しさのことを彼女はこう語った……………

「2頭身で橙色の髪の人に服を破かれるような美味しさだった」と

~~~~~

その後からかな立香と関わるようになったのは。私が立香に頼んで料理を教えてもらったり、お昼休憩にお互いのお弁当について話し合ったり。(これが後のお弁当評論会である)

そうしてる内に時々私のお店に連れてきたり、立香の家に誘われたり……………ちっ違

う！違うからね！「誘われた」って言うのは……料理！そう料理を教わる為だから！  
断じて、突然の大雨で家に泊まる事になったとか、立香の服を借りて着たとか、私が寝  
惚けて立香と一緒に寝たとか、そんなこと無いんだからね！

―以降、先程の発言を思い返し墓穴を掘ったことに気づいて何も喋れなくなった為、  
回想終了―

~~~~~

王宮では、立香の予想通りハジメ達の衣食住が保障されている旨と、訓練における教
官達の紹介もなされた。教官達は現役の騎士団や宮廷魔法師から選ばれたようだ。い
ずれ来る戦争に備え親睦を深めておけということだろう。

晚餐が終わり解散になると、各自に一室ずつ与えられた部屋に案内された。天蓋てん
がい付きベッドに愕然としたのはハジメだけではないはずだ。ハジメは、豪華な部屋に
イマイチ落ち着かない気持ちになりながら、それでも怒涛の一日に張り詰めていたもの
が溶けていくのを感じ、ベッドにダイブすると共にその意識を落とした。

~~~~~



―立香の部屋―

コンコン

「私だよ」

軽いノックの後、一人の女子の声が聞こえた。

「入ってどうぞ」

ガチャ

「やっぱり来たね」

「……流石にもう驚かないか」

「そりや、十年以上一緒に居れば驚くものも驚かなくなるよ、恵里」

「少しは驚いて欲しかったような、私のことを理解してくれて嬉しいような、複雑だな」

そう言いながら嬉しそうな顔で立香の部屋に来たのは立香のクラスメイトの一人である女子生徒「中村恵里」である。

そんな彼女は部屋に入つて来るなり一直線にベッドに腰かけていた立香に抱き着いた。

「むふふ立香の匂いだ」

「全く、毎晩一緒に寝て嗅ぎ慣れてる癖に」

「明日からはあんまり立香の部屋に来れなさそうだからね、尚更立香の匂いを嗅いでおきたいの」

「そつかくなら、しょうがない」

「うんうん、しょうがない、しょうがないんだ」

それから暫く恵里はそのまま立香を抱きしめ、立香は微笑みながら恵里の頭を撫でていた。

取り敢えず代わり映えしなさそうだから、いい加減読者も突っ込みたいだろうし、二人の関係話を話してしまおう。

はい、回想入っちゃって。~~~~~

ホワンホワンホワン

~~~~~

恵里 Side

“僕”と立香が出会った時の話をするなら、まずは立香と出会うより少し前の話をしよう。

それは、客観的に見れば『まるで小説の様な悲劇』って例えられるくらいの人生だった。

僕が五歳の時だ。お父さんと二人で公園に遊びに行つて、はしやいだ僕が不注意にも車道に飛び出てしまい、悪魔的なタイミングで突つ込んで来た自動車から庇つてお父さんが亡くなったという、ある意味、ありふれた交通事故の結果だった。

でも、結末としてありふれていなかったことが一つ。それは、その後のお母さんの態度だった。僕のお母さんは、少しいところのお嬢様だったんだけど、駆け落ちつて言

うのかな、家の反対を押し切ってお父さんと結婚したらしく、幼い僕ですら恥ずかしくなるくらいお父さんにべったりだった。

それは単に夫を愛している、というだけでなく、一步引いて客観的に見れば、依存といつてもいいレベルで。だからこそ、元々精神的に強くはなかった僕のお母さんは、最愛にして心の支柱たる夫の死に耐えられなかった。

耐えられなかったが故に、その原因へと牙を剥いた。そう、自分の娘である僕だ。普通なら、父親の死を目の当たりにして傷ついているはずの娘を、涙を呑みながら支えることが母親としての正しいあり方と言えるだろうけど。でも、僕のお母さんは、流石に人前では控えたものの、家に帰り二人きりになると、その憎悪を何のオブラートに包むこともなく僕へと向けた。

僕のお母さんにとって、娘と夫を天秤にかければ後者に傾き、僕を愛していたのも、お父さんの娘だから……という、それだけのことだったのだ。

当時、五歳の僕は、毎日のように行われる暴力と、吐き出される罵詈雑言にひたすら耐えた。お母さんの「お前のせいだ」という言葉に、納得してしまったんだ。自分の不注意がお父さんを殺した——誰よりも、そう信じていたのは、僕自身だった。

母が大好きだった父を奪った自分を、母が怒るのは当然のこと。父を死なせてしまった自分が、母から心身共に痛みを与えられるのは当然の罰。僕は、心の底からそう信じていたんだ。

同時に、この罰が終われば、鬼のような形相のお母さんも、昔のいつでも優しく微笑んでくれる穏やかなお母さんに戻ってくれる、ということもその時のバカな僕は信じていた。

お母さんの虐待は巧妙で、決して僕の体に痣などの痕跡を残すようなことはしなかった。僕もまた、お母さんの為に、そして自分への罰の為に、口外をすることはなかった。だから、その状態が何年も続いて、誰かに気づかれるということもなかった。

それでも子供である以上、そんな環境で常に笑顔になどなれるはずもなく、僕は暗い雰囲気や纏う子として学校でもほとんど交友関係はなかった。一人で大人しく、まるで嵐が過ぎ去るのをジッと蹲って待っているようなそんな様子で、それが同年代の子達には不気味だったんだろうね。

孤独と自責と心の痛みと、お母さんを想う気持ちと、寂しさ……僕の心は限界に近づいていた。そもそも、そんな状態を何年も耐えられていたことが、今になって思い返せ

ば、驚異的とも言えた。

そんな鬱屈した日々に変化が起きた。

九歳——小学三年生の時だ。お母さんが家に知らない男性を連れて来た。ガラが悪く、横柄な態度の大人の男。お母さんは、その男に甘ったるい猫なで声を発しながらべったりとしなだれかかっていた。

僕は信じられなかった。お父さんを心の底から愛していたからこそ、自分にあれだけの怒りと憎しみをぶつけたのではなかったのかと。

その考えそのものは間違っていないかった。でも、お母さんの心は、僕が思うよりもずっと弱かったらしい。誰かに支えてもらわなければ、まともに生きていけないほどに。

その日から、僕の家には、その男が住むようになった。

男の家での在り方は、それこそ三文小説にでも出てきそうな、典型的なクズそのものだった。そして、これもまた使い古されたストーリーをなぞるように、その男が僕に向

ける視線は、幼い少女に向けていい類のものではなかった。

体を這い回るような気持ち悪さに、僕は今まで以上に、家の中で息を殺すようにして過ごした。それでも、男の言動は徐々にエスカレートし、やがて、自分のことを《私》から《僕》と呼ぶようになり、髪を乱暴なショートカットにするようになった。それは、少女と見られなければ」というささやかな自衛手段だった。

学校では、ただでさえ、暗く、どこか不気味さを感じさせる僕が、ある日突然、一人称を変えて、髪を男の子のような短いものにして来たことで、僅かにいた友達とまではいかないまでも、日常会話くらいはしていた子供達までもが離れていった。僕は、いよいよ孤立してしまった。

それでも、たとえお母さんがお父さんを裏切ったように感じても、僕は信じていた。お母さんが、いつか必ず昔の優しいお母さんに戻ってくれることを。それが現実から目を逸らした、一種の逃避的な思考であることには気がつかない振りをして。

そんな、縋り付いた藁のような希望は、本当にただの藁だったと気付かされる事件が起きた。遂に、男が僕に欲望の牙を剥いたのだ。お母さんが夜の仕事に出ていないときのことだった。

幸い、と言っているのか、僕の悲鳴を聞きつけた近所の人が警察に通報したおかげで、僕の貞操が散らされることはなかった。僕自身、いつかこんな日が来るのではないかと思っていたから、窓を開けて悲鳴が届きやすいように備えていたのも助かった理由だろう。

なので、襲われたこと自体はたいしてショックなことではなかった。むしろ、チャンスだとさえ思っていた。これでようやく、目を覚ましてくれるはずだと。自分の娘を襲うような男とは縁を切って、お父さんを思い出してくれるはずだと。いずれにしろ、男は警察に捕まったのだから、縁は切れる。これで僕とお母さんの生活は、少しでも改善するのだと思っていた。

そう、思っていたのだ。

お母さんが、今まで以上の憎悪を向けてくるまでは。

警察で事情聴取を終えて、保護された僕と共に帰宅した後、真つ先に飛んできたのは、お母さんの張り手だった。そして、張り手の後に言ったのだ。「あの人を誑かすなんて」と。

どうやら、お母さんにとって、僕が男に襲われたという事件は、男のクズさを理解するきっかけではなく、『僕が自分の男をまた奪った』という認識だったらしい。娘が暴行を受けたことよりも、男と引き離されたこと、男が僕に欲望を向けたこと、その全てが気に食わなかったのだ。

父を裏切った母、自分を痛めつける母、自分が襲われたことよりも男といられないことに悲しむ母……この時、僕はようやく察したんだ。いや、本当は分かっていた目を逸らしていたことを直視したというべきだろうね。

すなわち、お母さんは僕を愛さない。昔のお母さんになど戻ってはくれない。昔の穏やかな姿ではなく、眼前の醜さに溢れた姿こそが、本性だったのだ、と。

そう理解した。

だから——僕は壊れた。

信じていたものは全て幻想だった。耐えてきたことに意味などなかった。そして、この先の未来にも希望はない。幼かった僕が壊れるには十分過ぎる要因だった。

眠りというより気絶から目覚めた翌日。まだ日も登りきらない早朝に、僕は家を抜け出した。心配したお母さんが探しに来てくれるかも知れない等という子供にありがちな愛情試しの為ではなく、自分を終わらせるため——つまり、自殺するためだ。

家を出たのは、何となくあの家で、お母さんの傍で、死にたくなかったから。

そうして、特に当てがあるでもなくふらふらと彷徨い、見つけたのが、そう、立香と出会った川だ。家から少し離れた場所にある大きな川。整備された河川敷は、よく子供の遊び場となっていてらしい。その上に架かる鉄橋の上からぼんやりと下方の流れる川を見つめていた僕は、何となくここにしようと思った。

それなりに水量のある川ではあったけど、流れが特別速いわけでもなく、また雨で増水しているというわけでもない。入水自殺には、正直不向きな川と言えただろう。むしろ、鉄橋から飛び降りた際に打ち所が悪かったという事態の方が危険性は高かった。もつとも、それも川の水により軽減されて死にはしないだろうがね。

だが、それでも、僕は、鉄橋の欄干に手をかけた。何となく、ここで死ねれば、その流れのままに、誰もいない場所へ運んでもらえるのではないかと思った。

僕の体は、その細腕によりどうにか持ち上がり、上半身が大きく欄干の外へとはみ出

た。僕は、そのまま吸い込まれるように橋の下へ飛び込んだこもうとした、その時
……

彼に出会った

——君、何してるの?と。

声を掛けられ、ボンヤリ振り返った僕の目に飛び込んできたのは綺麗で、澄み渡った空のような瞳だった。そんな瞳をした少年こそ——そう、幼い頃の立香だ。

その瞳に、一瞬目を奪われた僕はすぐに意識を戻し、早く死ぬ為に突き放すような口調で立香に言った。

「ほつといて」って

にも関わらず、立香はその言葉を無視して欄干に手をかけて、僕と同じように欄干の外へはみ出てきた。突然そんなことをしただけでも驚いたのに立香は僕と隣り合って聞いてきたんだ。

——死にたいの？と。

その時の言葉にもう一度驚いた僕は何を思ったのか。否定するわけでもなく、誤魔化すわけでもなく、今までの事を全部包み隠さず立香に話してしまったんだ。そんなことをすれば普通は警察か児童相談所に連れて行かれるってわかっていたのに。

でも、その話を聞いた立香の行動は普通じゃなかった。

「そっか、だったら……………」

「え？」

次の瞬間僕が感じたのは浮遊感と……………包み込むような暖かさだった。

ドボンッ！

そして、少し遅れて水の冷たさを感じて、ようやく自分が川の中に飛び込んだことがわかった。

にも関わらず、死ぬことができなかったと理解した僕は水上に上がってすぐに……

「プハっ！ いきなり何するのさ！」

と、さつきまで禄に思考が定まっていなかったのが嘘のように立香に怒鳴った。

未だに立香に抱きしめられている状況であることに気づかずに、だ。

でも、気づいているであろう立香は僕を離そうとはせず、怒鳴られたことを気にした様子もなく「ん？ だって、死にたかったんでしょ？」と飛び込む前と変わらない口調で聞いてきた。

イラッときた僕はそれを抑えることなく吐き出した。それはまるで、今まで抑えていたものも一緒に吐き出すように。

「た、確かにそうだけど、でも！」

「でも？」

「君まで一緒に飛び込む必要はなかったはずだよ！」

「まあ、確かにそうだね」

「そうだねって……下手をすれば君まで死んでいたんだよ!」

「その時はその時かな」

「何でそんな呑気でいられるのさ……」

「ん、実際に死ぬとは思わなかったから?」

「それだけで飛び込むなんて……って、何時まで僕を抱きしめているのさ!」

「おや、俺は君が離れようとすればすぐに離れたけど?」

「それは……いいから! 取り敢えずはなれて!」

そこでようやく抱きしめられていることに気づいた僕は立香に離れるように言った。すると、立香は簡単に離れてくれた。

「うん、良いよ」

「あつ……」

でも、立香から離れてどことなく寂しいと感じてしまった。

「ん?」

「なんでもない!」

「そう?」

「そうなの! とにかくなんで君まで飛び込んだの」

「ん……君の心からの言葉を聞くため、かな」

「え?」

その言葉を聞いた瞬間、心臓が飛び出たような感覚が僕を襲い、空気が変わったように感じた。

「な、何を言って、だって僕は……」

「死にたいと思ってた」かい? だったら何で、飛び降りようとした時に君は、あんなに震えていたの?」

「!?!」

「確かに君は絶望して、死のうとした、でも君の心にあるのはそれだけなの?」

そう言われて、僕の頭はさっきまでの苛つきやその他のこと等を忘れ、だんだんとグ

チャグチャになっていき、最後には何もわからなくなってしまった。

「わからない……わからないよ。僕は、死にたかった筈なのに、楽になりたかった筈なのに、どうして………」

何もわからず、ただ泣きそうな、否、実際に泣きながら紡いだ言葉を言い終えるより先に立香が抱きしめてきた、その時僕が感じたのは、飛び込む時にも感じた包み込むような暖かさだった。

その暖かさを与えた立香は僕を抱きしめながら言葉を紡ぐ。

「それは、君が心の何処かで誰かに助けて欲しいと願っていたからだよ」

「ふえ？」

「信じて、耐えて、裏切られて、死のうとすら思つて、でも……捨てることができなかつた君の願い」

「僕の、願い………」

その言葉は、さつきまでのグチャグチャとした思考を溶かしながら僕の心の中に入つ

てきた。

「だから、もう耐えなくていいんだ、その願いを、本当の願いを叫んでいいんだ」

「僕は……僕は……」

「君は、どうしてほしい？」

「僕を……うん、私を、助けて！」

「うん、わかった。君を助けてあげる」

「本当に？」

「うん、だから……」

「うぐ、えぐ、ううう」

「安心して、思いつきり泣いていいんだよ？」

「うう、うう ああああ!!!」

その瞬間、溢れかけてたものが抑えられなくなった。

その後のことはよく覚えていない、目が覚めて、気がついた時には知らない部屋にいて、最初は不安になったけど近くで寝息がすると思ったら、自分が寝ていたベッドのそ

ばで椅子に座った立香が寝ていたのだ。

それに安心した僕は、気が抜けたのか、またすぐに寝てしまった。

それから先は怒涛の展開だった。

まず最初にお母さんが警察に逮捕されその後、慰謝料と共に多額のお金と僕に通帳に振り込まれた。

あとから聞いた話だが、なんでも立香の両親には多方面にツテがあり、今回は警察庁長官とかいうとんでもない立場の人を使って僕の家、もとい僕のお母さんのことを徹底的に調べてもらったらしい。

すると、出るわ出るわお母さんのやばいネタ。

どうやら、僕の虐待以外にもやらかしていたらしく、これをもとに、一気にお母さんの逮捕まで持って行ったという。

次に僕自身だ。

簡単に言うなら、立香の家に居候することになった。

これもまた立香の両親がツテを使い、僕が得た財産目当ての大人達を黙らせて、藤丸

家の養子ということになったらしい。

正直、どんなツテを使ったのかは、怖かったので聞けていない。

まあ、そんなこんなで今は立香と立香の両親と幸せに暮らせているよ。

あ、そうそう、まだ話してないことがあったね。皆も気になるでしょ? 何で立香の両親がこんなあつさり僕の為に動いてくれたか。まあ、もう察してるだろうけどこれも立香のお蔭なんだよね。

僕も以前気になって立香のお母さんに聞いてみたんだ。

「え? どうしてここまでしてくれるのかって?」

「うん。だって、結局僕は立香達にとっては他人でしょ?」

「確かにそうね……でも、立香にお願いされたから、かしらね」

「どういうこと?」

「立香はね、小さい頃から自分で色々できて、中々私達を頼ることがなかったの」
「……………」

「手が掛からないって言えば聞こえはいいかもしれないけど、私達からすればそれが凄く不安だった「立香にとって私達は必要ないんじゃないか」って。でも……」

「でも?」

「そんな立香が始めて私達を頼ってくれた。しかも、今まで見てきた中で一番真剣な目で「この子を助けたい。だからお願い、手伝って」って」

「それって」

「そんな目でお願ひされたら、答えてあげなきやあの子の親失格だわ。それにね……」
「?」

「立香はね、多くの人に手を差し伸べるけど、全ての人に手を差し伸べる訳ではないの。つまり人を見る目があるのよ。だから、立香が貴方を助けた時点で私達が助ける理由は充分だったのよ」

「ていうことらしい。いやはや、立香といい親といい凄い家族だと再認識させられたよ。」

「つと長々と語っちゃったけど、こんな感じで……ん? 質問? 別にいいけど……立香のことをどう思っているか? そんなの決まってるでしょ、大好きだよ。もちろん女として、ね。まあ、二人して川に飛び込んだ時は驚いたけど、でも、立香は僕を救ってくれた。『僕』という殻から『私』を引っ張り出してくれた。そんな人を好きにならないわけ無いでしょ?」

「え? 他にも立香のことが好きになった人が居たら? 別に良いんじゃないかな、正直に

言つて同棲して^今いる僕に勝てる女がいるとは思えないし、仮にこれから増えても立香なら全員を愛してくれる、僕をちゃんと見てくれる、だから、心配なんてないね。

最後の質問? 本当に最後なんだろうね……なんで一人称が「私」じゃなくて「僕」なのか、だつて? ふふくん、それはね、「私」を見てほしいのは立香だけだからだよ。

はい、これでいいでしょ。それじゃ、僕は立香の所へ行かないと、じゃーねー

ー本人不在の為、回想終了ー

~~~~~

その後、結局は地球にいた頃と同じように二人一緒に寝て夜を明かしたとき

あくまで寝ただけだから男と女のアレやらナニやらは無いので勘違いするなよ!

思春期の男ども!

b y 作者

~~~~~

翌日から早速訓練と座学が始まった。

まず、集まった生徒達に十二センチ×七センチ位の銀色のプレートが配られた。不思議そうに配られたプレートを見る生徒達に、騎士団長メルド・ロギンスが直々に説明を始めた。

騎士団長が訓練に付きつきりでもいいのかとも思った立香だったが、対外的にも対内的にも「勇者様一行」を半端な者に預けるわけにはいかないということらしい。

メルド団長本人も、「むしろ面倒な雑事を副長（副団長のこと）に押し付ける理由ができて助かった！」と豪快に笑っていたくらいだから大丈夫なのだろう。もともと、副長さんは大丈夫ではないかもしれないが……

「よし、全員に配り終わったな？ このプレートは、ステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな、失くすなよ？」

非常に気楽な喋り方をするメルド。彼は豪放磊落な性格で、「これから戦友になろうってのにいつまでも他人行儀に話せるか！」と、他の騎士団員達にも普通に接するよ

うに忠告するくらいだ。

立香達もその方が気楽で良かった。遙はるか年上の人達からの高圧的な態度を取られると居心地が悪くてしょうがないのだ。

「プレート的一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。ステータスオープン」と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くなよ? そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アーティファクト?」

アーティファクトという聞き慣れない単語に光輝が質問をする。

「アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属達が地上にいた神代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利

だからな」

なるほど、と頷き生徒達は、顔を顰しかめながら指先に針をチヨンと刺し、プクと浮き上がった血を魔法陣に擦りつけた。すると、魔法陣が一瞬淡く輝いた。立香とハジメも同じように血を擦りつけ表を見る。

すると……

|||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：1

天職：錬成師

筋力：10

体力：10

耐性：10

敏捷：10

魔力：10

魔耐：10

技能：錬成・言語理解

と表示された。

まるでゲームのキャラにでもなったようだと感じながら、ハジメは自分のステータスを眺める。他の生徒達もマジマジと自分のステータスに注目している。

メルド団長からステータスの説明がなされた。

「全員見れたか? 説明するぞ? まず、最初に“レベル”があるだろう? それは各ステータスの上昇と共に上がる。上限は100でそれがその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示していると思うてくれ。レベル100ということとは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。そんな奴はそうそういない」

どうやらゲームのようにレベルが上がるからステータスが上がる訳ではないらしい。

「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことはわかっていないが、魔力が身体のスペックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後でお前等用に装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。なにせ救国の勇者御一行だからな。国の宝物庫大開放だぞ！」

メルド団長の言葉から推測すると、魔物を倒しただけでステータスが一気に上昇するということはないらしい。地道に腕を磨かなければならないようだ。

同時に立香は一瞬頭にキラキラと輝く種火タネヒが見えたが咄嗟に頭を振って思考を切り替える。

「次に『天職』ってのがあるだろう？ それは言うなれば『才能』だ。末尾にある『技能』と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃあ万人に一人の割合だ。非戦系も少ないと言えば少ないが……百人に一人はいるな。十人に一人という珍しくないものも結構ある。生産職は持っている奴が多いな」

ハジメは自分のステータスを見る。確かに天職欄に「錬成師」とある。どうやら「錬成」というものに才能があるようだ。

ハジメ達は上位世界の間人だから、トータスの人達よりハイスペックなのはイシュタルから聞いていたこと。なら当然だろうと思いつつ、口の端がニヤついてしまうハジメ。自分に何かしらの才能があると言われれば、やはり嬉しいものだ。

しかし、メルド団長の次の言葉を聞いて喜びも吹き飛び嫌な汗が噴き出る。

「後は……各ステータスは見たままだ。大体レベル1の平均は10くらいだな。まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！ 全く羨ましい限りだ！ あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなきゃならんからな」

この世界のレベル1の平均は10らしい。ハジメのステータスは見事に10が綺麗に並んでいる。ハジメは嫌な汗を掻きながら内心首を捻った。

(あれえ〜? どう見ても平均なんですけど……もういつそ見事なくらい平均なんですけど? チートじゃないの? 俺TUEEEEEEじゃないの? ……ほ、他の皆は? やっぱり最初はこれくらいなんじゃ……)

|||||

まさにチートの権化だった。

「ほお、流石勇者様だな。レベル1で既に三桁か。技能も普通は二つ三つなんだがな……規格外な奴め！頼もしい限りだ！」

「いや、あはは……」

団長の称賛に照れたように頭を掻く光輝。ちなみに団長のレベルは62。ステータス平均は300前後、この世界でもトップレベルの強さだ。しかし、光輝はレベル1で既に三分の一に迫っている。成長率次第では、あっさり追い抜きそうだ。

ちなみに、技能⇨才能である以上、先天的なものなので増えたりはしないらしい。唯一の例外が“派生技能”だ。

これは一つの技能を長年磨き続けた末に、いわゆる“壁を越える”に至った者が取得する後天的技能である。簡単に言えば今まで出来なかったことが、ある日突然、コツを掴んで猛烈な勢いで熟練度を増すということだ。

光輝だけが特別かと思っただけの連中も、光輝に及ばないながら十分チートだった。それにどいつもこいつも戦闘系天職ばかりなのだが……

そこで、ふと隣でステータスプレートをコンコンと叩いていた立香のステータスご気になり、立香に尋ねてみた。

「ねえ立香」

「ん？ どうかした？ ハジメ」

「ちよつと、ステータスを見せてくれない？」

「？ 別にいいけど」

|||||

藤丸立香 17歳 男 レベル：1

天職：旅人

筋力：20

体力：20

耐性：20

敏捷：20

魔力：20

魔耐：20

技能：魔術（ガンド）・言語理解

|||||

（ええ？）

立香のステータスを見て最初に感じたのは、自分のステータスと大差がないことによる安心感でも同族意識でもなく、違和感だった。

地球にいた頃とから殆どのことは普通以上にこなし、人を惹きつける魅力がありながら（それによつて男子に睨まれることが多々あったが）、それをひけらかすことの無い人格を持ち、こんな自分のことを親友だと言ってくれる、あの、立香のステータスが低いということが酷くチグハグだと思った。

しかし、その違和感が正しかったことを理解するのはもう少し後のことである。

それはともかく
閑話休題

「ハジメ？」

立香のステータスに違和感を感じ、プレート凝視していると不思議そうな顔をした立香に声を掛けられる。

「え？ あつご、ゴメン！ こんなじろじろとステータス見て」

「いやまあ、渡したの俺だから気にして無いけど」

「うん、ありがとう」

「うん、どういたしまして」

そうして、違和感を残しながら立香にステータスプレート返すとハジメは自分のステータス欄にある「錬成師」を見つめる。響きから言っただろう頭を捻っても戦闘職のイメージが湧かない。技能も二つだけ。しかも一つは異世界人にデフォの技能【言語理解】つまり、実質一つしかない。

改めて確認して、だんだん乾いた笑みが零れ始めるハジメ。報告の順番が回ってきたのでメルド団長にプレートを見せた。

今まで、規格外のステータスばかり確認してきたメルド団長の表情はホクホクしている。多くの強力無比な戦友の誕生に喜んでるのだろう。

その団長の表情が「うん?」と笑顔のまま固まり、ついで「見間違いか?」というようにプレートのコツコツ叩いたり、光にかざしたりする。そして、ジッと凝視した後、もの凄く微妙そうな表情でプレートをハジメに返した。

「ああ、その、なんだ。錬成師というのは、まあ、言ってみれば鍛冶職のことだ。鍛冶するときに便利だとか……」

歯切れ悪くハジメの天職を説明するメルド団長。

その様子にハジメを目の敵にしている男子達が食いつかないはずがない。鍛冶職ということは明らかに非戦系天職だ。クラスメイト達全員が戦闘系天職を持ち、これから戦いが待っている状況では役立たずの可能性が大きい。

檜山大介が、ニヤニヤとしながら声を張り上げる。

「おいおい、南雲。もしかしてお前、非戦系か? 鍛冶職でどうやって戦うんだよ? メルドさん、その錬成師って珍しいんっすか?」

「……いや、鍛治職の十人に一人は持っている。国お抱えの職人は全員持っているな」
「おいおい、南雲く。お前、そんなんで戦えるわけ？」

檜山が、実にウザイ感じでハジメと肩を組む。見渡せば、周りの生徒達——特に立香以外の男子はニヤニヤと嗤わらっている。

「さあ、やってみないと分からないかな」

「じゃあさ、ちよつとステータス見せてみろよ。天職がシヨボイ分ステータスは高いんだよなあ？」

メルド団長の表情から内容を察しているだろうに、わざわざ執拗しつように聞く檜山。本当に嫌な性格をしている。取り巻きの三人もはやし立てる。強い者には媚び、弱者には強く出る典型的な小物の行動だ。事実、香織や雫などは不快げに眉をひそめている。

因みに立香は既に無表情で移動を始めていた。

香織に惚れているくせに、なぜそれに気がつかないのか。そんなことを考えながら、ハジメは投げやり気味にプレートを渡す。

ハジメのプレートの内容を見て、檜山は爆笑した。そして、斎藤達取り巻きに投げ渡し内容を見た他の連中も爆笑なり失笑なりをしていく。

「ぶっはははっ、なんだこれ！ 完全に一般人じゃねえか！」

「ぎやははは、むしろ平均が10なんだから、場合によっちゃその辺の子供より弱いかもな」

「ヒアハハハ、無理無理！ 直ぐ死ぬってコイツ！ 肉壁にもならねえよ！」

次々と笑い出す生徒に香織が憤然と動き出す。

だが、皆さんはもう知っているだろう、こんな状況で「彼」が何もしない訳がないと。

「へえ、だったら俺は肉壁にはなるのかな？」

そう言いながら立香は全員に見えるようにステータスプレートを掲げた。

「立香!!」

当然、立香のステータスを知っているハジメは自分を助ける為とわかっていても焦る。

しかし、流石に遅かった。

「プツ、アハハハ〜!!! 藤丸、お前も一般人レベルじゃねえか!」

「しかも、『天職：旅人』とか非戦系以前に何もできねえじゃん!」

「ギャハハハ!!、自分からザコなのバラすとかバカじゃねえの!」

「無理! お腹いてえ、いや無理だろ藤丸も肉壁にならね〜よ!」

と檜山達は更に爆笑し、一部の女子の視線はもはやそれだけで人を貫けるレベルまでにのし上がろうとしていた。

しかし、立香は彼らの爆笑も予想通りだったのか次の行動に移った。

「そっか、じゃあ肉壁は辞めとくよ。代わりに……………」スツ

「あ? グハツ」ドサツ

「「はっ!」」

「人をバカにする奴を転ばせることにしよう」

その動きを理解できた者が何人いただろう。一部を除いて、殆どの者は立香を見ていたにも関わらず、気づけば立香は檜山が立っていた場所に移動し、檜山はいつの間にか転んでいる状態だった。

そして、立香が檜山にしたことを理解した者の内の一人である雫が困惑しながらも、立香に話しかける。

「立香、貴方まさか」

「あ、やっぱり雫は気づいたか」

「どういうこと? 雫ちゃん。藤丸くんは何をやったの?」

その場にいる者の総意でもある疑問を香織が雫に問う。

「香織、立香はね…… “縮地” をしたの」

「縮地?」

「馬鹿な！　ありえん！」

「メルド団長？」

雫の説明を聞いて最も驚いていたのは同じく立香のしていたことを理解出来ていたメルド団長だった。

「さつき見た藤丸のステータスには縮地の技能など無かったぞー！」

そう、それがメルド団長を驚かせた理由である。ステータスとはその人物の全てを記すと言っても過言ではないものだ。にも関わらず、立香は自身のステータスに記されていない“縮地”を使ったという。そして、それをメルド団長自身が理解してしまったからこそ、余計に驚かせる要因となったのだ。

「ああ、安心してくださいメルド団長。別に俺はステータスを偽っている訳ではないです」

「では何故……」

「簡単ですよ。俺は縮地を再現したんです」

「再現?」

「はい。俺達のいた世界でも“縮地”というのは存在します。そして、俺はそれを再現した。たったそれだけです」

「なるほど、ただの再現だからステータスには現れないと」

「まあ、こつちの知識が殆ど無いので一概にそうだと言いきれませんが」

「そういうもんなのか?」

「大丈夫なのでは?」

「なら問題無い、のか?」

「ええ、問題ない………と思いますよ?」

「……………」

「……………」

どこことなく微妙な空気感になりつつある状況で誰も動けない中、どうにか復活できた者がいた。

我らが愛子先生だ。

「はっ！　そうです！　檜山君それに他の人も笑つてはいけませんよ！　仲間を笑うなんて先生は許しません！　ええ、先生は絶対許しません！　早くプレートに南雲君に返さない！」

ちっこい体で精一杯怒りを表現する愛子先生。その姿に毒気を抜かれたのかプレートがハジメに返され、空気も少しづつ戻っていく。

そんな中、愛子先生はハジメに向き直ると励まげますように肩を叩いた。

「南雲君、気にすることはありませんよ！　先生だつて非戦系？　とかいう天職ですし、ステータスだつてほとんど平均です。南雲君は一人じゃありませんからね！」

そう言つて「ほらっ」と愛子先生はハジメに自分のステータスを見せた。

|||||

畑山愛子　25歳　女　レベル：1

天職：作農師

筋力：5

体力：10

耐性：10

敏捷：5

魔力：100

魔耐：10

技能：土壌管理・土壌回復・範囲耕作・成長促進・品種改良・植物系鑑定・肥料生成・
混在育成・自動収穫・発酵操作・範囲温度調整・農場結界・豊稔天雨・言語理解

|||||

ハジメは死んだ魚のような目をして遠くを見だした。

「あれっ、どうしたんですか！ 南雲君！」とハジメをガクガク揺さぶる愛子先生。

確かに全体のステータスは低いし、非戦系天職だろうことは一目でわかるのだが……
魔力だけなら勇者に匹敵しており、技能数なら超えている。糧食問題は戦争には付きもの
だ。ハジメのようにいくらでも優秀な代わりのいる職業ではないのだ。つまり、愛子
先生も十二分にチートだった。

さつき立香にフォローしてもらったばかりのハジメのダメージは深い。

「あらあら、愛ちゃんつたら止め刺しちやったわね……」

「な、南雲くん！ 大丈夫!?!」

「愛ちゃん先生、折角俺がフォローしたのに……ハジメ、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」

反応がなくなったハジメを見て雫が苦笑いし、香織が心配そうに駆け寄り、立香「流石に愛ちゃん先生のは無理だ」と諦めてお経を唱え始めた。愛子先生は「あれえく？」と首を傾げている。相変わらず一生懸命だが空回る愛子先生にほっこりするクラスメイト達。

ハジメに対する嘲笑を止めるという目的自体達成できたものの、上げて落とす的な気遣いと、これからの前途多難さに、ハジメは乾いた笑みを浮かべるのだった。

第四步「(今は) 最弱とイジメ (るのはこちら側)」

ハジメが自分の最弱ぶりと役立たず具合を突きつけられた日から二週間が経った。

現在、ハジメは訓練の休憩時間を利用して王立図書館にて調べ物をしている。その手には『北大陸魔物大図鑑』というなんの捻りもないタイトル通りの巨大な図鑑があった。

なぜ、そんな本を読んでいるのか。それは、この二週間の訓練で、成長するどころか役立たずぶりがより明らかになったただだったからだ。力がない分、知識と知恵でカバーできないかと訓練の合間に勉強しているのである。

そんなわけで、ハジメは、しばらく図鑑を眺めていたのだが……突如、「はあく」と溜息を吐いて机の上に図鑑を放り投げた。ドスンッという重い音が響き、偶然通りかかった司書が物凄い形相でハジメを睨む。

ビクツとなりつつ、ハジメは急いで謝罪した。「次はねえぞ、コラッ！」という無言の睨みを頂いてなんとか見逃してもらった。自分で自分に「何やってんだ」とツツコミ、再

び溜息を吐いた。

ハジメはおもむろにステータスプレートを取り出し、頬杖をつきながら眺める。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：2

天職：錬成師

筋力：12

体力：12

耐性：12

敏捷：12

魔力：12

魔耐：12

技能：錬成・言語理解

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

これが、二週間みっちり訓練したハジメの成果である。「刻み過ぎだろ！」と、内心

ツツコミをいれたのは言うまでもない。ちなみに光輝はというと、

|||||

天之河光輝 17歳 男 レベル：10

天職：勇者

筋力：200

体力：200

耐性：200

敏捷：200

魔力：200

魔耐：200

技能：全属性適性・全属性耐性・物理耐性・複合魔法・剣術・剛力・縮地・先読
高速魔力回復・気配感知・魔力感知・限界突破・言語理解

|||||

ざつとハジメの五倍の成長率である。

おまけに、はじめには魔法の適性がないこともわかった。

魔法適性がないとはどういうことか。この世界における魔法の概念を少し説明しよう。

トータスにおける魔法は、体内の魔力を詠唱により魔法陣に注ぎ込み、魔法陣に組み込まれた式通りの魔法が発動するというプロセスを経る。魔力を直接操作することはできず、どのような効果の魔法を使うかによって正しく魔法陣を構築しなければならぬ。

そして、詠唱の長さに比例して流し込める魔力は多くなり、魔力量に比例して威力や効果も上がっていく。また、効果の複雑さや規模に比例して魔法陣に書き込む式も多くなる。それは必然的に魔法陣自体も大きくなるということに繋がる。

例えば、RPG等で定番の「火球」を直進で放つだけでも、一般に直径十センチほどの魔法陣が必要になる。基本は、属性・威力・射程・範囲・魔力吸収（体内から魔力を吸い取る）の式が必要で、後は誘導性や持続時間等付加要素が付く度に式を加えていき魔法陣が大きくなるということだ。

しかし、この原則にも例外がある。それが適性だ。

適性とは、言ってみれば体質によりどれくらい式を省略できるかという問題である。例えば、火属性の適性があれば、式に属性を書き込む必要はなく、その分式を小さくできると言った具合だ。

この省略はイメージによつて補完される。式を書き込む必要がない代わりに、詠唱時に火をイメージすることで魔法に火属性が付加されるのである。

大抵の人間はなんらかの適性を持っているため、上記の直径十センチ以下が平均であるのだが、ハジメの場合、全く適性がないことから、基本五式に加え速度や弾道・拡散率・収束率等事細かに式を書かなければならなかった。

そのため、「火球」一発放つのに直径二メートル近い魔法陣を必要としてしまい、実戦では全く使える代物ではなかったのだ。

ちなみに、魔法陣は一般には特殊な紙を使った使い捨てタイプか、鉱物に刻むタイプの二つがある。前者は、バリエーションは豊かになるが一回の使い捨てで威力も落ちる。後者は嵩張るので種類は持てないが、何度でも使えて威力も十全というメリット・デメリットがある。イシユタル達神官が持っていた錫杖は後者だ。

そんなわけで近接戦闘はステータス的に無理、魔法は適性がなくて無理、頼みの天職・技能の【錬成】は鉱物の形を変えたりくつつけたり、加工できるだけで役に立たない。錬成に役立つアーティファクトもないと言われ、錬成の魔法陣を刻んだ手袋をもらっただけ。

一応、頑張つて落とし穴？ とか、出っ張り？ を地面に作ることはできるようになったし、その規模も少しずつ大きくはなっているが……

対象には直接手を触れなければ効果を発揮しない術である以上、敵の眼前でしゃがみ込み、地面に手を突くという自殺行為をしなければならず、結局のところ戦闘では役立たずであることに変わりはない。

この二週間ですっかりクラスメイト達から無能のレッテルを貼られたハジメ。仕方なく知識を溜め込んでいるのであるが……なんとも先行きが見えず、ここ最近すっかり溜息が増えた。

いつそ、旅にでも出てしまおうかと、図書館の窓から見える青空をボーと眺めながら思う。大分末期である。

ハジメは行くならどこに行こうかと、ここ二週間誰よりも頑張った座学知識を頭の中に展開しながら物思いに耽ふけり始めようとした時、自分の目の前から聞き慣れた声が聞こえた……

「ハジメ、今持つてる魔物図鑑、読まないなら貸してくれ」

その声の主はいつもお馴染み藤丸立香^{主人公}である。

そして立香もハジメと同じように訓練の休憩時間によく図書館にいる光景をハジメは目撃していた。

それに疑問を持ったハジメは立香に図鑑を渡して後に聞いてみた

「ん、それはね、ほれっ」

受け取った立香は図鑑を読みながら、ステータスプレートを机の上でハジメの目の前に滑らせるという何気に凄い高等技術を発揮しながらハジメに渡した

「何それカッコいい、後で教えて貰お」なんてことを考えつつ立香のステータスを見てみ

ると、

藤丸立香 17歳 男 レベル：3

天職：旅人

筋力：23

体力：23

耐性：23

敏捷：27

魔力：28

魔耐：25

技能：魔術（ガンド）・言語理解

ハジメよりは上昇値が上なもの、やはり立香も刻みまくったステータスだった。

「見ての通り、成長の見込みがなさそうだったからね、鍛える方向性を肉体面から頭脳面

にシフトチェンジした訳」

「な、なるほど……………」

自分にとってはあまりに説得力のある理由に思わずもってしまおう。

そこでふと、立香のステータスの技能の部分にある『魔術(ガンド)』に目が行き、一瞬間くか迷ったものの好奇心には勝てず立香に聞いてみると、以外とあっさりと答えてくれた。

「それね、俺もメルド団長とかに聞いてみたけど見たこと聞いたこともないんだってさ、んで試しに使ってみると黒い球体状の魔力弾が指先から発射されて、物に当たっても何も起きないけど、魔物を含めた生物に当たると動きを停止させる、要はスタン状態にさせることができるのがわかった」

「それって結構強くない?」

「まあ、攻撃力は1ミリも無いけどね、ただ、スタンさせた対象以外が何かしらのアクション、ゲームに例えるとスタンさせてから1ターン経過するまではスタンが解除されないのが検証の結果だよ」

「うん、割とチートだ」

「さつきはゲームに例えたけど、実際は自分以外の味方とかほかのエネミーが対象に何かするのでもスタン解除に繋がるけど」

「つまり、1対1か1体複数でなきやその強みが活かせないってことか」

「そーゆーこと」

「あ、そういえば、縮地の方はどうなったの?」

「そっちはあの後、俺が縮地を再現できることで話題になったらしいんだけど、結局技能としての【縮地】の方が強いって判断されて、俺の場合は『多少速いだけの無能』ということになったんだよね」

「そっか〜」

「それで、ハジメの方は何かしらこの世界についてわかった?」

そこでハジメは自分が得た知識を立香と共有した

亜人族は被差別種族であり、基本的に大陸東側に南北に渡って広がる【ハルツエナ樹海】の深部に引き籠っている。なぜ差別されているのかというと彼等が一切魔力を持っていないからだ。

神代において、エヒトを始めとする神々は神代魔法にてこの世界を創つたと言い伝えられている。そして、現在使用されている魔法は、その劣化版のようなものと認識され

ている。それ故、魔法は神からのギフトであるという価値観が強いのだ。もちろん、聖教教会がそう教えているのだが。

そのような事情から魔力を一切持たず魔法が使えない種族である亜人族は神から見放された悲しき種族と考えられているのである。

じゃあ、魔物はどうなるんだよ？ ということだが、魔物はあくまで自然災害的なものとして認識されており、神の恩恵を受けるものとは考えられていない。ただの害獣らしい。なんともご都合解釈なことだと、ハジメは内心呆れた。

なお、魔人族は聖教教会の「エヒト様」とは別の神を崇めているらしいが、基本的な亜人に対する考え方は同じらしい。

この魔人族は、全員が高い魔法適性を持っており、人間族より遥かに短い詠唱と小さな魔法陣で強力な魔法を繰り出すらしい。数は少ないが、南大陸中央にある魔人の王国ガーランドでは、子供まで相当強力な攻撃魔法を放てるようで、ある意味、国民総戦士の国と言えるかもしれない。

人間族は、崇める神の違いから魔人族を仇敵と定め(聖教教会の教え)、神に愛されていないと亜人族を差別する。魔人族も同じだ。亜人族は、もう放っておいてくれといっ

た感じだろうか？ どの種族も実に排他的である。

【海上の町エリセン】は海人族と言われる亜人族の町で西の海の沖合にある。亜人族の中で唯一、王国が公で保護している種族だ。

その理由は、北大陸に出回る魚介素材の八割が、この町から供給されているからである。全くもって身も蓋もない理由だ。「壮大な差別理由はどこにいった？」と、この話を聞いたときハジメは内心盛大にツツコミを入れたものだ。

ちなみに、西の海に出るには、その手前にある【グリュエン大砂漠】を超えなければならぬ。この大砂漠には輸送の中継点として重要なオアシス【アンカジ公国】や【グリュエン大火山】がある。この【グリュエン大火山】は七大迷宮の一つだ。

七大迷宮とは、この世界における有数の危険地帯をいう。

ハイリヒ王国の南西、グリュエン大砂漠の間にある【オルクス大迷宮】と先程の【ハルツエナ樹海】もこれに含まれる。

七大迷宮でありながらなぜ三つかというと、他は古い文献などからその存在は信じられているのだが詳しい場所が不明で未だ確認はされていないからだ。

一応、目星は付けられていて、大陸を南北に分断する「ライセン大峡谷」や、南大陸の【シユネー雪原】の奥地にある「氷雪洞窟」がそうではないかと言われている。

帝国とは、【ヘルシャー帝国】のことだ。この国は、およそ三百年前の大規模な魔人族との戦争中にとある傭兵団が興した新興の国で、強力な傭兵や冒険者がわんさかと集まった軍事国家らしい。実力至上主義を掲げており、かなりブラックな国のようだ。

この国には亜人族だろうがなんだろうが使えるものは使うという発想で、亜人族を扱った奴隷商が多く存在している。

帝国は、王国の東に【中立商業都市フューレン】を挟んで存在する。

【フューレン】は文字通り、どの国にも依らない中立の商業都市だ。経済力という国家運営とは切っても切り離せない力を最大限に使い中立を貫いている。欲しいモノがあればこの都市に行けば手に入ると言われているくらい商業中心の都市である。

「……てな感じかな」

「やっぱり、現状手に入るのはそのくらいか」

「てことはそつちも?」

「俺の方で調べても、手に入るのは全部似たような情報ばつかだね」

「うゝん」

「まっ、無い物ねだりしてもしょうがないか」

「あ、じゃあさ立香さつきも出てきた「ケモミミとマーメイド?」……」

「ハジメもある意味素直だよゝ」

「だって、ケモミミ無しでは異世界トリップは語れないしマーメイドは男のロマンじゃないか」

「否定はしないけど……」

「でしよゝつてやばっ訓練の時間だ!」

「あく、俺の方はまだ掛かるから先行つて」

「わかった。じゃあ後でね立香!」

「はいよゝ」

訓練の時間が迫っていることに気がついて慌てて図書館を出るハジメ。王宮までの道のりは短く目と鼻の先ではあるが、その道程にも王都の喧騒が聞こえてくる。露店の店主の呼び込みや遊ぶ子供の声、はしやぎ過ぎた子供を叱る声、実に日常的で平和だ。

(やっぱり、戦争なきさそうだからって帰してくれないかなあ)

ハジメは、そんな有り得ないことを夢想した。これから始まる憂鬱な時間からの現実逃避である。

~~~~~

訓練施設に到着すると既に何人もの生徒達がやって来て談笑したり自主練したりしていた。どうやら案外早く着いたようである。ハジメは、自主練でもして待つかと、支給された西洋風の細身の剣を取り出した。

と、その時、唐突に後ろから衝撃を受けてハジメはたたらを踏んだ。なんとか転倒は免れたものの抜き身の剣を目の前にして冷や汗が噴き出る。顔をしかめながら背後を振り返ったハジメは予想通りの面子に心底うんざりした表情をした。

そこにいたのは、檜山大介率いる小悪党四人組(ハジメ命名)である。訓練が始まってからというもの、ことあるごとにハジメにちよっかいをかけてくるのだ。ハジメが訓

練を憂鬱に感じる半分の理由である。(もう半分は自分の無能っぷり)

「よお、南雲。なにしてんの？ お前が剣持つても意味ないだろが。マジ無能なんだしよ〜」

「ちよつ、檜山言い過ぎ！ いくら本当だからつてさ〜、ギャハハハ」

「なんで毎回訓練に出てくるわけ？ 俺なら恥ずかしくて無理だわ！ ヒヒヒ」

「なあ、大介。こいつさあ、なんかもう哀れだから、俺らで稽古つけてやんね？」

一体なにがそんなに面白いのかニヤニヤ、ゲラゲラと笑う檜山達。

「ああ？ おいおい、信治、お前マジ優し過ぎじゃね？ まあ、俺も優しいし？ 稽古つけてやつてもいいけどさあ〜」

「おお、いいじゃん。俺ら超優しいじゃん。無能のために時間使つてやるとかさ〜。南雲〜感謝しろよ〜」

そんなことを言いながら馴れ馴れしく肩を組み人目につかない方へ連行していく檜山達。それにクラスメイト達は気がついたようだが見て見ぬふりをする。

「いや、一人ですから大丈夫だって。僕のことは放っておいていいからさ」

一応、やんわりと断ってみるハジメ。

「はあ？ 俺らがわざわざ無能のお前を鍛えてやろうつてのに何言つてんの？ マジ有り得ないんだけど。お前はただ、ありがとうございますって言つてればいいんだよ！」

そう言つて、脇腹を殴る檜山。ハジメは「ぐっ」と痛みに顔をしかめながら呻く。

檜山達も段々暴力にためらいを覚えなくなつてきているようだ。思春期男子がいきなり大きな力を得れば溺れるのは仕方ないこととはいえ、その矛先を向けられては堪つたものではない。かと言つて反抗できるほどの力もない。ハジメは歯を食いしばるしかなかった。

やがて、訓練施設からは死角になつている人気のない場所に来ると、檜山はハジメを突き飛ばした。

「ほら、さっさと立てよ。楽しい訓練の時間だぞ?」

檜山、中野、斎藤、近藤の四人がハジメを取り囲む。ハジメは悔しさに唇を噛み締めながら立ち上がった。

「ぐあ?」

その瞬間、背後から背中を強打された。近藤が剣の鞘で殴ったのだ。悲鳴を上げ前のめりに倒れるハジメに、更に追撃が加わる。

「ほら、なに寝てんだよ? 焦げるぞ。ここに焼撃を望む——【火球】」

中野が火属性魔法【火球】を放つ。倒れた直後であることと背中痛みで直ぐに起き上がることができないハジメは、ゴロゴロと必死に転がりなんとか避ける。だがそれを見計らったように、今度は斎藤が魔法を放った。

「ここに風撃を望む——【風球】」

風の塊が立ち上がりかけたハジメの腹部に直撃し、ハジメは仰向けに吹き飛ばされた。「オエツ」と胃液を吐きながら蹲る。

魔法自体は一小節の下級魔法だ。それでもプロボクサーに殴られるくらいの威力はある。それは、彼等の適性の高さで魔法陣が刻まれた媒介が国から支給されたアーティファクトであることが原因だ。

「ちよ、マジ弱すぎ。南雲さあ、マジやる気あんの？」

そう言つて、蹲うずくまるハジメの腹に蹴りを入れる檜山。ハジメは込み上げる嘔吐おうと感を抑えるので精一杯だ。

その後もしばらく、稽古という名のリンチが続く。ハジメは痛みには耐えながらも自分だけ弱いのかと悔しさに奥歯を噛み締める。本来なら敵わないまでも反撃くらいすべきかもしれない。

しかし、小さい頃から、人と争う、誰かに敵意や悪意を持つということがどうにも苦手だったハジメは、誰かと喧嘩しそうなときはいつも自分が折れていた。自分が我慢すれば話はそこで終わり。喧嘩するよりずっといい、そう思ってしまうのだ。

そんなハジメを優しいと言う人もいれば、ただのヘタレという人もいる。ハジメ自身にもどちらかわからないことだ。

そろそろ痛みが耐え難くなってきた頃、突然、

ドゴツ！

「カハッ！」

さっきまでハジメを蹴っていた檜山がふき飛んだ

そして、そこに立っていたのは

「まったく、遅いよ……立香」

「ゴメン、ハジメ……さて」

その表情はまるで……

「「ヒィ！」」

「次は、どいつだ？」

自分達の命を刈り取る死神のようだった、と彼らは後に語った。

そこからは一方的な蹂躪だった。ステータスに大きな差がある筈なの彼らの魔法や武器による攻撃をことごとくかわし、時に拳で、時に蹴りで、一分もしない内に四人は倒れた。しかし、立香が手加減していたのか、四人は懲りずに立ち上がり、  
そうして、四人は一齐に立香が襲いかかろうとした時、

「何やってるの!?!」

と女の子の声でした。

その声の方向を向くと「やべっ」という顔をする檜山達。それはそうだろう、そこに居たの女の子は檜山達が惚れている香織だったのだから。しかも香織だけでなく雫や光輝、龍太郎もいる。

「いや、誤解しないで欲しいんだけど、俺達は、南雲達の特訓に付き合っただけで……」  
「藤丸くん！」

檜山の言葉を無視して、香織は、ゲホツゲホツと咳き込み蹲るハジメに駆け寄る……  
のでは無く。ハジメを介抱していた立香の方に駆け寄った。悲しい事に、襲われそうな状況の立香の様子を見た瞬間、檜山達のことだけでなく、怪我をしているハジメのことまで頭から消えたようである。

「特訓ね。それにしては随分と一方的みたいだけど？」

「いや、それは……」

「言い訳はいい。いくら藤丸と南雲が戦闘に向かないからって、同じクラスの仲間だ。二度とこういうことはするべきじゃない」



「くっただらねえことする暇があるなら、自分を鍛えろつての」

三者三様に言い募られ、檜山達は誤魔化し笑いをしながらそそくさと立ち去った。  
一方香織の方には

「藤丸くん大丈夫?! 怪我は? 痛いところは? どんな傷でも私が治すからね!」

「ありがとう白崎さん。でも大丈夫。どこも怪我してないし、痛くも無いから。だから、俺じゃなくてハジメを治してあげて。」

「あっうん。わかった」

立香の言葉でようやく始まった香織の治癒魔法によりハジメが徐々に癒されていく。

「あ、ありがとう。白崎さん。助かったよ」

苦笑いするハジメに香織は首を振る。

「いつもあんなことされてたの? それなら言ってくれれば」

不安そうな顔で檜山達が去った方とハジメの顔を交互に見る香織に、ハジメは誤魔化すことにした。

「いや、そんないつもってわけじゃないから。大丈夫だから、ホント気にしないで」  
「でも……」

それでも納得できないような香織に再度「大丈夫」と笑顔を見せるハジメ。渋々ながら、ようやく香織も引き下がる。

「南雲君、何かあれば遠慮なく言ってちょうだい。香織もその方が納得するわ。勿論あなたもよ、立香」

渋い表情をしている香織を横目に、苦笑いしながら雫が言う。それに礼を言うハジメと肩をすくめる立香。しかし、そこで水を差すのが勇者クオリティー。

「だが、南雲自身ももつと努力すべきだ。弱さを言い訳にしているは強くなれないだろ

う？ 聞けば、訓練のないときは図書館で読書に耽っているそうじゃないか。俺なら少しでも強くなるために空いている時間も鍛錬にあてるよ。南雲も、もう少し真面目になった方がいい。檜山達も、南雲の不真面目さをどうにかしようとしたのかもかもしれないだろ？」

何をどう解釈すればそうなるのか。ハジメは半ば呆然としながら、ああ確かに天之河は基本的に性善説で人の行動を解釈する奴だったと苦笑いする。

天之河の思考パターンは、基本的に人間はそう悪いことはしない。そう見える何かをしたのなら相応の理由があるはず。もしかしたら相手の方に原因があるのかもしれない！ という過程を経るのである。

しかも、光輝の言葉には本気で悪意がない。真剣にハジメを思っただけで忠告しているのだ。ハジメは既に誤解を解く気力が萎なえてきている。ここまで自分の思考というか正義感に疑問を抱かない人間には何を言っても無駄だろうと。

しかし、そこで終わらないのも勇者クオリティーなのだろう。

「それにこれは藤丸にも言えることだぞ。」

「ん？」

「どうやら藤丸も訓練がない時は読書してららしいからな。俺達は世界を救う立場である自覚をしっかりと持つべきだ。それに俺達は魔人族から世界を救わなきゃならない。だからこそ、一人一人が努力すべきなんだ。」

「……………」

「聞いているのか？ 俺は藤丸の為に言つて「ハジメ、立てるか？ もうすぐで訓練が始

まる、行こう」おい！」

「ねえ、天之河……………」

いつもと違う立香にその場にいた全員が底知れぬ不安に駆られる

「な、何だ」

「少し、黙つてくれない？ 思わず……………」

そして、次の瞬間

燃やしてしまいそうだから

「

「「「「「「「」」」」」」」

息をすることすら忘れてしまう恐怖が全身を襲った

“燃やす” という言葉はありふれたものだ。地球にいた頃も小説やテレビ、教科書なんかでも見たり聞いたりしてきた。トータスでは魔法という存在によって更に言葉にする機会が増えた。

にも関わらず、立香の放った「燃やす」という言葉に信じられないような重みを感じたのだ。まるで、「燃やす」という言葉に自分達が知る以外の「ナニか」があるような気がして。

あの後、立香がその場からいなくなったことによってようやく五人が動けるようになった。

ハジメ、香織、雫、龍太郎が立香を追いかけると訓練施設の隅で右手でネックレスを握り締めている立香を見つけた。少し怯えながら立香に近づくと、それに気づいた立香はいつもの様子に戻っており、「怯えさせてゴメンね」と謝ってきたので怯えることはなく

なったが、訓練が終わるまで立香に対する心配は拭えることはなかった。

~~~~~

訓練が終了した後、いつもなら夕食の時間まで自由時間となるのだが、今回はメルド団長から伝えることがあると引き止められた。何事かと注目する生徒達に、メルド団長は野太い声で告げる。

「明日から、実戦訓練の一環として【オルクス大迷宮】へ遠征に行く。必要なものはこちらで用意してあるが、今までの王都外での魔物との実戦訓練とは一線を画すと思ってくれ！ まあ、要するに気合入れろってことだ！ 今日はずっくり休めよ！ では、解散！」

そう言って伝えることだけ伝えるときさつきと行ってしまった。ざわざわと喧騒に包まれる生徒達の最後尾でハジメは天を仰ぐ。

(……本当に前途多難だ)

第五歩「月下の語らい……あつまたオリオンが射殺された気がする」

【オルクス大迷宮】

それは、全百階層からなると言われている大迷宮である。七大迷宮の一つで、階層が深くなるにつれ強力な魔物が出現する。

にもかかわらず、この迷宮は冒険者や傭兵、新兵の訓練に非常に人気がある。それは、階層により魔物の強さを測りやすいからということと、出現する魔物が地上の魔物に比べ遥かに良質の魔石を体内に抱えているからだ。

魔石とは、魔物を魔物たらしめる力の核をいう。強力な魔物ほど良質で大きな核を備えており、この魔石は魔法陣を作成する際の原料となる。魔法陣はただ描くだけでも発動するが、魔石を粉末にし、刻み込むなり染料として使うなりした場合と比較すると、その効果は三分の一程度にまで減退する。

要するに魔石を使う方が魔力の通りがよく効率的ということだ。その他にも、日常生活の魔法具などには魔石が原動力として使われる。魔石は軍関係だけでなく、日常生活にも必要な大変需要の高い品なのである。

ちなみに、良質な魔石を持つ魔物ほど強力な固有魔法を使う。固有魔法とは、詠唱や魔法陣を使えないため魔力はあっても多彩な魔法を使えない魔物が使う唯一の魔法である。一種類しか使えない代わりに詠唱も魔法陣もなしに放つことができる。魔物が油断ならない最大の理由だ。

立香達は、メルド団長率いる騎士団員複数名と共に、「オルクス大迷宮」へ挑戦する冒険者達のための宿場町「ホルアド」に到着した。新兵訓練によく利用するよう王国直営の宿屋があり、そこに泊まる。

久しぶりに普通の部屋を見た気がするハジメはベッドにダイブし「ふう〜」と気を緩めた。全員が最低でも二人部屋なので組み合わせは当然立香とハジメだ。「気楽でいいね」とハジメが「何だか懐かしいね」と立香がそれぞれ呟く。

明日から早速、迷宮に挑戦だ。今回は行っても二十階層までらしく、それくらいなら、立香やハジメのような最弱キャラがいても十分カバーできると団長から直々に教えら

れた。

ハジメとしては面倒掛けて申し訳ありませんと言う他ない。むしろ、王都に置いて行つてくれてもよかつたのに……とは空気を読んで言えなかつたへタレなハジメである。

しばらく、借りてきた迷宮低層の魔物図鑑を読んでいたハジメだが、少しでも体を休めておこうと少し早いが眠りに入ることにした。学校生活で鍛えた居眠りスキルは異世界でも十全に発揮される。

しかし、ハジメがウトウトとまどろみ始めたその時、ハジメの睡眠を邪魔するように扉をノックする音が響いた。

少し早いと言つても、それは日本で徹夜が日常のハジメにしてはとということ、トータスにおいては十分深夜にあたる時間。怪しげな深夜の訪問者に、すわつ、檜山達かつ！ と、ハジメは、緊張を表情に浮かべる。

だが、立香はどういう訳か緊張も警戒もしておらず、それを見たハジメは不思議に思つたが、

その疑問は続く声で判明した。

「藤丸くん、南雲くん、起きてる？　白崎です。ちよつと、いいかな？」

なんですと？　と、一瞬硬直していたが、立香が扉に向かったことでハジメの硬直も解けた。そして、立香が鍵を外して扉を開けると、そこには純白のネグリジエにカーデイガンを羽織っただけの香織が立っていた。

「……………全く、白崎さんは……………」

「どうしたの立香って……………なんでやねん」

「えっ?」

ある意味、衝撃的な光景に呆れる立香と思わず関西弁でツツコミを入れてしまうハジメ。よく聞こえなかったのか香織はキョトンとしている。

ハジメは、慌てて気を取り直すと、香織の対応を立香に任せて部屋の中に戻った。いくらリアルに興味が薄いとはいえ、ハジメも立派な思春期男子。今の香織の格好は少々刺激が強すぎる。

逆に立香は特に慌てたりすることなく、香織に要件を聞いた。立香とて男だ、今の香織の格好に何も感じないことはないが、前世のカルデアにいた、もつと無自覚の顔光凄^無い女性やもつとヤバイ女性のことを思い出し、精神を沈静化させたのだ。

まあ、そんな事が立香の脳内で繰り広げられたことなど知る訳がないハジメは（もしかして立香……枯れてる？）なんてことを考えていたのだが……

それはともかく
閑話休題

「いや、なんでもないよ。それで、どうしたのかな？ 白崎さん。何か連絡事項でも？」

「ううん。その、少し藤丸さんと南雲さんと話したくて……やっぱり迷惑だったかな？」

「俺は構わないけど、ハジメは？」

「……………どうぞ」

最も有り得そうな用件を予想して尋ねるが、香織は、あつさり否定して弾丸を撃ち込んでくる。しかも上目遣いという炸薬付き。立香はさらりと流したが、ハジメにとつては離れていても 効果は抜群だ！ 断ることができず部屋の中に招き入れていた。

「うん！」

なんの警戒心もなく嬉しそうに部屋に入り、香織は、窓際に設置されたテーブルセツトに座った。

ハジメは未だに若干混乱しているが、立香はいつもやってる様にお茶の準備をする。ここにある、ただ水差しに入れたティーパックのようなものから抽出した水出しの紅茶モドキをカップに淹れ、香織とハジメ、自分の分を用意して香織に差し出す。そして、向かいの席に座りながら、ハジメをもとに戻す。

「ハジメ、いつまで混乱してるの？ 紅茶モドキ淹れたから取り敢えず飲んで落ち着きな」

「あ、うん。ありがとう」

「はい、白崎さんも」

「ありがとう」

やっぱり嬉しそうに紅茶モドキを受け取り口を付ける香織。窓から月明かりが差し込み純白の彼女を照らす。黒髪にはエンジェルリングが浮かび、まるで本当の天使のよ

うだ。

ハジメは、欲情することもなく純粹に神秘に彩られた香織に見蕩れた。香織がカツプを置く「カチャ」という音に我を取り戻し、気を落ち着かせるために自分の紅茶モドキを一気に飲み干す。ちよつと気管に入つてむせた。恥ずかしい。

ハジメが恥ずかしさで顔を赤くしながら香織を見ると一目で驚いているとわかる表情をしていた。そしてその理由も本人の口からは語られた。

「藤丸くん、これ、こここの宿の紅茶だよね？」

「？ まあ、そうだけど」

「私も自分の部屋で飲んだけど、ここまで美味しくなかったの………」
「あぁ〜」

その言葉でハジメは納得した。先程から言っている通り、ここにあるのは「紅茶モドキ」地球の紅茶と比べても数段劣るものだ。

しかし、そこは立香クオリティー。立香が淹れた紅茶モドキは地球の紅茶と変わりない、下手をすれば市販のものより美味しいと言えるレベルなのだ。

「本当に立香って料理上手だよ。ぶっちゃけそれだけで一生食べていけるレベル」

「前にも言ったけど、教えてくれた人達が凄いだけだよ」

「でも、それをものに出れるのも凄い事だよ藤丸くん！」

「ははは、ありがとうハジメ、白崎さん」

そうして、三人で談笑を終え、改めて立香が香織に聞く。

「それで、話したいことって何かな。明日のこと？」

立香の質問に「うん」と頷き、香織はさつきまでの笑顔が嘘のように思いつめた様な表情になった。

「明日の迷宮だけ……藤丸くんと南雲くんには町で待つていて欲しいの。教官達やクラスの皆様は私が必ず説得する。だから！ お願い！」

話している内に興奮したのか身を乗り出して懇願する香織。ハジメは困惑する。ただハジメが足手まといだからというには少々必死過ぎないかな？ と。

しかし、立香は香織の表情や言葉からただの過保護では無いことを見抜いた。

「それは、ただ俺達が弱いから不安ってわけでは無さそうだね」

「えっそうなの？ 白崎さん」

「うん……」

香織は、立香の指摘にうなずき、ハジメは立香の言葉を香織が肯定したことにより、先程の困惑を強める では何故？ と。その後、自分でも性急過ぎたと思ったのか、手を胸に当てて深呼吸する。少し、落ち着いたようので「いきなり、ゴメンね」と謝り静かに話し出した。

「あのね、なんだか凄く嫌な予感がするの。さつき少し眠ったんだけど……夢をみて……藤丸くんと南雲くんが居ただけど……声を掛けても全然気がついてくれなくて……走っても全然追いつけなくて……それで最後は……」

その先を口に出すことを恐れるように押し黙る香織。立香は、落ち着いた気持ちで続きを聞く。

「最後は？」

香織はグツと唇を噛むと泣きそうな表情で顔を上げた。

「……消えてしまうの……」

「……そっか」

しばらく静寂が包む。

再び俯く香織を見つめるハジメ。

確かに不吉な夢だ。しかし、所詮夢である。そんな理由で待機が許可されるとは思えないし、許された場合はクラスメイトから批難の嵐だろう。いずれにしろ本格的に居場所を失う。故に、ハジメに行かないという選択肢はない。

立香は立香で考えを巡らせる。前世で、夢を介して様々なものを見たり、様々な場所にいった経験を持つ故にハジメと違い香織が見た夢をただの夢と断ずることができな

かった。

だが、現状ではどうしようもなかったの、せめて香織を安心させるよう、なるべく優しい声音を心掛けながら話しかけた。

「その夢が正夢にせよ俺達が心配だから見た夢にせよ、大丈夫だよ白崎さん。今回はメルド団長率いるベテランの騎士団員がついているし、うちのクラス全員チートだし。敵が可哀想なくらいかな。俺達が弱くても、問題ないよ」

語りかける立香の言葉に耳を傾けながら、なお、香織は、不安そうな表情で立香を見つめる。

「それでも……白崎さんが不安だというのなら……」

「……なら？」

立香は若干恥ずかしそうに、しかし真っ直ぐに香織と目を合わせた。

「俺達を守ってくれないかな？」

「え？」

自分の言っていることが男としては相当恥ずかしいという自覚があるのだろう。流石の立香でも羞恥で真っ赤になっている。月明かりで室内は明るく、香織からもその様子がよくわかった。

「白崎さんは『治療師』だよな？ 治療系魔法に天性の才を示す天職。何があってもさ……たとえ、俺達が大怪我することがあっても、白崎さんなら治せる。だから、その力で守ってもらえるかな？ それなら、それ以上に安心できることはないよ」

しばらく、香織は、ジーと立香を見つめる。立香も変わらず香織を見つめ続ける。

立香は、人が不安を感じる最大の原因は未知であると前世でサーヴァントに聞いたことがあった。香織は今、立香達を襲うかもしれない未知に不安を感じているのだろう。ならば、気休めかもしれないが、どんな未知が襲い来ても自分には対処する術があるのだと自信を持たせたかった。

因みにハジメは完全に空気だった。

しばらく見つめ合っていた香織と立香だが、沈黙は香織の微笑と共に破られた。

「変わらないね。藤丸くんは」

「？」

香織の言葉に訝しそうな表情になる立香。その様子に香織はくすくすと笑う。

「藤丸くんは、私と会ったのは高校に入ってからだと思ってるよね？ でもね、私は、中学二年の時から知ってたよ」

その意外な告白に、聞いていたハジメは目を丸くするが立香は特に驚いた様子はない。かかった。

香織は再びくすりと笑みを浮かべた。

「私が一方的に知ってるだけだよ。……私が最初に見た藤丸くんは不良っぽい男の人達

に向き合っていて私のことが見えなかっただろうしね」

「ああ〜あの時ね」

立香は、内心あの時からか〜と記憶を振り返っていた立香に香織が話を続ける。

「うん。不良っぽい人達に囲まれていても笑顔が崩さなくて。殴られそうになっても、蹴られそうになっても……絶対にやり返さなくて。その後、不良っぽい人達を会話だけで、鎮めて帰らせた」

「それはまた平凡な場面を……」

その時のことは立香にとって「会話だけで帰ってくれて良かったな〜」程度にしか考えない平凡な場面だった。

しかし、香織は変わらず優しげな眼差しをしていた。

「ううん。平凡なんかじゃないよ。むしろ、私はあれを見て藤丸くんのこと凄く強くて優しい人だっと思ってしたもの」

「……?」

立香は不思議そうな顔をした。そんな普通のシーンを見て抱く感想ではないだろうに。何故？ と。立香の心情を察したハジメはいいやいや平凡でも普通でもないよ立香…… と少し呆れていた。

「だって、藤丸くん。小さな男の子とおばあさんのために頭を下げてたんだもの」

その言葉に、立香は、確かにそんなこともあつたなく と中学生の頃を改めて思い返す。

男の子が不良連中にぶつかつた際、持っていたタコ焼きをべつとりと付けてしまったのだ。男の子はワンワン泣くし、それにキレた不良がおばあさんにイチヤもんつけるし、おばあさんは怯えて縮こまるし、中々大変な状況だった。

そこを遠目から見た立香は、おばあさんが、おそらくクリーニング代だろう——お札を数枚取り出すも、それを受け取つた後、不良達が、更に恫喝しながら最終的には財布まで取り上げた時点で既に不良のそばにいた。

立香の身体能力なら不良連中をなぎ倒すなど簡単に出来たが、近くに子供と老人がい

て周囲にも人が集まり始めた状況ではそれはよろしくないと考え。仕方なく相手の説得を試みたのだ。最初は相手が逆上し暴力を振るってきたがそこは立香クオリティー。避けながら話し最終的には誰も怪我することなく不良は帰らせた。

「強い人が暴力で解決するのは簡単だよ。光輝くんとかよくトラブルに飛び込んでいって相手の人を倒してるし……でも、弱くても立ち向かえる人や暴力を振るわれたのに逃げることもやり返すこともせず、最後まで説得し続ける人はそんなにいないと思う。……実際、あの時、私は怖くて……自分は零ちゃん達みたいに強くないからって言い訳して、誰か助けてあげてって思うばかりで何もしなかった」

「白崎さん……」

「だから、私の中で一番強い人は藤丸くんなんだ。高校に入って藤丸くんを見つけたときは嬉しかった。……藤丸くんみたいになりたくて、もっと知りたくて色々話し掛けたりしてたんだよ。藤丸くん、たまにのらりくらりとしてるけど……」

「あはは、それはごめんね？」

立香は、香織の自分に対する予想外の高評価に恥ずかしいやら照れくさいやらで苦笑いする。

「だからかな、不安になったのかも。迷宮でも藤丸くんが何か無茶するんじゃないかって。不良に立ち向かった時みたいに……でも、うん」

香織は決然とした眼差しで立香を見つめた。

「私が藤丸くんを守るよ」

立香はその決意を受け取る。真っ直ぐ見返し、そして頷いた。

「ありがとう……でも、そこでハジメを忘れるのは流石に、ね？」

「え？ あ！ ご、ごめん南雲くん！ 別に南雲くんを忘れた訳じゃなくて……」

「い、いや僕は気にしてないから。ていうか立香、あそこで言うのは性格悪いよ」

「ぷっぷくククク……ごめん、いつも誰かに構われてるハジメが完全に空気で、しかも白崎さんに忘れられてるのが可笑しくて……もうムリ、アハハハハ!!!」

「も、もう！ 藤丸くん!!」

「忘れてた、立香って意外とSな所があるんだった」

それから、もう一度雑談した後、香織は立香が付き添い部屋に帰っていった。

立香と香織が部屋から出た後、ハジメはベッドに横になりながら思いを馳せる。なんとしても自分に来ることを見つけ出し、無能の汚名を返上しなければならぬ。ハジメは決意を新たにし眠りについた。

~~~~~

深夜、香織が立香と共に部屋を出て自室に戻っていくその背中を無言で見つめる者がいたことを立香以外誰も知らない。

その者の表情が醜く歪んでいたことも立香以外知る者はいない。

~~~~~

香織と雫の部屋にいた二人は扉の前で少しの談笑をする。

「ありがとう、藤丸くん。わざわざ部屋まで送ってくれて」

「気にしないで。ただのお節介だから。それに、こんな夜中に女の子一人で出歩かせる訳にはいかないからね」

「本当に優しいね。藤丸くん……それじゃあ、おやすみ……ってあれ？」

「ん？ どうかした？ 白崎さん」

「雫ちゃんが戻ってない。私が部屋を出る時に少し鍛錬するって言ってたけど……」

「ん、流星に警備があるとは言えこんな時間だからね、うん、取り敢えずは俺が探しくよ、んで見つけたら白崎さんが心配してたって伝えとく」

「ごめんね、藤丸くん。藤丸くんも寝たいだろうに」

「そこは、謝罪じゃなくて感謝の方が元気が出るかな」

「そっか、じゃあ、ありがとう！ 藤丸くん！」

「はい、どういたしまして。それじゃあおやすみ、白崎さん」

「うん、おやすみ、藤丸くん」

そうして、立香は雫を探そうと歩き始め……たのだがすぐに振り返り、

「あつ、そうそう白崎さん」

「ん？ どうしたの？ 藤丸くん」

「……やっぱりここに居た」

宿のすぐ側にある少し開けた場所に雫はいた。

「立香？」

「全く、白崎さんが心配してたよ？ 雫」

「それは……悪いことしちゃったかしらね」

「そう思うなら白崎さんに謝つときなよ」

「そうするわ。それでそれだけを言いに来た訳じゃないでしょ？」

「まあね………不安？」

「ーっ！」

「そっか………」

「やっぱり、立香は気づくのね」

「そりや人を見る目には、多少自信があるからね」

「人を見る目〃も〃の間違いでしょ」

「あはは……さて、雫の不安は明日のこと？」

「！ 勝てないわね立香には。ええそうよ………」

そこから、雫は自分の心の内を話し始める。

「魔物とはいえ生き物の命を自分の手で殺す。それが怖い……」

「……………」

「しかも、それはまだ最初。いずれ戦争が本格化すれば今度は魔人族を……………人を殺さなきゃいけない」

「そうだね」

「皆の前では平然としていられる。けど、決して不安が、恐怖が消えるわけじゃないの……………私、どうすれば良いのかしら」

雫の心の内を聞いた立香は暫く考えた後……

「……………さあ?」

と言った

「は？？」

当然、あれだけの事を言った後にそんな返し方をされれば誰だつてそうなる。雫だつてそうなる。

「不安だろうが怖かろうが結局は現状を変えるなんて無理だし、あつでも皆の前では平然としているのは凄いいんじゃない？」

「あ、あんたねえ〜」

雫が既にキレル寸前なのを理解しているにも関わらず、立香はいまだに煽り続ける。

「流石、皆の雫お母さん……いや、皆の『オカン』だね」

ブチッ！

もしその場に二人以外がいたならそんな音が聞こえていただろう。

「取り敢えず立香……あんたは一回ぶった斬る!!」

「アハハハ……キレて最初に出てくる言葉が『斬る』つたあたりが流石、剣術道場の娘だよね」

本格的にキレた雫は持っていた武器で立香に斬りかかるが立香は余裕そうにかわす。

「なんつで……当たらないのよ!」

「頑張つて避けてるから?」

「汗を一つかかないで何が『頑張つて』、よ!!」ザンツ!

「うわ、あつぶな! 今の本当に殺す気だったでしょ」

「うっさい! いいから斬られなさい!」

「すっごい、横暴だ」

そこから約二十分間、雫による攻撃が続いたが最後まで立香に当たることは無かった。

「ぜえくはあ」

「お疲れ様く大丈夫？ 雫」

「はあくはあく、誰の、せいよ……」

「でも、少しは発散出来たみたいだね」

「おかげさまでね、まあ気づいたのは途中からだけど」

「うんうん、それなら良かった………さつきまでの雫に必要だったのは、不安や恐怖を取り除くことじゃなくて、心を軽くすることだったからね」

「あなたに乗せられっぱなしなのが少し気に食わないけど。確かに少しは楽になったわ………変わらないわね、立香は」

「あはは、それ白崎さんにも言われたよ」

「あら、そうだったの？」

「うん」

「先を越されちゃったわね」

「あはは……」

「ふふふ……」

さて、ちょうど良さそうなので回想にレッツゴ～！

ポワンポワンワンワン

~~~~~

雫Side

私が始めて竹刀を持ったのは四歳の時だった。八重樫流という古流剣術を受け継ぐ八重樫家の当主だった祖父は、戯れに竹刀を私に持たせてみた。祖父が言うにはその時に私は、才能の片鱗を見せてしまったらしい。

可愛い孫が流派の才能を受け継いでいると知った祖父は、普段の仏頂面を崩して、それはもう嬉しそうに微笑んだのを今でもはつきりと覚えている。

その日から、私にとって剣術と剣道の稽古が生活の一部になった。祖父も父も、道場の皆も、すごいすごいと褒めてくれて……

でも、本当は……

剣術なんてやりたくはなかった。本当は道着や和服より、フリルの付いた可愛い洋服を着たかった。手に持つのは竹刀よりもお人形やキラキラしたアクセサリーがよかつ



た。

けれど、家族の期待を裏切るのが怖くて、結局は剣術を辞めることができなかつた。

そんな時だ、

光輝が家に入門して来て、王子様がやって来たのかと思つた。『雫ちゃんも、俺が守つてあげるよ』と言われ、カッコイイ男の子との絵本のような物語を夢想した。彼なら自分を女の子にしてくれる。守ってくれる。甘えさせてくれる。そう思っていた。

でも、光輝がもたらしたのは、私に対するやつかみだつた。小学生の時から正義感と優しさに溢れ、何でもこなせる光輝は女の子達の注目の的だつた。女の癖に竹刀を振り、髪は短く、服装は地味で、女の子らしい話題にも付いていけない私が、そんな彼の傍にすることが、女の子達には我慢ならなかつたのだらう。その時に言われた言葉は今でも覚えている。光輝を好いてる女の子の一人に言われた言葉……『あんた女だつたの?』つて。正直、ショックだつたわ。

光輝に助けを求めたこともある。だが、そんな時、光輝が言うセリフは決まっていた。すなわち、「きつと悪気はなかった」「みんな、いい子達だよ?」「話せばわかる」などだ。その言葉通り、私に対する言動について光輝が女の子達に話し合いにいつてしまい、風当たりが強くなった。それも光輝にばれないよう巧妙さを増して。

光輝に相談しても、返ってくるのは困ったような笑みばかりで、いつしか私は光輝に頼ることをしなくなった。

そんな小学生時代を過ごしていた時に一人の男の子が私の家に来た。なんでも、祖父を含めた親同士の交流があるらしく、以前から相手側の息子を連れてきたかったらしい。私は祖父に呼ばれてその男の子に自己紹介するように言われた。

「初めまして。八重樫、雫です」

なんの面白味もない自己紹介だったと今にして思えば恥ずかしくなる。でも、気にして無いのか、男の子も自己紹介を始める。

「俺は立香、藤丸立香。よろしくね、雫ちゃん」

そう、その男の子こそが立香だったのだ。

でも、自己紹介された私が意識を向けたのは立香ではなく立香が言った言葉だった。

「え？ 今……」

「ん？ 何か変なこと言った？」

その時の私は、道着に防具を着けた状態で、その状態で始めて私を見た人は皆、私を男の子だと思っていた。にも関わらず立香は初めて私を見た筈なのに一目で女の子だと言ってみせたのだ。

「だって、私のことを『雫ちゃん』って」

「女の子にちゃん付けするのはおかしい？」

「おかしくは、無いけど……」

「もしかして、嫌だった？」

「ううん！ これからもそう呼んで！」

「あらあら、立香はもう雫ちゃんと仲良くなったのね」

「何！ し、雫はやらんぞ！……と言いたいのだが、凛香さんの息子ならば。いやしかし………」

……その後も私と立香は時々会って話したり、立香は私の本当に欲しいものを知っているのか、いないのか、手作りのお菓子やスイーツ、ぬいぐるみまでくれて、私は本心からの笑顔を浮かべることが多くなった。

でも……その笑顔は、幸せは、彼女達にとって面白いものではなかったらしい。

「や、やめて！ 返して！」

「何よ、男女の癖に。あんたなんかこーゆーのは不相応なのよ」

公園で立香を待っていた私をたまたま見かけたのか、光輝を慕っている女の子達は私が一人なのをいい事に私を二人がかりで押さえつけ持っていたぬいぐるみを奪う。

「全く、光輝くんに構ってもらえてるのに、他の男の子と一緒にいるなんて……確かそう言うの『尻軽女』って言うらしいじゃない。あつ、あんたは女じゃなくて男だったわね

！」

「アハハハ!!!」

結局、自分なんかが幸せになるのは無理なのか……そう思っていた時、

「雫に、何してるの？」

彼が来た。

「誰よ、あんたは」

「うくん、雫の友達、かな」

「友達？ あく思い出したわ。あんただったわね、このぬいぐるみ渡してたの。はっ！  
こんな男女の何処が良いんだか」

「何処がつて、可愛い所とか？」

「はあ？ あんた馬鹿なの？ こいつが可愛いとか何にも知ら「少なくとも」……」

「何も知らない君達よりは、彼女が可愛いことを知っているよ。だからさ……」

そう言いながら立香は彼女達に近づいていき……

「何も知らない、知ろうとしない君達が………雫をイジメてんじゃねえよ」  
「ヒッ！」

それは、私が今まで立香と一緒にいて一度も聞いたことの無い声だった。

「それじゃあ、これからは止めようね。でないと、君達に何が起こるかわからないから」

「い、行く」

「え、ええ」

そうやって彼女達は逃げるように公園から出ていった。

「さて、これでもう大じよ『ギユツ』……雫？」

私自身、どうして立香に抱きついたのかはわからなかった。ただ、離れたいとは思わ

なかった。

そして、立香も拒むことはせず私を抱きしめて頭を撫でてきた。

「立香……」

「ん？」

「私、あなたといえるべきじゃないのかな。こんな地味で女の子らしくない私に立香といえる資格なんて「雫」……立香？」

私の話を遮った立香は私を離すと私の顔に手を伸ばし……

「な、何をつて、いふあいふあいにやにをふるのりふふあ」（意識：痛い痛い何をするの立香）

私の頬を摘んで伸ばしたりし始めた。

慌てて立香を離すと、立香は話し始める。

「雫は思い詰めすぎなんだよ。資格？ 仮にそんな物が必要だったとしても、全部無視

してしまえ」

「り、立香？」

「雫は頑張ってきた、色んな人の期待を背負って努力した。なら、『誰かと居たい』なんて願っても、『自分の欲しいものを欲しいと言う』わがままも押し通してしまえ」

「……いいの？」

「うん」

「わがまま言っても、立香と一緒に居たいって言っても、いいの？」

「好きだけ言いなよ」

「なら、立香と一緒に居たい!!」

「いいよ……あ、そうだこれ。渡し忘れる所だった」

「これは？」

「誕生日プレゼント。前にこれを見て欲しいって言ってたから、新しく作った」

「私の誕生日、覚えててくれたんだ」

「当然、雫の誕生日だもん、忘れる訳が無いよ」

「ありがとう！ 絶対に大事にするね！」

「はい、どういたしまして」



これが、私が立香に出会った時の話よ。え？その時のぬいぐるみ？ああ、あの「白くてリスの様なウサギの様な動物」のぬいぐるみのこと？ええ、今でも部屋に大事に置いてあるわ。……前に立香に、なんの動物なのか聞いてみたけど、「昔に見た動物を作ったんだ、可愛いでしょ？」以外は答えてくれなかったわね。

最後に、立香をどう思っているか？ですって？当然、好きよ、女として。私を守ってくれた、私にわがままを言わせてくれた。髪を伸ばしたのだって、立香に言われたおかげで伸ばそうと思っただけから。

立香を狙っている女が他にもいる事は知っているわ。でも、諦めるつもりは無い、たとえ親友と同じ人を好きになっただけとしても、ね。

―普通に質問が終了した為、回想終了―

~~~~~

場面戻って現在

「ふう、ありがとう立香。不安が全部消えた訳じゃないけど、でももう大丈夫」

「そっか、だけど何かあったらちゃんと言いなよ、雫は溜め込みがちなんだから」
「はいはい、わかってるわよ」

「ならばよし、じゃあ戻ろっか部屋まで送ってくよ」

「あら、良いの？ 立香の部屋と反対方向だけど」

「良いの、女の子を一人出歩かせるよりはね」

「はあく、そういう所も変わらないわね」

「別に、誰にでもやる訳ではないからね？ 雫」

「き、聞こえてたの!?!」／／／

「さてね。ほら、行くよ雫！」

「え？ あ、待ちなさい立香!!」

そうして、夜は明け………物語旅は新たなページ道を照らす。

第六歩「迷宮、トラップ……アステリオスくん元気かな

〜」

現在、ハジメ達は「オルクス大迷宮」の正面入口がある広場に集まっていた。

ハジメとしては薄暗い陰気な入口を想像していたのだが、まるで博物館の入場ゲートのようなしつかりした入口があり、受付窓口まであった。制服を着たお姉さんが笑顔で迷宮への出入りをチェックしている。

なんでも、ここでステータスプレートをチェックし出入りを記録することで死亡者数を正確に把握するのだとか。戦争を控え、多大な死者を出さない措置だろう。

入口付近の広場には露店なども所狭しと並び建っており、それぞれの店の店主がしのぎを削っている。まるでお祭り騒ぎだ。

浅い階層の迷宮は良い稼ぎ場所として人気があるようで人も自然と集まる。馬鹿騒ぎした者が勢いで迷宮に挑み命を散らしたり、裏路地宜しく迷宮を犯罪の拠点とする人間も多々いたようで、戦争を控えながら国内に問題を抱えたくない冒険者ギルドと協力して王国が設立したのだとか。入場ゲート脇の窓口でも素材の売買はしてくれるの

で、迷宮に潜る者は重宝しているらしい。

ハジメ達は、お上りさん丸出しでキョロキョロしながらメルド団長の後をカルガモのヒナのように付き、それを見ながら立香も最後尾を歩いていった。

~~~~~

迷宮の中は、外の賑やかさとは無縁だった。

縦横五メートル以上ある通路は明かりもないのに薄ぼんやり発光しており、松明や明かりの魔法具がなくてもある程度視認が可能だ。緑光石という特殊な鉱物が多数埋まっているらしく、「オルクス大迷宮」は、この巨大な緑光石の鉱脈を掘って出来ているらしい。

一行は隊列を組みながらゾロゾロと進む。しばらく何事もなく進んでいると広間に出た。ドーム状の大きな場所で天井の高さは七、八メートル位ありそうだ。

と、その時、物珍しげに辺りを見渡している一行の前に、壁の隙間という隙間から灰

色の毛玉が湧き出てきた。

「よし、光輝達が前に出る。他は下がれ！ 交代で前に出てもらうからな、準備しておけ！ あれはラットマンという魔物だ。すばしっこいが、たいした敵じゃない。冷静に行け！」

その言葉通り、ラットマンと呼ばれた魔物が結構な速度で飛びかかってきた。

灰色の体毛に赤黒い目が不気味に光る。ラットマンという名称に相応しく外見はねずみっぽい……二足歩行で上半身がムキムキだった。八つに割れた腹筋と膨れあがった胸筋の部分だけ毛がない。まるで見せびらかすように。

正面に立つ光輝達——特に前衛である雫の頬が引き攣っている。やはり、気持ち悪いらしい。

間合いに入ったラットマンを光輝、雫、龍太郎の三人で迎撃する。その間に、香織と特に親しい女子二人、立香大好きっ娘の中村恵里とロリ元気っ子の谷口鈴が詠唱を開始。魔法を発動する準備に入る。訓練通りの堅実なフォーメーションだ。

光輝は純白に輝くバスタードソードを視認も難しい程の速度（立香を除いて）で振るって数体をまとめて葬っている。

彼の持つその剣はハイリヒ王国が管理するアーティファクトの一つで、お約束に漏れず名称は「聖劍」である。光属性の性質が付与されており、光源に入る敵を弱体化させると同時に自身の身体能力を自動で強化してくれるという「聖なる」というには実に嫌らしい性能を誇っている。

しかし、本物の聖エクスカリバー剣を知っている立香からすればただのなまくらにしか見えなかったという。

龍太郎は、空手部らしく天職が「拳士」であることから籠手と脛当てを付けている。これもアーティファクトで衝撃波を出すことができ、また決して壊れないのだという。龍太郎はどつしりと構え、見事な拳撃と脚撃で敵を後ろに通さない。無手でありながら、その姿は盾役の重戦士のようだ。

雫は、サムライガールらしく「剣士」の天職持ちで刀とシャムシールの中間のような

剣を抜刀術の要領で抜き放ち、一瞬で敵を切り裂いていく。その動きは洗練されていて、騎士団員をして感嘆させるほどである。

ハジメ達が光輝達の戦いぶりに見蕩れていると、詠唱が響き渡った。

「暗き炎渦巻いて、敵の尽く焼き払わん、灰となりて大地へ帰れ——【螺旋炎】」

三人同時に発動した螺旋状に渦巻く炎がラットマン達を吸い上げるように巻き込み燃やし尽くしていく。「キイイイツ」という断末魔の悲鳴を上げながらパラパラと降り注ぐ灰へと変わり果て絶命する。

気がつけば、広間のラットマンは全滅していた。他の生徒の出番はなしである。どうやら、光輝達召喚組の戦力では一階層の敵は弱すぎるらしい。

「ああ、うん、よくやったぞ！ 次はお前等にもやってもらうからな、気を緩めるなよ！」

生徒の優秀さに苦笑いしながら気を抜かないよう注意するメルド団長。しかし、初めての迷宮の魔物討伐にテンションが上がるのは止められない。頬が緩む生徒達に「しょ

うがねえな」とメルド団長は肩を竦めた。

「それとな……今回は訓練だからいいが、魔石の回収も念頭に置いておけよ。明らかにオーバーキルだからな？」

メルド団長の言葉に香織達魔法支援組は、やりすぎを自覚して思わず頬を赤らめるのだった。

余談だが、約一名ほど立香に褒めて！褒めて！（ノ？ワ？）ノ\*？という顔をしていたのだが

それはともかく  
閑話休題

そこからは特に問題もなく交代しながら戦闘を繰り返し、順調に階層を下げて行った。

そして、一流の冒険者か否かを分けると言われている二十階層にたどり着いた。

現在の迷宮最高到達階層は六十五階層らしいのだが、それは百年以上前の冒険者がな



した偉業であり、今では超一流で四十階層越え、二十階層を越えれば十分に一流扱いだという。

ハジメ達は戦闘経験こそ少ないものの、全員がチート持ちなので割かしあつさりと降りることができた。

もつとも、迷宮で一番恐いのはトラップである。場合によつては致死性のトラップも数多くあるのだ。

この点、トラップ対策として「フェアスコープ」というものがある。これは魔力の流れを感知してトラップを発見することができるという優れものだ。迷宮のトラップはほとんどが魔法を用いたものであるから八割以上はフェアスコープで発見できる。ただし、索敵範囲がかなり狭いのでスムーズに進もうと思えば使用者の経験による索敵範囲の選別が必要だ。

従つて、ハジメ達が素早く階層を下げられたのは、ひとえに騎士団員達の誘導があつたからだと言える。メルド団長からも、トラップの確認をしていない場所へは絶対に勝手に行つてはいけないと強く言われているのだ。

「よし、お前達。ここから先は一種類の魔物だけでなく複数種類の魔物が混在したり連携を組んで襲ってくる。今までが楽勝だったからと言ってくれぐれも油断するなよ！今日はこの二十階層で訓練して終了だ！ 気合入れろ！」

メルド団長のかけ声がよく響く。

ここまで、立香とハジメは特に何もしていない。一応、騎士団員が相手をして弱った魔物を相手に訓練したり、ハジメは地面を錬成して落とし穴にはめて串刺しにしたりして、立香はガンドで動きを止めてから技術の縮地をして速攻で仕留める。というやり方でそれぞれ一匹ずつ犬のような魔物を倒したが、それだけだ。

基本的には、どのパーティーにも入れてもらえず、騎士団員に守られながら後方で待機していただけである。なんとも情けない限りだが、それでも、実戦での度重なる錬成の多用で魔力が上がっているのだから意味はある。魔力の上昇によりレベルも二つほど上がったのだから実戦訓練はためになるようだ。

（ただ、これじゃあ完全に寄生型プレイヤーだよ、はあ〜）

再び、騎士団員が弱った魔物を立香とハジメの方へ弾き飛ばしてきたので、今度は溜息を吐きながら接近し、手を突いて地面を錬成。地面を棘の様にして貫き動きを止め、立香が魔物の腹部めがけて剣を突き出し串刺するという連携を見せる。

（まあ、なんか錬成の精度が徐々に上がっているし、立香も協力してくれてるし……地道に頑張ろう……）

魔力回復薬を口に含みながら、額の汗を拭うハジメと考え事をしながら自分の武器を見る立香。そんな二人を騎士団員達が感心しながら見ていた。

実を言うと、騎士団員達も立香とハジメには全く期待していなかった。ただ、戦闘に余裕があるので所在無げに立ち尽くす二人を構ってやるかと魔物をけしかけてみたのだ。もちろん、弱らせて。

騎士団員達としては、二人が碌に使えもしない剣で戦うと思っていた。ところが実際は、錬成を利用して確実に動きを封じてから、止めを刺すという騎士団員達も見たことのない戦法で確実に倒していくのだ。錬成師は鍛冶職とイコールに考えられている。故に、錬成師が実戦で錬成を利用することなどあり得なかった。

ハジメとしては、何もない自分の唯一の武器は錬成しかないと考えていたので、鉱物を操れるなら地面も操れるだろうと鍛錬した結果なのだが、立香と周りが派手に強いので一匹相手にするので精一杯の自分はやはり無能だと思い込んでいた。

そして、立香との連携は立香が提案したものである。このやり方ならほぼ確実に仕留められるのと、最悪、武器を失ってもハジメが錬成した棘を武器にするという「立香、やっぱりチートだね」とハジメが呟いた戦闘方法なのだ。

ちなみに本邦初公開である。王都郊外での実戦訓練で散々無様を晒した末、考え出した戦法だ。

小休止に入り、ふと前方を見ると香織が自分達、正確には立香を見ていた。彼女は立香の方を見て微笑んでいる。

昨夜の「守る」という宣言通りに見守られているようでなんとなく気恥ずかしくなり目を逸らすハジメ。立香はそれを見て苦笑いし香織と目を合わせる。すると香織が嬉しそうに笑顔を浮かべる。それを横目で見ていた雫も苦笑いし、小声で話しかけた。

「香織、なに立香と見つめ合っているのよ？ 迷宮の中でラブコメなんて随分と余裕じゃない？」

からかうような、しかし嫉妬の混じった口調に思わず顔を赤らめる香織。怒ったように雫に反論する。

「もう、雫ちゃん！ 変なこと言わないで！ 私はただ、藤丸くん大丈夫かなって、それだけだよ！」

「それがラブコメしてるって事でしょ？」と、雫は思ったが、これ以上言うと拗ねそうなので口を閉じる。だが、目が笑っていることは隠せず、それを見た香織が「もうっ」と呟いてやはり拗ねてしまった。

そんな様子を横目に見ていたハジメは、ふと視線を感じて思わず背筋を伸ばす。ねばつくような、負の感情がたつぷりと乗った不快な視線だ。今までも教室などで感じていた類の視線だが、それとは比べ物にならないくらい深く重い。

その視線は今が初めてというわけではなかった。今日の朝から度々感じていたもの

だ。視線の主を探そうと視線を巡らせると途端に霧散する。朝から何度もそれを繰り返して、いい加減うんざりしていた。

(なんなのかな……立香は……まあ兎も角、僕、何かしたかな？ ……むしろ無能なりに頑張っている方だと思っただけ……もしかしてそれが原因かな？ 調子乗ってんじゃねえぞ！ 的な？ ……はあ〜)

深々と溜息を吐くハジメ。香織の言っていた嫌な予感というものを、ハジメもまた感じ始めていた。

一方立香は、視線の主に一瞬目を向け、警戒を強める。

(元々持っていた嫉妬の感情が異世界こせに来てからより強くなった。行動に移すことも多くなったし……今は何も無いけど、注意していた方が良さそうだな。恐らくはあいつ自身も気づいてないだろうけど、相当ドロドロとして歪んでいるな………檜山の白崎さんに対する好意……)

立香とハジメがそんなことを考えている内に一行は二十階層の探索を始める。

迷宮の各階層は数キロ四方に及び、未知の階層では全てを探索しマッピングするのに数十人規模で半月から一ヶ月はかかるというのが普通だ。

現在、四十七階層までは確実なマッピングがなされているので迷うことはない。トラップに引つかかる心配もいはずだった。

二十階層の一番奥の部屋はまるで鍾乳洞のようにツララ状の壁が飛び出していたり、溶けたりしたような複雑な地形をしていた。この先を進むと二十一階層への階段があるらしい。

他の皆が探索している中、立香がある気配を感じとる。

(これは……魔物の気配か、それも二体……それにトラップが一つ。まあ、最初は天之河達が対処するだろうけど、念には念を入れて……)

「ハジメ」

「ん? どうしたの立香」

「今から素材を問わずに槍状の物を錬成できる？」

「？ まあ、地面で良いのなら十秒かそこらでできるけど……」

「じゃあ、お願いしていい？」

「うん、こんな状況で立香が言ったことが無意味とも思えないし。わかった」

「ありがとう、ハジメ」

そうして、立香に言われた通りに槍を錬成していると、先頭を行く光輝達やメルド団長が立ち止まった。訝しそうなクラスメイトを尻目に戦闘態勢に入る。どうやら魔物のようだ。

「擬態しているぞ！ 周りをよく注意しておけ！」

メルド団長の忠告が飛ぶ。

その直後、前方でせり出していた壁が突如変色しながら起き上がった。壁と同化していた体は、今は褐色となり、二本足で立ち上がる。そして胸を叩きドラミングを始めた。どうやらカメレオンのような擬態能力を持ったゴリラの魔物のようだ。





「うわっ!」

「きやあ!」

体をビリビリと衝撃が走り、ダメージ自体はないものの硬直してしまう。ロックマウントの固有魔法「威圧の咆哮」だ。魔力を乗せた咆哮で一時的に相手を麻痺させる。

まんまと食らってしまった光輝達前衛組が一瞬硬直してしまった。

ロックマウントはその隙に突撃するかと思えばサイドステップし、傍らにあった岩を持ち上げ香織達後衛組に向かって投げつけた。見事な砲丸投げのフォームで! 咄嗟に動けない前衛組の頭上を越えて、岩が香織達へと迫る。

香織達が、準備していた魔法で迎撃せんと魔法陣が施された杖を向けた。避けるスペースが心もとないからだ。

しかし、発動しようとした瞬間、香織達は衝撃的光景に思わず硬直してしまう。

なんと、投げられた岩もロックマウントだったのだ。空中で見事な一回転を決めると両腕をいっぱい広げて香織達へと迫る。その姿は、さながらル○ンダイブだ。「か・お・り・ちやくん！」という声が聞こえてきそうである。しかも、妙に目が血走り鼻息が荒い。香織も恵里も鈴も「ヒイ！」と思わず悲鳴を上げて魔法の発動を中断してしまい、他のクラスメイト達も動けない中で……

ただ一人、動いた者がいた。

「師匠直伝！ 蹴り……ポルグ!!」

ドゴオオオオオン!!

「「「「はっ」」」」

立香が地面に着地した時、

ある者は立香が信じられないほど高く跳んだ後にオーバーヘッドをかました事に。

ある者は突然後ろから何か飛んできたと思ったら、いつの間にかロツクマウントが額に穴を開けて死んでいる事に。

ある者は何もできないと思っていた立香が地面を揺らす程の攻撃をした事に。

ある者は無能だと思っていた立香が自分にはできないことをしてみせた事に。

またある者は立香のその姿に見惚れて……

それぞれ考えていることは違えど、その場にいる全員が少しの間、動くことができなかった。

「はっ！、全員まだ戦闘中だ！ 戦闘態勢に戻れ！」

「は、はい！」

しかし、そこはベテランのメルド団長。どうにか意識を戻し、全員に呼び掛け同じように意識を戻させる。

香織達は、「す、すいません！」と謝るものさっきの立香の姿が頭から離れないらしく、まだ少し惚けていた。

そんな様子を見て、何を勘違いしたのかキレる若者が一人。正義感と思い込みの塊、我らが勇者天之河光輝である。

「貴様……よくも香織達を……許さない！」

どうやら惚けているのを死の恐怖を感じたせいだと勘違いしたらしい。彼女達を怯えさせるなんて！ と、なんとも微妙な点で怒りをあらわにする光輝。それに呼応してか彼の聖剣が輝き出す。

「万翔羽ばたき、天へと至れ——天しよ……あれ？」

「あつ、こころ、馬鹿も……の？」

メルド団長の声を無視して、光輝は大上段に振りかぶった聖剣を一気に振り下ろす……そうして最初のロックマウントに向くと、ロックマウントは額に穴を開けて既に死んでいた。

「やっぱり周りを考えずに大技撃とうとしたのか……はあ……」

「ま、まさか、このロックマウントも立香が？」

「ええ、ちょうど直線状にいたので纏めて槍で貫きましたが……ああハジメ、槍、錬成してくれてありがとう。でも、無理させ過ぎたせいで壊れちゃった。ゴメンね」

「え、あ、ああうん。どういたしまして？」

立香の言ったお礼にハジメが疑問系で返し、他の皆が立香に視線を集めた時、タイミングが良いのか悪いのか光輝が動き出し、

「と、とにかく！ これで、魔物はいなくなつた！ もう大じよ……へぶう!!」

と香織達に声を掛けようとしていた所に、笑顔で迫つたメルド団長の拳骨を食らつた。

「この馬鹿者が。気持ちはわかるがな、こんな狭いところで使う技じゃなかっただろうが！ 今回は立香が先に仕留めていたから良かったが、もしお前が撃つて崩落でもしたらどうすんだ！」

メルド団長のお叱りに「うつ」と声を詰まらせ、バツが悪そうに謝罪する光輝。香織達が寄ってきて苦笑いしながら慰める。

その時、ふと香織が崩れた壁の方に視線を向けた。

「……あれ、何かな？ キラキラしてる……」

その言葉に、全員が香織の指差す方へ目を向けた。

そこには青白く発光する鉱物が花咲くように壁から生えていた。まるでインディコライトが内包された水晶のようである。香織を含め女子達は夢見るように、その美しい姿にうっとりした表情になった。

「ほお、あれはグランツ鉱石だな。大きさも中々だ。珍しい」

グランツ鉱石とは、言わば宝石の原石みたいなものだ。特に何か効能があるわけではないが、その涼やかで煌びやかな輝きが貴族のご婦人ご令嬢方に大人気であり、加工し

て指輪・イヤリング・ペンダントなどにして贈ると大変喜ばれるらしい。求婚の際に選ばれる宝石としてもトップ三に入るとか。

「素敵……」

香織が、メルドの簡単な説明を聞いて頬を染めながら更にうつとりとする。そして、誰にも気づかれない程度にチラリと立香に視線を向けた。もつとも、雫達いつものメンツと、もう一人だけは気がついていたが……

「だったら俺らで回収しようぜ！」

そう言って唐突に動き出したのは檜山だった。グランツ鉱石に向けてヒヨイヒヨイと崩れた壁を登っていく。それに慌てたのはメルド団長と立香だ。

「こら！ 勝手なことをするな！ 安全確認もまだなんだぞ！」

「！ まずい！ おい、檜山！ 止まれ!!」



しかし、檜山は聞こえないふりをして、とうとう鉱石の場所に辿り着いてしまった。メルド団長は、立香の慌てぶりに疑問を抱きながらも、檜山を止めようと追いかける。同時に騎士団員の一人がフェアスコープで鉱石の辺りを確認する。そして、一気に青褪め、慌ててメルド団長に告げる。

「団長！ トラップです！」

「ッ!？」

しかし、メルド団長も、立香も、騎士団員の警告も一歩遅かった。

檜山がグランツ鉱石に触れた瞬間、鉱石を中心に魔法陣が広がる。グランツ鉱石の輝きに魅せられて不用意に触れた者へのトラップだ。美味しい話には裏がある。世の常である。

魔法陣は瞬く間に部屋全体に広がり、輝きを増していった。まるで、召喚されたあの日の再現だ。

「くっ、色々言いたい事はあるが先ずは撤退だ！ 早くこの部屋から出る！」

メルド団長の言葉に生徒達が急いで部屋の外に向かうが……間に合わなかった。

部屋の中に光が満ち、ハジメ達の視界を白一色に染めると同時に一瞬の浮遊感に包まれる。

ハジメ達は空気が変わったのを感じた。次いで、ドスンという音と共に地面に叩きつけられた。

尻の痛みに呻き声を上げながら、ハジメは周囲を見渡す。クラスメイトのほとんどはハジメと同じように尻餅をついていたが、メルド団長や騎士団員達、光輝達など一部の前衛職の生徒と立香は既に立ち上がって周囲の警戒をしている。

どうやら、先の魔法陣は転移させるものだったらしい。現代の魔法使いには不可能な事を平然とやっつてのけるのだから神代の魔法は規格外だ。

ハジメ達が転移した場所は、巨大な石造りの橋の上だった。ざつと百メートルはありそうだ。天井も高く二十メートルはあるだろう。橋の下は川などなく、全く何も見えな  
い深淵の如き闇が広がっていた。まさに落ちれば奈落の底といった様子だ。

橋の横幅は十メートルくらいありそうだが、手すりどころか縁石すらなく、足を滑ら

せれば掴むものもなく真つ逆さまだ。ハジメ達はその巨大な橋の中間にいた。橋の両サイドにはそれぞれ、奥へと続く通路と上階への階段が見える。

それを確認したメルド団長が、険しい表情をしながら指示を飛ばした。

「お前達、直ぐに立ち上がって、あの階段の場所まで行け。急げ！」

雷の如く轟いた号令に、わたわたと動き出す生徒達。

しかし、迷宮のトラップがこの程度で済むわけもなく、撤退は叶わなかった。階段側の橋の入口に現れた魔法陣から大量の魔物が出現したからだ。更に、通路側にも魔法陣は出現し、そちらからは一体の巨大な魔物が……

その時、現れた巨大な魔物を呆然と見つめるメルド団長の呻く様な呟きがやけに明瞭に響いた。

——まさか……ベヒモス……なのか……

## 第七歩「ベヒモスVS立香&amp;ハジメ。そして……」

橋の両サイドに現れた赤黒い光を放つ魔法陣。通路側の魔法陣は十メートル近くあり、階段側の魔法陣は一メートル位の大きさだが、その数がおびただしい。

小さな無数の魔法陣からは、骨格だけの体に剣を携えた魔物「トラウムソルジャー」が溢れるように出現した。空洞の眼窩からは魔法陣と同じ赤黒い光が煌々と輝き目玉の様にギョロギョロと辺りを見回している。その数は、既に百体近くに上っており、尚、増え続けているようだ。

しかし、数百体のガイコツ戦士より、反対の通路側の方がヤバイと立香は前世の経験から感じていた。

十メートル級の魔法陣からは体長十メートル級の四足で頭部に兜のような物を取り付けた魔物が出現したからだ。もつとも近い既存の生物に例えるならトリケラトプスだろうか。ただし、瞳は赤黒い光を放ち、鋭い爪と牙を打ち鳴らしながら、頭部の兜から生えた角から炎を放っているという付加要素が付くが……

メルド団長が呟いた「ベヒモス」という魔物は、大きく息を吸うと凄まじい咆哮を上げた。

「グルアアアアアアアアア!!」

「ッ!?!」

その咆哮で正気に戻ったのか、メルド団長が矢継ぎ早に指示を飛ばす。

「アラン！ 生徒達を率いてトラウムソルジャーを突破しろ！ カイル、イヴァン、ベイ  
ル！ 全力で障壁を張れ！ ヤツを食い止めるぞ！ 光輝、お前達は早く階段へ向かえ  
！」

「待つて下さい、メルドさん！ 俺達もやります！ あの恐竜みたいなヤツが一番ヤバ  
イでしょう！ 俺達も……」

「馬鹿野郎！ あれが本当にベヒモスなら、今のお前達では無理だ！ ヤツは六十五階  
層の魔物。かつて、「最強」と言わしめた冒険者をして歯が立たなかった化け物だ！  
さっさと行け！ 私はお前達を死なせるわけにはいかないんだ！」

メルド団長の鬼気迫る表情に一瞬怯むも、「見捨ててなど行けない！」と踏み止まる光輝。

どうにか撤退させようと、再度メルドが光輝に話そうとした瞬間、ベヒモスが咆哮を上げながら突進してきた。このままでは、撤退中の生徒達を全員轢殺してしまうだろう。

そうはさせるかと、ハイリヒ王国最高戦力が全力の多重障壁を張る。

「『全ての敵意と悪意を拒絶する、神の子らに絶対の守りを、ここは聖域なりて、神敵を通さず——【聖絶】!!』」

二メートル四方の最高級の紙に描かれた魔法陣と四節からなる詠唱、さらに三人同時発動。一回こっきり一分だけの防御であるが、何物にも破らせない絶対の守りが顕現する。純白に輝く半球状の障壁がベヒモスの突進を防ぐ！

衝突の瞬間、凄まじい衝撃波が発生し、ベヒモスの足元が粉碎される。橋全体が石造

りにもかかわらず大きく揺れた。撤退中の生徒達から悲鳴が上がり、転倒する者が相次ぐ。

トラウムソルジャーは三十八階層に現れる魔物だ。今までの魔物とは一線を画す戦闘能力を持つている。前方に立ちはだかる不気味な骸骨の魔物と、後ろから迫る恐ろしい気配に生徒達は半ばパニック状態だ。

隊列など無視して我先にと階段を目指してがむしやらに進んでいく。騎士団員の一人、アランが必死にパニックを抑えようとするが、目前に迫る恐怖により耳を傾ける者はいない。

その内、一人である優花が後ろから突き飛ばされ転倒してしまった。「うっ」と呻きながら顔を上げると、眼前で一体のトラウムソルジャーが剣を振りかぶっていた。

「あ」

そんな一言と同時に彼女の頭部目掛けて剣が振り下ろされた。



死ぬ——優花がそう感じた次の瞬間、トラウムソルジャーの動きが突然止まり、一拍置いて頭がふき飛んだ。

頭が無くなりバランスを崩したトラウムソルジャーの体は彼女から逸れてカンツという音と共に地面に倒れ込む。更に、先程ふき飛んだトラウムソルジャーの頭は数体のトラウムソルジャーを巻き込みながら橋の端へと向かって、そのまま奈落へと落としていった。

そんな様子を見ていた優花は慌てて前を向くと蹴りの態勢から戻ろうとしていた立香の姿があった。立香はトラウムソルジャーの首を斬り、その斬った頭を蹴り飛ばしてトラウムソルジャーを落としたのである。

もつとも、周囲のクラスメイト達にも気を配りながら動いていたので他のトラウムソルジャーを巻き込めるかは賭けだったが、そこは前世で女神にも愛された男。うまい感じに数体を巻き込むことに成功したようだ。

奈落へ落ちていったトラウムソルジャーを横目に見ながら倒れたままの優花のもとへ駆け寄る立香。剣を持っていない左手で優花の手を引っ張り立ち上がらせる。

呆然としながら為されるがままの彼女に、立香が笑顔で声をかけた。

「何やってるの優花。ほら、早く前へ。大丈夫だよ、冷静になればあんな骨なんてことはないから。うちのクラスは俺とハジメを除いて全員チートだからね」

勇気づけるように背中をバシッと叩く立香を見る優花は、次の瞬間には「うん！　ぁりがとう立香！」と元気に返事をして駆け出した。

立香は周囲のトラウムソルジャーを崩して固定し、足止めをしながら周囲を見渡す。

誰も彼もがパニックになりながら滅茶苦茶に武器や魔法を振り回している。このままでは、いずれ死者が出る可能性が高い。騎士アランが必死に纏めようとしているが上手くいっていない。そうしている間にも魔法陣から続々と増援が送られてくる。

(まずいな……今の俺じゃあ全員を落ち着かせるのは無理だ。となると……ハジメ?)

「なんとかしないと……必要なのは……強力なリーダー……道を切り開く火力……天の河くん！」

(……やっぱりハジメは凄いな。ならここは……)

「ハジメ！ 時間は稼いどく、とつとあのバカ勇者連れて来い！」

「！ わかった！ 必ず連れて来るから時間稼ぎお願い！」

二人の考えは通じ、ハジメは走り出した。光輝達のいるベヒモスの方へ向かって。

ベヒモスは依然、障壁に向かって突進を繰り返していた。

障壁に衝突する度に壮絶な衝撃波が周囲に撒き散らされ、石造りの橋が悲鳴を上げる。障壁も既に全体に亀裂が入っており砕けるのは時間の問題だ。既にメルド団長も障壁の展開に加わっているが焼け石に水だった。

「ええい、くそ！ もうもたんぞ！ 光輝、早く撤退しろ！ お前達も早く行け！」

「嫌です！ メルドさん達を置いていくわけには行きません！ 絶対、皆で生き残るんです！」

「くつ、こんな時にわがままを……」

メルド団長は苦虫を噛み潰したような表情になる。

この限定された空間ではベヒモスの突進を回避するのは難しい。それ故、逃げ切るためには障壁を張り、押し出されるように撤退するのがベストだ。

しかし、その微妙なさじ加減は戦闘のベテランだからこそ出来るのであって、今の光輝達には難しい注文だ。

その辺の事情を掻い摘んで説明し撤退を促しているのだが、光輝は「置いていく」ということがどうしても納得できないらしく、また、自分ならベヒモスをどうにかできると思っているのか目の輝きが明らかに攻撃色を放っている。

まだ、若いから仕方ないとは言え、少し自分の力を過信してしまっているようである。戦闘素人の光輝達に自信を持たせようと、まずは褒めて伸ばす方針が裏目に出たようだ。

「光輝！ 団長さんの言う通りにして撤退しましょう！」

雫は状況がわかっていようように光輝を諫めようと腕を掴む。

「へっ、光輝の無茶は今に始まったことじゃねえだろ？ 付き合うぜ、光輝！」

「龍太郎……ありがとな」

しかし、龍太郎の言葉に更にやる気を見せる光輝。それに雫は舌打ちする。

「状況に酔ってんじゃないわよ！ この馬鹿ども！」

「雫ちゃん……」

苛立つ雫に心配そうな香織。

その時、一人の男子が光輝の前に飛び込んできた。

「天之河くん！」

「なっ、南雲!?!」

「南雲くん!?!」

驚く一同にハジメは必死の形相でまくし立てる。

「早く撤退を！ 皆のところを！ 君がいないと！ 早く！」

「いきなりなんだ？ それより、なんでこんな所にいるんだ！ ここは君がいていい場所じゃない！ ここは俺達に任せて南雲は……」

「そんなこと言っている場合かつ！」

ハジメを言外に戦力外だと告げて撤退するように促そうとした光輝の言葉を遮って、ハジメは今までにならない乱暴な口調で怒鳴り返した。

いつも苦笑いしながら物事を流す大人しいイメージとのギャップに思わず硬直する光輝。

「あれが見えないの!! みんなパニックになってる！ リーダーがいないからだ！ 今は立香がどうにか押し留めてるけど、あまり長くは持たない！」

光輝の胸ぐらを掴みながら指を差すハジメ。

その方向にはトラウムソルジャーに囲まれ右往左往しているクラスメイト達がいる。訓練のことなど頭から抜け落ちたように誰も彼もが好き勝手に戦っている。効率的に倒せていないから敵の増援により未だ突破できないでいた。スベックの高さが命を守っているのと立香が肉体を酷使してフォローしているが、それも時間の問題だろう。

「一撃で切り抜ける力が必要なんだ！ 皆の恐怖を吹き飛ばす力が！ それができるのはリーダーの天之河くんだけでしょ！ 前ばかり見てないで後ろもちやんと見て！」

呆然と、混乱に陥り怒号と悲鳴を上げるクラスメイトを見る光輝は、ぶんぶんと頭を振るとハジメに頷いた。

「ああ、わかった。直ぐに行く！ メルド団長！ すいませ——」  
「下がれえ——！」

「すいません、先に撤退します」——そう言おうとしてメルド団長を振り返った瞬間、その団長の悲鳴と同時に、遂に障壁が砕け散った。

暴風のように荒れ狂う衝撃波がハジメ達を襲う。咄嗟に、ハジメが前に出て錬成により石壁を作り出すがあっさり砕かれ吹き飛ばされる。多少は威力を殺せたようだが……

舞い上がる埃がベヒモスの咆哮で吹き払われた。

そこには、倒れ伏し呻き声を上げる団長と騎士が三人。衝撃波の影響で身動きが取れないようだ。光輝達も倒れていたがすぐに起き上がる。メルド団長達の背後にいたことと、ハジメの石壁が功を奏したようだ。

「ぐっ……龍太郎、雫、時間を稼げるか？」

光輝が問う。それに苦しそうではあるが確かな足取りで前へ出る二人。団長たちが倒れている以上自分達がなんとかする他ない。

「やるしかねえだろ！」

「……なんとかしてみるわ！」



二人がベヒモスに突貫する。

「香織はメルドさん達の治癒を！」

「うん！」

光輝の指示で香織が走り出す。ハジメは既に団長達のもとだ。戦いの余波が届かないよう石壁を作り出している。気休めだが無いよりマシだろう。

光輝は、今の自分が出せる最大の技を放つための詠唱を開始した。

「神意よ！ 全ての邪悪を滅ぼし光をもたらしたまえ！ 神の息吹よ！ 全ての暗雲を吹き払い、この世を聖浄で満たしたまえ！ 神の慈悲よ！ この一撃を以て全ての罪科を許したまえ！——【神威】！」

詠唱と共にまっすぐ突き出した聖剣から極光が迸る。

先の天翔閃と同系統だが威力が段違いだ。橋を震動させ石畳を抉り飛ばしながらベヒモスへと直進する。

龍太郎と雫は、詠唱の終わりと同時に既に離脱している。ギリギリだったようで二人共ボロボロだ。この短い時間だけで相当ダメージを受けたようだ。

放たれた光属性の砲撃は、轟音と共にベヒモスに直撃した。光が辺りを満たし白く塗りつづす。激震する橋に大きく亀裂が入っていく。

「これなら……はあはあ」

「はあはあ、流石にやったよな？」

「だといいいけど……」

龍太郎と雫が光輝の傍に戻ってくる。光輝は莫大な魔力を使用したようで肩で息をしている。

先ほどの攻撃は文字通り、光輝の切り札だ。残存魔力のほとんどが持っていかれた。背後では、治療が終わったのか、メルド団長が起き上がるようにしている。

そんな中、徐々に光が収まり、舞う埃が吹き払われる。

その先には……

無傷のベヒモスがいた。

低い唸り声を上げ、光輝を射殺さんばかりに睨んでいる。と、思ったら、直後、スツと頭を掲げた。頭の角がキィーという甲高い音を立てながら赤熱化していく。そして、遂に頭部の兜全体がマグマのように燃えたぎった。

「ボケツとするな！ 逃げろ！」

メルド団長の叫びに、ようやく無傷というシヨックから正気に戻った光輝達が身構えた瞬間、ベヒモスが突進を始める。そして、光輝達はかなり手前で跳躍し、赤熱化した頭部を下に向けて隕石のように落下した。

光輝達は、咄嗟に横っ飛びで回避するも、着弾時の衝撃波をモロに浴びて吹き飛ばす。ゴロゴロと地面を転がりようやく止まった頃には、満身創痕の状態だった。

どうにか動けるようになったメルド団長が駆け寄ってくる。他の騎士団員は、まだ香織による治療の最中だ。ベヒモスはめり込んだ頭を抜き出そうと踏ん張っている。

「お前等、動けるか！」

メルド団長が叫ぶように尋ねるも返事は呻き声だ。先ほどの団長達と同じく衝撃波で体が麻痺しているのだろう。内臓へのダメージも相当のようだ。

メルド団長が香織を呼ぼうと振り返る。その視界に、駆け込んでくるハジメの姿を捉えた。

「坊主！ 香織を連れて、光輝を担いで下がれ！」

ハジメにそう指示する団長。

光輝を、光輝だけを担いで下がれ。その指示は、すなわち、もう一人くらいしか逃げることも敵わないということなのだろう。

メルド団長は唇を噛み切るほど食いしばり盾を構えた。ここを死地と定め、命を賭けて食い止めるつもりだ。

そんな団長に、ハジメは必死の形相で、とある提案をする。それは、この場の全員が助かるかもしれない唯一の方法。ただし、あまりに馬鹿げている上に成功の可能性も少なく、ハジメが一番危険を請け負う方法だ。

メルドは逡巡するが、ベヒモスが既に戦闘態勢を整えている。再び頭部の兜が赤熱化を開始する。時間がない。

「……やれるんだな？」

「やります」

決然とした眼差しを真っ直ぐ向けてくるハジメに、メルド団長は「くっ」と笑みを浮かべる。

「まさか、お前さんに命を預けることになるとはな。……必ず助けてやる。だから……頼んだぞ！」

「はー！」

メルド団長はそう言うのとベヒモスの前に出た。そして、簡易の魔法を放ち挑発する。ベヒモスは、先ほど光輝を狙ったように自分に歯向かう者を標的にする習性があるようだ。しっかりとその視線がメルド団長に向いている。

そして、赤熱化を果たした兜を掲げ、突撃、跳躍する。メルド団長は、ギリギリまで引き付けるつもりなのか目を見開いて構えている。そして、小さく詠唱をした。

「吹き散らせ——【風壁】」

詠唱と共にボックスステップで離脱する。

その直後、ベヒモスの頭部が一瞬前までメルド団長がいた場所に着弾した。発生した衝撃波や石礫は、「風壁」でどうにか逸らす。大雑把な攻撃なので避けるだけならなんとかなる。倒れたままの光輝達を守りながらでは全滅していただろうが。

再び、頭部をめり込ませるベヒモスに、ハジメが飛びついた。赤熱化の影響が残って

おりハジメの肌を焼く。しかし、そんな痛みは無視してハジメも詠唱した。名称だけの詠唱。最も簡易で、唯一の魔法。

「――【錬成】！」

石中に埋まっていた頭部を抜こうとしたベヒモスの動きが止まる。周囲の石を砕いて頭部を抜こうとしても、ハジメが錬成して直してしまふからだ。

ベヒモスは足を踏ん張り力づくで頭部を抜こうとするが、今度はその足元が錬成される。ずぶりと一メートル以上沈み込む。更にダメ押しと、ハジメは、その埋まった足元を錬成して固める。

ベヒモスのパワーは凄まじく、油断すると直ぐ周囲の石畳に亀裂が入り抜け出そうとするが、その度に錬成をし直して抜け出すことを許さない。ベヒモスは頭部を地面に埋めたままもがいている。中々に間抜けな格好だ。

その間に、メルドは回復した騎士団員と香織を呼び集め、光輝達を担ぎ離脱しようとする。

トラウムソルジャーの方は、どうやら幾人かの生徒が冷静さを取り戻したようで、周囲に声を掛け連携を取って対応し始めているようだ。立ち直りの原因が、実は先ほどハジメが助けた女子生徒だったりする。地味に貢献しているハジメである。

「待つて下さい！　まだ、南雲くんがっ」

撤退を促すメルド団長に香織が猛抗議した。

「坊主の作戦だ！　ソルジャーどもを突破して安全地帯を作ったら魔法で一斉攻撃を開始する！　もちろん坊主がある程度離脱してからだ！　魔法で足止めしている間に坊主が帰還したら、上階に撤退だ！」

「なら私も残ります！」

「ダメだ！　撤退しながら、香織には光輝を治癒してもらわにやならん！」

「でも！」

「なら俺が行きます」

「立香／藤丸くん!?!」



なお、言い募る香織こ横から立香が二人に提案する。

「お前いつの間に！」

「そんなことを言ってる場合じゃないですよ、それに俺ならハジメの考えがわかるしフオローもできます」

「しかし……」

「それぞれができる最善を。違いますか？」

「くっ……わかった。だが！」

「……」

「必ず、二人で帰って来い！」

「……はい！」

「藤丸くん！」

「香織！ アイツらの思いを無駄にする気か！」

「ツ——」

メルド団長を含めて、現状、メンバーの中で最大の攻撃力を持っているのは間違いない光輝である。少しでも早く治癒魔法を掛け回復させなければ、ベヒモスを足止めする

には火力不足に陥るかもしれない。そんな事態を避けるには、香織が移動しながら光輝を回復させる必要があるのだ。ベヒモスはハジメの魔力が尽きて錬成ができなくなつた時点で動き出す。

「天の息吹、満ち満ちて、聖浄と癒しをもたらさん——【天恵】」

香織は泣きそうな顔で、それでもしつかりと詠唱を紡ぐ。淡い光が光輝を包む。体の傷と同時に魔力をも回復させる治癒魔法だ。

メルド団長は、香織の肩をグツと掴み頷く。香織も頷き、もう一度、必死の形相で錬成を続けるハジメとそれをフォローする立香を振り返つた。そして、光輝を担いだメルド団長と、雫と龍太郎を担いだ騎士団員達と共に撤退を開始した。

トラウムソルジャーは依然増加を続けていた。既にその数は二百体はいるだろう。階段側へと続く橋を埋め尽くしている。

だが、ある意味それでよかつたのかもしれない。もし、もつと隙間だらけだつたなら、突貫した生徒が包囲され惨殺されていただろう。実際、最初の百体くらいの時に、それ

で窮地に陥っていた生徒は結構な数いたのだ。

それでも、未だ死人が出ていないのは、ひとえに騎士団員達と立香のおかげだろう。彼等の必死のカバーが生徒達を生かしていたといっても過言ではない。代償に、既に彼等は満身創痍だった。

騎士団員達のサポートがなくなり、立香はハジメのフォローに向かった状況で続々と増え続ける魔物にパニックを起こし、魔法を使いもせずに剣やら槍やら武器を振り回す生徒がほとんどである以上、もう数分もすれば完全に瓦解するだろう。

生徒達もそれをなんとなく悟っているのか表情には絶望が張り付いている。先ほど立香が助けた優花の呼びかけで少ないながらも連携をとり奮戦していた者達も限界が近いようで泣きそうな表情だ。

誰もが、もうダメかもしれない、そう思ったとき……

「――【天翔閃】！」

純白の斬撃がトラウムソルジャー達の下真ん中を切り裂き吹き飛ばしながら炸裂した。

橋の両側にいたソルジャー達も押し出されて奈落へと落ちていく。斬撃の後は、直ぐに雪崩れ込むように集まったトラウムソルジャー達で埋まってしまったが、生徒達は確かに、一瞬空いた隙間から上階へと続く階段を見た。今まで渴望し、どれだけ剣を振るっても見えなかった希望が見えたのだ。

「皆！ 諦めるな！ 道は俺が切り開く！」

そんなセリフと共に、再び【天翔閃】が敵を切り裂いていく。光輝が発するカリスマに生徒達が活気づく。

「お前達！ 今まで何をやってきた！ 訓練を思い出せ！ さっさと連携をとらんか！ 馬鹿者共が！」

皆の頼れる団長が【天翔閃】に勝るとも劣らない一撃を放ち、敵を次々と打ち倒す。

いつも通りの頼もしい声に、沈んでいた気持ちも復活する。手足に力が漲り、頭がクリアになっていく。実は、香織の魔法の効果も加わっている。精神を鎮める魔法だ。リラックスできる程度の魔法だが、光輝達の活躍と相まって効果は抜群だ。

治癒魔法に適性のある者がこぞって負傷者を癒し、魔法適性の高い者が後衛に下がって強力な魔法の詠唱を開始する。前衛職はしっかりと隊列を組み、倒すことより後衛の守りを重視し堅実な動きを心がける。

治癒が終わり復活した騎士団員達も加わり、反撃の狼煙が上がった。チートどもの強力な魔法と武技の波状攻撃が、怒涛の如く敵目掛けて襲いかかる。凄まじい速度で殲滅していき、その速度は、遂に魔法陣による魔物の召喚速度を超えた。

そして、階段への道が開ける。

「皆！ 続け！ 階段前を確保するぞ！」

光輝が掛け声と同時に走り出す。

ある程度回復した龍太郎と雫がそれに続き、バターを切り取るようにトラウムソルジャーの包囲網を切り裂いていく。

そうして、遂に全員が包囲網を突破した。背後で再び橋との通路が肉壁ならぬ骨壁により閉じようとするが、そうはさせじと光輝が魔法を放ち蹴散らす。

クラスメイトが訝しそうな表情をする。それもそうだろう。目の前に階段があるのだ。さっさと安全地帯に行きたいと思うのは当然である。

「皆、待って！ 藤丸くんと南雲くんを助けなきゃ！ 藤丸くんと南雲くんがたった二人であの怪物を抑えてるの！」

香織のその言葉に何を言っているんだという顔をするクラスメイト達。そう思うのも仕方ない。なにせ、立香とハジメは「無能」で通っているのだから。

だが、困惑するクラスメイト達が、数の減ったトラウムソルジャー越しに橋の方を見ると、そこには確かにハジメの姿があった。

「なんだよあれ、何してんだ？」

「あの魔物、上半身が埋まつてる？」

次々と疑問の声を漏らす生徒達にメルド団長が指示を飛ばす。

「そうだ！ 坊主達がたつた二人であの化け物を抑えているから撤退できたんだ！ 前衛組！ ソルジャーどもを寄せ付けるな！ 後衛組は遠距離魔法準備！ もうすぐ坊主の魔力が尽きる。アイツが離脱したら一斉攻撃で、あの化け物を足止めしろ！」

ビリビリと腹の底まで響くような声に気を引き締め直す生徒達。中には階段の方向を未練に満ちた表情で見ている者もいる。

無理もない。ついさつき死にかけたのだ。一秒でも早く安全を確保したいと思うのは当然だろう。しかし、団長の「早くしろ！」という怒声に未練を断ち切るように戦場へと戻った。

その中には檜山大介もいた。自分の仕出かした事とはいえ、本気で恐怖を感じていた檜山は、直ぐにでもこの場から逃げ出したかった。

しかし、ふと脳裏にあの日の情景が浮かび上がる。

それは、迷宮に入る前日、ホルアドの町で宿泊していたときのこと。

緊張のせいか中々寝付けずにいた檜山は、トイレついでに外の風を浴びに行った。涼やかな風に気持ち落ち着いたのを感じ部屋に戻ろうとしたのだが、その途中、ネグリジェ姿の香織を見かけたのだ。

初めて見る香織の姿に思わず物陰に隠れて息を詰めていると、香織は檜山に気がつかずに通り過ぎて行った。

気になって後を追うと、香織は、とある部屋の前で立ち止まりノックをした。その扉から出てきたのは……立香だった。しかも、その後ろにはハジメまで居るではないか。

檜山は頭が真っ白になった。檜山は香織に好意を持っている。しかし、自分とでは釣り合わないと思っており、光輝のような相手なら、所詮住む世界が違うと諦められた。





に入っているのがわかる。

ベヒモスは相変わらずもがいているが、立香のお蔭でハジメが距離を取る時間が稼げている。それを無駄にしない為にも少しでも距離を取らなければならない。

額の汗が目に入る。極度の緊張で心臓がバクバクと今まで聞いたことがないくらい大きな音を立てているのがわかる。

ハジメはタイミングを見計らった。

そして、数十度目の亀裂が走ると同時に最後の錬成でベヒモスを拘束する。同時に、

「立香！」

「了…解!!」

立香を呼び一気に駆け出した。

立香とハジメが猛然と逃げ出した五秒後、地面が破裂するように粉碎されベヒモスが

咆哮と共に起き上がる。その眼に、憤怒の色が宿っていると感じるのは勘違いではないだろう。鋭い眼光が己に無様を晒させた怨敵を探し……

二人を捉えた。

再度、怒りの咆哮を上げるベヒモス。立香とハジメを追いかけようと四肢に力を溜めた。

だが、次の瞬間、あらゆる属性の攻撃魔法が殺到した。

夜空を流れる流星の如く、色とりどりの魔法がベヒモスを打ち据える。ダメージはやはり無いようだが、しつかりと足止めになっている。

いける！ と確信し、転ばないよう注意しながら頭を下げて全力で走るハジメ。すぐ頭上を致死性の魔法が次々と通っていく感覚は正直生きた心地がしないが、チート集団がそんなミスをするはずないと信じて駆ける。ベヒモスとの距離は既に三十メートルは広がった。

思わず、頬が緩む。

しかし、その直後、ハジメの表情は凍りついた。

無数に飛び交う魔法の中で、一つの火球がクイツと軌道を僅かに曲げたのだ。

……ハジメの方に向かって。

明らかにハジメを狙い誘導されたものだ。

(なんで!?)

疑問や困惑、驚愕が一瞬で脳内を駆け巡り、ハジメは愕然とする。

咄嗟に踏ん張り、止まろうと地を滑るハジメの眼前に、その火球は突き刺さった。着弾の衝撃波をモロに浴び、来た道を引き返すように吹き飛ぶ。直撃は避けたし、内臓などへのダメージもないが、三半規管をやられ平衡感覚が狂ってしまった。

フラフラしながら少しでも前に進もうと立ち上がるが……

ベヒモスも、いつまでも一方的にやられっぱなしではなかった。ハジメが立ち上がった直後、背後で咆哮が鳴り響く。思わず振り返ると三度目の赤熱化をしたベヒモスの眼光がしっかりとハジメを捉えていた。

そして、赤熱化した頭部を盾のようにかざしながらハジメに向かって突進する！

フラつく頭、霞む視界、迫り来るベヒモス、遠くで焦りの表情を浮かべ悲鳴と怒号を上げるクラスメイト達。

ハジメは、なけなしの力を振り絞り、必死にその場を飛び退いた。直後、怒りの全てを集束したような激烈な衝撃が橋全体を襲った。ベヒモスの攻撃で橋全体が震動する。着弾点を中心に物凄い勢いで亀裂が走る。メキメキと橋が悲鳴を上げる。

そして遂に……橋が崩壊を始めた。

度重なる強大な攻撃にさらされ続けた石造りの橋は、遂に耐久限度を超えたのだ。

「グウアアアア!?!」

悲鳴を上げながら崩壊し傾く石畳を爪で必死に引つ掻くベヒモス。しかし、引つ掛けた場所すら崩壊し、抵抗も虚しく奈落へと消えていった。ベヒモスの断末魔が木霊する。

ハジメもなんとか脱出しようといざずるが、しがみつく場所も次々と崩壊していく。

（ああ、ダメだ……）

と思っていた時、

「ハジメー!」

その手を立香が掴んだ

しかし、今度は先程自分を襲ったものとは違う風の魔法が立香目掛けて襲いかかる。クラスメイトのフォローに加えベヒモスの対処、更に今は崩壊している橋の中でハジメを救出しようとした。そんな状況で流石の立香も自らを守ることができず……

「があっ！」

立香とハジメは奈落の底へ落ちていった。

二人が最後に見たのは、香織や雫が飛び出そうとして光輝や龍太郎に羽交い締めになれ、他のクラスメイトは青褪めたり目や口元を手で覆ったりしていて、メルド達騎士団の面々も悔しそうな表情で立香とハジメを見ていた光景だった。

## 第八歩 「お粗末な悪意は僕の掌の上」

響き渡り消えゆくベヒモスの断末魔。ガラガラと騒音を立てながら崩れ落ちてゆく石橋。

そして……

瓦礫と共に奈落へと吸い込まれるように消えてゆく立香とハジメ。

その光景を、まるでスローモーションのように緩やかになった時間の中で、ただ見ていることしかできない香織は自分に絶望する。

香織の頭の中には、昨夜の光景が繰り返し流れていた。

月明かりの射す部屋の中で、立香の入れたお世辞抜きで美味しいと思えた紅茶モドキを飲みながら三人で話をした。あんなにじっくり話したのは初めてだった。



夢見が悪く不安に駆られて、いきなり訪ねた香織に落ち着いた様子 of 立香と逆に随分と驚いていたハジメ。それでも真剣に話を聞いてくれて、気がつけば不安は消え去り思ひ出話に花を咲かせていた。

立香と二人きりで部屋に戻った時に指摘され、今更のように自分が随分と大胆な格好をしていたことに気がつき、羞恥に身悶えると同時に、立香に可愛いと言われたり、襲つてしまうかもと言われたり、嬉しいような恥ずかしいような思いで一人百面相する香織に、部屋に戻つて来た同室の雫が呆れた表情をしていたのも黒歴史だろう。

そして、あの晩、一番重要なことは、香織が約束をしたことだ。

“立香とハジメを守る”という約束。立香が香織の不安を和らげるために提案してくれた香織のための約束だ。奈落の底へ消えた立香とハジメを見つめながら、その時の記憶が何度も何度も脳裏を巡る。

どこか遠くで聞こえていた悲鳴が、実は自分のものだと思つた香織は、急速に戻つてきた正常な感覚に顔を顰めた。

「離して！ 藤丸くんと南雲くんの所に行かないと！ 約束したのに！ 私があ、私が守るって！ 藤丸くんの所へ！ だから！ 離してえ！」

飛び出そうとする香織を光輝が必死に羽交い締めにする。香織は、細い体のどこにそんな力があるのかと疑問に思うほど尋常ではない力で引き剥がそうとする。

このままでは香織の体の方が壊れるかもしれない。しかし、だからといって、断じて離すわけにはいかない。今の香織を離せば、そのまま崖を飛び降りるだろう。それくらい、普段の穏やかさが見る影もないほど必死の形相だった。いや、悲痛というべきかもしれない。

本来なら、香織を抑えるのは光輝ともう一人いるのだが、今回は落ちた人が悪すぎた。

「離しなさい！ 龍太郎っ離して！ 立香！ いや！ 立香、立香あああ！」  
「落ち着け、雫！ このつどんだけ力強いんだよ！」

そう、雫も最愛の立香が落ちたことにより悲鳴を上げながら崖を飛び降りようとしていたのだ。それを龍太郎が必死に抑えるが元々香織よりもステータスの高い雫だ。少

しでも気を抜いたらすぐさま龍太郎を振り払って飛び降りるだろう。

「香織！ 雫も！ 君達まで死ぬ気か！ 藤丸と南雲はもう無理だ！ 落ち着くんだ！  
このままじゃ、体が壊れてしまう！」

それは、光輝なりに精一杯、香織と雫を氣遣った言葉。しかし、今この場で錯乱する香織と雫には言うべきでない言葉だった。

「無理って何!? 藤丸くんと南雲くんは死んでない！ 行かないと、藤丸くんはきつと助けを求めてる！」

「あんたに何がわかるの!? 立香は絶対に生きてる！ だから早く行かせなさい！」

誰がどう考えても藤丸立香と南雲ハジメは助からない。奈落の底と思しき崖に落ちていったのだから。

しかし、その現実を受け止められる心の余裕は、今の香織と雫にはない。言ってしまったえば反発して、更に無理を重ねるだけだ。周りの生徒もどうすればいいか分からず、才

口オ口とするばかり。

その時、メルド団長がツカツカと歩み寄り、問答無用で香織と雫の首筋に手刀を落とした。ビクツと一瞬痙攣し、そのまま意識を落とす香織。

ぐったりする香織を抱きかかえた光輝がキツとメルド団長を睨む。文句を言おうとした矢先、恵里が遮るように機先を制し、団長に頭を下げた。

「すいません。ありがとうございます」

「礼など……止めてくれ。もう一人も死なせるわけにはいかない。全力で迷宮を離脱する。……彼女達を頼む」

「わかりました。鈴、手伝って」

「う、うん。わかった」

「あ、私も手伝う」

離れていく団長を見つめながら、口を挟めず無然とした表情の光輝から香織と雫を受け取った恵里と鈴。そして手伝っている優花。香織を受け取った恵里は光輝に告げる。

「私達が止められないから団長が止めてくれたんだよ。わかるでしょ？ 今は時間がな

いの。香織ちゃんと雫ちゃんの叫びが皆の心にもダメージを与えてしまう前に、何より香織ちゃんと雫ちゃんが壊れる前に止める必要があった。……ほら、天之河くんが道を切り開くんだよ。全員が脱出するまで。……南雲君も言っていたでしょう？」

恵里の言葉に、光輝は頷いた。

「そうだな、早く出よう」

目の前でクラスメイトが二人も死んだのだ。クラスメイト達のも多大なダメージが刻まれている。誰もが茫然自失といった表情で石橋のあった方をポーと眺めていた。中には「もう嫌！」と言って座り込んでしまう子もいる。

ハジメが光輝に叫んだように今の彼等にはリーダーが必要なのだ。

光輝がクラスメイト達に向けて声を張り上げる。

「皆！ 今は、生き残ることだけ考えるんだ！ 撤退するぞ！」

その言葉に、クラスメイト達はノロノロと動き出す。トラウムソルジャーの魔法陣は未だ健在だ。続々とその数を増やしている。今の精神状態で戦うことは無謀であるし、戦う必要もない。

光輝は必死に声を張り上げ、クラスメイト達に脱出を促した。メルド団長や騎士団員達も生徒達を鼓舞する。

そして全員が階段への脱出を果たした。

上階への階段は長かった。

先が暗闇で見えない程ずっと上方へ続いており、感覚では既に三十階以上、上つていくはずだ。魔法による身体強化をしても、そろそろ疲労を感じる頃である。先の戦いでダメージもある。薄暗く長い階段はそれだけで気が滅入るものだ。

そろそろ小休止を挟むべきかとメルド団長が考え始めたとき、ついに上方に魔法陣が描かれた大きな壁が現れた。

クラスメイト達の顔に気が戻り始める。メルド団長は扉に駆け寄り詳しく調べ始めた。フェアスコープを使うのも忘れない。

その結果、どうやらトラップの可能性はなさそうであることがわかった。魔法陣に刻まれた式は、目の前の壁を動かすためのもののようなのだ。

メルド団長は魔法陣に刻まれた式通りに一言の詠唱をして魔力を流し込む。すると、まるで忍者屋敷の隠し扉のように扉がクルリと回転し奥の部屋へと道を開いた。

扉を潜ると、そこは元の二十階層の部屋だった。

「帰ってきたの?」

「戻ったのか!」

「帰れた……帰れたよお……」

クラスメイト達が次々と安堵の吐息を漏らす。中には泣き出す子やへたり込む生徒もいた。光輝達ですら壁にもたれかかり今にも座り込んでしまいそうだ。

しかし、ここはまだ迷宮の中。低レベルとは言え、いっどこから魔物が現れるかわか

らない。完全に緊張の糸が切れてしまう前に、迷宮からの脱出を果たさなければならぬ。

メルド団長は休ませてやりたいという気持ちを抑え、心を鬼にして生徒達を立ち上がらせた。

「お前達！ 座り込むな！ ここが気が抜けたら帰れなくなるぞ！ 魔物との戦闘はなるべく避けて最短距離で脱出する！ ほら、もう少しだ、踏ん張れ！」

少しくらい休ませてくれよ、という生徒達の無言の訴えをギンツと目を吊り上げて封殺する。

洩々、フラフラしながら立ち上がる生徒達。光輝が疲れを隠して率先して先をゆく。道中の敵を、騎士団員達が中心となつて最小限だけ倒しながら一気に地上へ向けて突き進んだ。

そして遂に、一階の正面門とんだか懐かしい気さえする受付が見えた。迷宮に入つて一日も立っていないはずなのに、ここを通つたのがもう随分昔のような気がしているのは、きっと少数ではないだろう。



今度こそ本当に安堵の表情で外に出て行く生徒達。正面門の広場で大の字になって倒れ込む生徒もいる。一様に生き残ったことを喜び合っているようだ。

だが、一部の生徒——未だ目を覚まさない香織と雫。二人を支えている恵里、鈴、優花。そしてその様子を見る光輝、龍太郎などは暗い表情だ。

そんな生徒達を横目に気にしつつ、受付に報告に行くメルド団長。

二十階層で発見した新たなトラップは危険すぎる。石橋が崩れてしまったので罨として未だ機能するかはわからないが報告は必要だ。

そして、立香とハジメの死亡報告もしなければならぬ。

憂鬱な気持ちを顔に出さないように苦労しながら、それでも溜息を吐かずにはいられないメルド団長だった。

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

ホルアドの町に戻った一行は何かする元気もなく宿屋の部屋に入った。幾人かの生徒は生徒同士で話し合ったりしているようだが、ほとんどの生徒は真つ直ぐベッドにダイブし、そのまま深い眠りに落ちた。

そんな中、檜山大介は一人、宿を出て町の一角にある目立たない場所で膝を抱えて座り込んでいた。顔を膝に埋め微動だにしない。もし、クラスメイトが彼のこの姿を見れば激しく落ち込んでいるように見えただろう。

だが実際は……

「ヒ、ヒヒヒ。ア、アイツらが悪いんだ。雑魚のくせに……ちよ、調子に乗るから……て、天罰だ。……俺は間違っていない……白崎のためだ……あんな雑魚共に……もうかかわらなくていい……俺は間違っていない……ヒ、ヒヒ」

暗い笑みと濁った瞳で自己弁護しているだけだった。

そう、あの時、軌道を逸れてまるで誘導されるようにハジメを襲った火球と立香に直接当たった風球は、この檜山が放ったものだったのだ。

階段への脱出と二人の救出。それらを天秤にかけた時、立香とハジメを見つめる香織が視界に入った瞬間、檜山の中の悪魔が囁いたのだ。今なら殺つても気づかれないぞ？と。

そして、檜山は悪魔に魂を売り渡した。

バレないように絶妙なタイミングを狙って誘導性を持たせた火球をハジメに着弾させた。流星の如く魔法が乱れ飛ぶあの状況では、誰が放った魔法か特定は難しいだろう。まして、檜山の適性属性は風だ。証拠もないし分かるはずがなかった。

しかし、それを立香が助けた事で彼は焦り、思わず風の魔法を使って直接立香に攻撃したのだ。

それによりバレルの可能性が大きくなったが、あんな状況だからきつとバレない。そう自分に言い聞かせ。暗い笑みを浮かべる檜山。

その時、不意に背後から声を掛けられた。

「へえ、やつぱり君だったんだ。異世界最初の殺人がクラスメイトか……中々やるね？」

「ッ!? だ、誰だ！」

慌てて振り返る檜山。そこにいたのは見知ったクラスメイトの一人だった。

「お、お前、なんでここに……」

「そんなことはどうでもいいよ。それより……人殺しさん？ 今どんな気持ち？ 恋敵をどさくさに紛れて殺すのってどんな気持ち？」

その人物はクスクスと笑いながら、まるで喜劇でも見たように楽しそうな表情を浮かべる。檜山自身がやったこととは言え、クラスメイトが一人死んだというのに、その人

物はまるで堪えていない。ついさつきまで、他のクラスメイト達と同様に、ひどく疲れ  
た表情でシヨックを受けていたはずなのに、そんな影は微塵もなかった。

「……それが、お前の本性なのか？」

呆然と呟く檜山。

それを、馬鹿にするような見下した態度で嘲笑う。

「本性？ そんな大層なものじゃないよ。誰だって猫の一匹や二匹被っているのが普通  
だよ。そんなことよりさ……このこと、皆に言いふらしたらどうなるかな？ 特に……

あの子が聞いたら……」

「ッ!? そ、そんなこと……信じるわけ……証拠も……」

「ないって？ でも、僕が話したら信じるんじゃないかな？ 僕がそれなりのカースト  
上位にいるのは君も知っているだろう？ それに、あの窮地を招いた君の言葉には、既  
に力はないと思うけど？」

檜山は追い詰められる。まるで弱ったネズミを更に嬲るかのような言葉。まさか、こんな奴だったとは誰も想像できないだろう。二重人格と言われた方がまだ信じられる。目の前で嗜虐的な表情で自分を見下す人物に、全身が悪寒を感じ震える。

「ど、どうしろってんだ!？」

「うん? 心外だね。まるで僕が脅しているようじゃない? ふふ、別に直ぐにどうこうしろってわけじゃないよ。まあ、取り敢えず、僕の手足となつて従ってくればいいよ」

「そ、そんなの……」

実質的な奴隷宣言みたいなものだ。流石に、躊躇する檜山。当然断りたいが、そうすれば容赦なく立香とハジメを殺したのは檜山だと言いつらすだろう。

葛藤する檜山は、「いっそコイツも」とほの暗い思考に囚われ始める。しかし、その人物はそれも見越していたのか悪魔の誘惑をする。

「白崎香織、欲しくない?」

「ッ!? な、何を言つて……」

暗い考えを一瞬で吹き飛ばされ、驚愕に目を見開いてその人物を凝視する檜山。そんな檜山の様子をニヤニヤと見下ろし、その人物は誘惑の言葉を続ける。

「僕に従うなら……いずれ君の望むモノが手に入るよ。本当はこの手の話は南雲にしようと思つていただけ……君が殺しちゃうから。まあ、彼より君の方が適任だとは思ふし結果オーライかな？」

「……何が目的なんだ。お前は何がしたいんだ！」

あまりに訳の分からない状況に檜山が声を荒らげる。

「ふふ、君には関係のないことだよ。まあ、欲しいモノがあるとだけ言っておくよ。……それで？ 返答は？」

あくまで小バカにした態度を崩さないその人物に苛立ちを覚えるものの、それ以上に、あまりの変貌ぶりに恐怖を強く感じた檜山は、どちらにしろ自分に選択肢などないと諦めの表情で頷いた。

「……従う」

「アハハハハハ、それはよかった！ 僕もクラスメイトを告発するのは心苦しかったからね！ まあ、仲良くやろうよ、人殺しさん？ アハハハハハ」

楽しそうに笑いながら踵を返し宿の方へ歩き去っていくその人物の後ろ姿を見ながら、檜山は「ちくしょう……」と小さく呟いた。

檜山の脳裏には忘れてたくても、否定したくても絶対に消えてくれない光景がこびり付いている。立香とハジメが奈落へと転落した時の香織の姿。特に立香へ向ける目。どんな言葉より雄弁に彼女の気持ちを物語っていた。

今は疲れ果て泥のように眠っているクラスメイト達も、落ち着けば立香とハジメの死を実感し、香織の気持ちを悟るだろう。香織が決して善意だけで立香とハジメを構っていたわけではなかったということ。

しかも、今回で香織だけで無く雫の気持ちも周囲に知れ渡ることとなった





てるんだらうな」

なんてことを呟きながら歩いてた

「バカだよね、香織ちゃんの好意が立香に向いてる以上、檜山が香織を手に入れるなんて、たとえ立香が死んでもあり得ないのに」

まるで立香のことを知り尽くしているような雰囲気、檜山が香織を手に入れることが出来ないかと断言していた。

「まあ、僕としては都合のいい駒の叶わない望みなんてどーでもいいけど」

そう言いつて、その人物は懐から蒼く光る宝石を取り出し、嬉しそうに笑う。

「にしても、本当に立香がくれた物や貸してくれた物は凄いやね、どうなってるんだろ？ うーん…別にいつか！ 僕は立香の為に頑張るだけだし！ 褒めてくれるかな…さて、それはそれとして……………」

一旦そこで立ち止まり、檜山がいた方をさつきまでの嬉しそうな表情とは真逆の、光の無い瞳と無表情をしながら見ながらあまりに低い声で、

立香を傷つけてくれたんだ。躊躇も容赦も慈悲も希望も無く使い潰してあげるから、せいぜい束の間の夢を見ているといい」

そう言って、もう一度宿に向かって歩きだし、夜の中に消えていった。

## 第九歩 「奈落の底は動物園……ハハツ!!」(白目)

ザアーと水の流れる音がする。

冷たい微風が頬を撫で、冷え切った体が身震いした。頬に当たる硬い感触と下半身の刺すような冷たい感触に「うっ」と呻き声を上げてハジメは目を覚ました。

ボーとする頭、ズキズキと痛む全身に眉根を寄せながら両腕に力を入れて上体を起こす。

「痛っ、こゝは……僕は確か……」

ふらつく頭を片手で押さええながら、記憶を辿りつつ辺りを見回す。

周りは薄暗いが緑光石の発光のおかげで何も見えないほどではない。視線の先には幅五メートル程の川があり、ハジメの下半身が浸かっていた。上半身が、突き出た川辺

の岩に引っかかって乗り上げたようだ。

「そうだ……確か、橋が壊れて落ちたんだ。……それで……」

霧がかかったようだった頭が回転を始める。

ハジメが奈落到ちていながら助かったのは全くの幸運だった。

落下途中の崖の壁に穴があいており、そこから鉄砲水の如く水が噴き出していたのだ。ちよつとした滝である。そのような滝が無数にあり、ハジメは何度もその滝に吹き飛ばされながら次第に壁際に押しやられ、最終的に壁からせり出していた横穴からウォータースライダーの如く流されたのである。とてつもない奇跡だ。

もつとも、横穴に吹き飛ばされた時、体を強打し意識を飛ばしていたのでハジメ自身は、その身に起きた奇跡を理解していないが。

「よく思い出せないけど、とにかく、助かったんだな。……はつくしゅん！ ぎ、寒い」

地下水という低温の水にずっと浸かっていた為に、すっかり体が冷えてしまっている。このままでは低体温症の恐れもあると早々に川から上がるハジメ。ガクガクと震えながら服を脱ぎ、絞っていく。

そして、パンツ一枚になると錬成の魔法を使った。硬い石の地面に錬成で魔法陣を刻んでいく。

「ぐっ、寒くてしゅ、集中しづらい……」

望むのは火種の魔法だ。その辺の子供でも十センチ位の魔法陣で出すことができる簡単な魔法。

しかし、今ここには魔法行使の効率を上げる魔石がない上、ハジメは魔法適性ゼロ。たった一つの火種を起こすのにメートル以上の大きさの複雑な式を書かなければならない。

十分近くかけてようやく完成した魔法陣に詠唱で魔力を通し起動させる。

「求めるは火、其れは力にして光、顕現せよ、【火種】 ……うゝ、なんでただの火を起こすのにこんな大仰な詠唱がいるんだよお、恥ずかしすぎる。はあく」

最近、癖になりつつある溜息を深々と吐き、それでも発動した拳大の炎で暖をとりつつ、傍に服も並べて乾かす。

「( ) ( ) ( ) なんだろう。 ……だいぶ落ちたんだと思うけど……帰れるかな……」

暖かな火に当たりながら気持ちが悪くなり着いてくると、次第に不安が胸中を満たしていく。

無性に泣きたくなって目の端に涙が溜まり始めるが、今泣いては心が折れてしまいそうグツと堪える。ゴシゴシと目元を拭って溜まった涙を拭うと、ハジメは両手でパンツと頬を叩いた。

「やるしかない。なんとか地上に戻ろう。大丈夫、きつと大丈夫だ」

自分に言い聞かせるように呟き、俯けていた顔を起こし決然とした表情でジツと炎を

見つめた。

それから、暫く経ち。ハジメは大事なことを思い出す。そう、幼い頃からの親友であり、こつちトータスに来てからもずっと助けてくれた藤丸立香の存在を。

「そうだ、立香！ あの時、僕の手を掴んだまま一緒に落ちて、それから………駄目だ、思い出せない。でも、探さない」と

立香を探す為、そして地上へ戻る為に服もあらかた乾かし出発することにする。しかし、どの階層にいるのかはわからないが迷宮の中であるのは間違いない以上、どこに魔物が潜んでいてもおかしくない。

ハジメは慎重に慎重を重ねて奥へと続く巨大な通路に歩を進めた。

ハジメが進む通路は正しく洞窟といった感じだった。

低層の四角い通路ではなく岩や壁があちこちからせり出し通路自体も複雑にうねっている。二十階層の最後の部屋のようにだ。



ただし、大きさは比較にならない。複雑で障害物だらけでも通路の幅は優に二十メートルはある。狭い所でも十メートルはあるのだから相当な大きさだ。歩き難くはあるが、隠れる場所も豊富にあり、ハジメは物陰から物陰に隠れながら進んでいった。

そうやってどれくらい歩いただろうか。

ハジメがそろそろ疲れを感じ始めた頃、遂に初めての分かれ道にたどり着いた。巨大な四辻である。ハジメは岩の陰に隠れながら、どの道に進むべきか逡巡した。

しばらく考え込んでいると、視界の端で何かが動いた気がして慌てて岩陰に身を潜める。

そつと顔だけ出して様子を窺うと、ハジメのいる通路から直進方向の道に白い毛玉がピョンピョンと跳ねているのがわかった。長い耳もある。見た目はまんまウサギだった。

ただし、大きさが中型犬くらいあり、後ろ足がやたらと大きく発達している。そして何より赤黒い線がまるで血管のように幾本も体を走り、ドクンドクンと心臓のように脈打っていた。物凄く不気味である。

明らかにヤバそうな魔物なので、直進は避けて右か左の道に進もうと決める。ウサギ

の位置からして右の通路に入るほうが見つかりにくそうだ。

ハジメは息を潜めてタイミングを見計らう。そして、ウサギが後ろを向き地面に鼻を付けてフンフンと嗅ぎ出したところで、今だ！ と飛び出そうとした。

その瞬間、ウサギがピクツと反応したかと思うとスツと背筋を伸ばし立ち上がった。警戒するように耳が忙しくあちこちに向いている。

（やばい！ み、見つかった？ だ、大丈夫だよね？）

岩陰に張り付くように身を潜めながらバクバクと脈打つ心臓を必死に抑える。あの鋭敏そうな耳に自分の鼓動が聞かれそうな気がして、ハジメは冷や汗を流す。

だが、ウサギが警戒したのは別の理由だったようだ。

「グルウア!!」

獣の唸り声と共に、これまた白い毛並みの狼のような魔物がウサギ目掛けて岩陰から

飛び出したのだ。

その白い狼は大型犬くらの大きさで尻尾が二本あり、ウサギと同じように赤黒い線が体に走って脈打っている。

どこから現れたのか一体目が飛びかかった瞬間、別の岩陰から更に二体の二尾狼が飛び出す。

再び岩陰から顔を覗かせその様子を観察するハジメ。どう見ても、狼がウサギちゃん(ちゃん付けでできるほど可愛くないが)を捕食する瞬間だ。

ハジメは、このドサクサに紛れて移動しようかと腰を浮かせた。

だがしかし……

「キュウー！」

可愛らしい鳴き声を洩らしたかと思つた直後、ウサギがその場で飛び上がり、空中でぐるりと一回転して、その太く長いウサギ足で一体目の二尾狼に回し蹴りを炸裂させた。

ドパンツ！

およそ蹴りが出せるとは思えない音を発生させてウサギの足が二尾狼の頭部にクリーンヒットする。

すると、

ゴギヤ！

という鳴ってはいけない音を響かせながら狼の首があらゆる方向に捻じ曲がってしまった。

ハジメは腰を浮かせたまま硬直する。

そうこうしている間にも、ウサギは回し蹴りの遠心力を利用して更にくると空中で回転すると、逆さまの状態で空中を踏みしめて地上へ隕石の如く落下し、着地寸前で縦

に回転。強烈なかかと落としを着地点にいた二尾狼に炸裂させた。

ベギヤ!

断末魔すら上げられずに頭部を粉碎される狼二匹目。

その頃には更に二体の二尾狼が現れて、着地した瞬間のウサギに飛びかかった。

今度こそウサギの負けかと思われた瞬間、なんとウサギはウサミミで逆立ちしブレイクダンスのように足を広げたまま高速で回転をした。

飛びかかっていた二尾狼二匹が竜巻のような回転蹴りに弾き飛ばされ壁に叩きつけられる。グシャという音と共に血が壁に飛び散り、ズルズルと滑り落ち動かなくなつた。

最後の一匹が、グルルと唸りながらその尻尾を逆立てる。すると、その尻尾がバチバチと放電を始めた。どうやら二尾狼の固有魔法のようだ。

「グルウア!!」

咆哮と共に電撃がウサギ目掛けて乱れ飛ぶ。

しかし、高速で迫る雷撃をウサギは華麗なステップで右に左にとかわしていく。そして電撃が途切れた瞬間、一気に踏み込み二尾狼の顎にサマーソルトキックを叩き込んだ。

二尾狼は、仰け反りながら吹き飛び、グシヤと音を立てて地面に叩きつけられた。二尾狼の首は、やはり折れてしまっているようだ。

蹴りウサギは、

「キュー！」

と、勝利の雄叫び？ を上げ、耳をフアサと前足で払った。

(……………嘘だと言ってよママン……………)

乾いた笑みを浮かべながら未だ硬直が解けないハジメ。ヤバイなんてものじゃない。ハジメ達が散々苦勞したトラウムソルジャーがまるでオモチャに見える。もしかしたら単純で単調な攻撃しかしてこなかったベヒモスよりも、余程強いかもしれない。

ハジメは、「気がつかれたら絶対に死ぬ」と、表情に焦燥を浮かべながら無意識に後退る。

それが間違いだった。

カラン

その音は洞窟内にやたらと大きく響いた。

下がった拍子に足元の小石を蹴ってしまったのだ。あまりにベタで痛恨のミスである。ハジメの額から冷や汗が噴き出る。小石に向けていた顔をギギギと油を差し忘れた機械のように回して蹴りウサギを確認する。

蹴りウサギは、ばつちりハジメを見ていた。

赤黒いルビーのような瞳がハジメを捉え細められている。ハジメは蛇に睨まれたカエルの如く硬直した。魂が全力で逃げろと警鐘をガンガン鳴らしているが体は神経が切れたように動かない。

やがて、首だけで振り返っていた蹴りウサギは体ごとハジメの方を向き、足をたわめグツと力を溜める。

(来る！)

ハジメが本能と共に悟った瞬間、蹴りウサギの足元が爆発した。後ろに残像を引き連れながら、途轍もない速度で突撃してくる。

気がつけばハジメは、全力で横っ飛びをしていた。

直後、一瞬前までハジメのいた場所に砲弾のような蹴りが突き刺ささり、地面が爆発したように抉られた。硬い地面をゴロゴロと転がりながら、尻餅をつく形で停止するハ



ジメ。陥没した地面に青褪めながら後退る。

蹴りウサギは余裕の態度でゆらりと立ち上がり、再度、地面を爆発させながらハジメに突撃する。

ハジメは咄嗟に地面を錬成して石壁を構築するも、その石壁を軽々と貫いて蹴りウサギの蹴りがハジメに炸裂した。

咄嗟に左腕を掲げられたのは本能のなせる業か。顔面を粉碎されることだけはなかつたが、衝撃で吹き飛び、再び地面を転がった。停止する頃には激烈な痛みが左腕を襲う。

「ぐうっ——」

見れば左腕がおかしな方へ曲がりプラプラとしている。完全に粉碎されたようだ。痛みで蹲りながら必死で蹴りウサギの方を見ると、今度はあの猛烈な踏み込みはなく余裕の態度でゆつたりと歩いてくる。

ハジメの気のせいではなければ、蹴りウサギの目には見下すような、あるいは嘲笑うかのような色が見える。完全に遊ばれているようだ。

ハジメには、尻餅をつきながら後退するという無様しか出来ない。

やがて、蹴りウサギがハジメの目の前で止まった。地べたを這いずる虫けらを見るように見下ろす蹴りウサギ。そして、見せつけるかのように片足を大きく振りかぶった。

(……………で、終わりなのかな……………)

絶望がハジメを襲う。諦めを宿した瞳で呆然と掲げられた蹴りウサギの足を見やる。その視線の先で、遂に豪風と共に致死級の蹴りが振り下ろされた。

ハジメは恐怖でギョツと目をつぶる。

「……………」

しかし、いつまで経っても予想していた衝撃は来なかった。

ハジメが、恐る恐る目を開けると眼前に蹴りウサギの足があった。振り下ろされたま

ま寸止めされているのだ。

まさか、まだ遊ぶつもりなのかと更に絶望的な気分には襲われていると、奇妙なことに気がついた。よく見れば蹴りウサギがふるふると震えているのだ。

(な、何? 何を震えて……これじゃまるで怯えているみたいな……)

“まるで”ではなく、事実、蹴りウサギは怯えていた。

ハジメが逃げようとしていた右の通路から現れた新たな魔物の存在に。

その魔物は巨体だった。二メートルはあるだろう巨軀に白い毛皮。例に漏れず赤黒い線が幾本も体を走っている。その姿は、たとえるなら熊だった。ただし、足元まで伸びた太く長い腕に、三十センチはありそうな鋭い爪が三本生えているが。

その爪熊が、いつの間にか接近しており、蹴りウサギとハジメを睥睨していた。

辺りを静寂が包む。ハジメは元より蹴りウサギも硬直したまま動かない。いや、動けないのだろう。まるで、先程のハジメだ。爪熊を凝視したまま凍りついている。

「……グルルル」

と、この状況に飽きたとでも言うように、突然、爪熊が低く唸り出した。

「ッ!？」

蹴りウサギが夢から覚めたように、ビクッと一瞬震えると踵を返し脱兎の如く逃走を開始した。今まで敵を殲滅するために使用していたあの踏み込みを逃走のために全力使用する。

しかし、その試みは成功しなかった。

爪熊が、その巨体に似合わない素早さで蹴りウサギに迫り、その長い腕を使って鋭い爪を振るったからだ。蹴りウサギは流石の俊敏さでその豪風を伴う強烈な一撃を、体を捻ってかわす。

ハジメの目にも確かに爪熊の爪は掠りもせず、蹴りウサギはかわしきったように見え

た。

しかし……

着地した蹴りウサギの体はズルと斜めにずれると、そのまま噴水のように血を噴き出しながら別々の方向へドサリと倒れた。

愕然とするハジメ。あんなに圧倒的な強さを誇っていた蹴りウサギが、まるで為す術もなくあつさり殺されたのだ。

蹴りウサギが怯えて逃げ出した理由がよくわかった。あの爪熊は別格なのだ。蹴りウサギの、まるでカポエイラの達人のような武技を持つても歯が立たない化け物なのだ。

爪熊は、のしのしと悠然と蹴りウサギの死骸に歩み寄ると、その鋭い爪で死骸を突き刺しバリツボリツグチャと音を立てながら喰らってゆく。

ハジメは動けなかった。あまりの連続した恐怖に、そして蹴りウサギだったものを咀嚼しながらも鋭い瞳でハジメを見ている爪熊の視線に射すくめられて。

爪熊は三口ほどで蹴りウサギを全て腹に収めると、グルツと唸りながらハジメの方へ

体を向けた。その視線が雄弁に語る。次の食料はお前だと。

ハジメは、捕食者の目を向けられ恐慌に陥った。

「うわあああー!!」

意味もなく叫び声を上げながら折れた左腕のことも忘れて必死に立ち上がり爪熊とは反対方向に逃げ出す。

しかし、あの蹴りウサギですら逃げることも敵わなかった相手からハジメが逃げられる道理などない。ゴウツと風がうなる音が聞こえると同時に強烈な衝撃がハジメの左側面を襲った。そして、そのまま壁に叩きつけられる。

「がはっ!」

肺の空気が衝撃により抜け、咳き込みながら壁をズルズルと滑り崩れ落ちるハジメ。衝撃に揺れる視界でどうにか爪熊の方を見ると、爪熊は何かを咀嚼していた。

だが、一体何を咀嚼しているのだろう。蹴りウサギはきつき食べきつたはずである。それにどうして、食はんでいるその腕は見覚えがあるのだろう。

ハジメは理解できない事態に混乱しながら、何故かスツと軽くなった左腕を見た。正確には左腕のあつた場所を……

「あ、あれ？」

ハジメは顔を引き攣らせながら、なんで腕がないの？ どうして血が吹き出してるの？ と首を傾げる。脳が、心が、理解することを拒んでいるのだろう。

しかし、そんな現実逃避いつまでも続くわけがない。ハジメの脳が夢から覚めろというように痛みをもって現実を教える。

「あ、あ、あがあああああ——!!!」

ハジメの絶叫が迷宮内に木霊する。ハジメの左腕は肘から先がスッパリと切断されていた。

爪熊の固有魔法が原因である。あの三本の爪は風の刃を纏っており最大三十センチ先まで伸長して対象を切断できるのだ。

それを考えれば、むしろ腕一本で済んだのは僥倖だった。爪熊が遊んだのか、単にハジメの運が良かったのかはわからないが、本来なら蹴りウサギのように胴体ごと真つ二つにされていてもおかしくはなかったのだ。

ハジメの腕を咀嚼し終わった爪熊が悠然とハジメに歩み寄る。その目には蹴りウサギのような見下しの色はなく、ただひたすら食料という認識しかないように見えた。

眼前に迫り爪熊がゆっくりハジメに前足を伸ばす。その爪で切り裂かないということとは生きたまま食うつもりなのかかもしれない。

「あ、あ、ぐううう、れ、【錬成】え！」



あまりの痛みに涙と鼻水、涎で顔をベトベトに汚しながら、ハジメは右手を背後の壁に押し当て錬成を行った。ほとんど無意識の行動だった。

無能と罵られ魔法の適性も身体スペックも低いハジメの唯一の力。通常は、剣や槍、防具を加工するためだけの魔法。その天職を持つ者は例外なく鍛冶職に就く。故に戦いには役立たずと言われながら、異世界人ならではの発想で騎士団員達すら驚かせる使い方を考え、クラスメイトを助けることもできた力。

だからこそ、死の淵でハジメは無意識に頼り、そして、それ故に活路が開けた。

背後の壁に縦五十センチ横百二十センチ奥行二メートルの穴が空く。ハジメは爪熊の前足が届くという間一髪のところまでゴロゴロ転がりながら穴の中へ体を潜り込ませた。

目の前で獲物を逃したことに怒りをあらわにする爪熊。

「グウルアアア!!」

咆哮を上げながら固有魔法を発動し、ハジメが潜り込んだ穴目掛けて爪を振るう。凄まじい破壊音を響かせながら壁がガリガリと削られていく。

「うああああー！ 【錬成】！ 【錬成】！ 【錬成】え！」

爪熊の咆哮と壁が削られる破壊音に半ばパニックになりながら少しでもあの化け物から離れようと連続して錬成を行い、どんどん奥へ進んでいく。

後ろは振り返らない。がむしゃらに錬成を繰り返す。地面をほふく前進の要領で進んでいく。既に左腕の痛みの中は頭から飛んでいた。生存本能の命ずるままに唯一の力を振るい続ける。

どれくらいそうやって進んだのか。

ハジメにはわからなかったが、恐ろしい音はもう聞こえなかった。

しかし、実際はそれほど進んではいないだろう。一度の錬成の効果範囲は二メートル位であるし（これでも初期に比べ倍近く増えている）、何より左腕の出血が酷い。そう長

く動けるものではないだろう。

実際、ハジメの意識は出血多量により既に落ちかけていた。それでも、もがくように前へ進もうとする。

しかし……

「【錬成】 …… 【錬成】 …… 【錬成】 …… んんせえ ……」

何度錬成しても眼前の壁に変化はない。意識よりも先に魔力が尽きたようだ。ズルりと壁に当ててていた手が力尽きたように落ちる。

ハジメは、朦朧として今にも落ちそうな意識を辛うじて繋ぎ留めながらゴロリと仰向けに転がった。ポーとしながら真つ暗な天井を見つめる。この辺は緑光石が無いようにで明かりもない。

いつしかハジメは昔のことを思い出していた。走馬灯というやつかもしれない。保

育園時代から小学生、中学生、そして高校時代。様々な思い出が駆け巡るが、最後の思い出は……

月明かり射し込む窓辺での立香と香織との時間。必死な顔で自分の手を掴む立香の顔だった。

そんな事を思い出したからだろう。ハジメご最後に眩いたのは……

「……………助けてよお……………立香あ……………」

その言葉を最後にハジメの意識は闇に吞まれていった。意識が完全に落ちる寸前、びたつぴたと頬に水滴を感じた。

それはまるで、誰かの流した涙のようだった。

~~~~~

場所が変わって藤丸立香は……………

「うん。また腕前が上がったようだねマイ・ロード」

「……………そっか、それは良かった。けど……………」

「いつまでこの状態なんだよ!! このロクデナシブランドキャスターがああああああ
!!!」

現在進行形で、アヴァロンにてマーリンと会話(?)中であつた。

りがした。その香りに「えっ？」と考えた瞬間、立香は奈落の暗闇ではなく……………

凄く見覚えのある塔が視界に入る綺麗な花畑にいた

立香は慌てて花畑に着地すると、右手に掴んでいた感触が消えていることに気づき、側にいたここに連れて来た仕立て人であろう存在に話しかける。

「これはどういう事なのか、それとハジメがどうなったのか、説明してくれるよね……………マーリン？」

「ハハハ、友人が心配なのはわかったから、そう睨まないでくれたまえ、マイ・ロード」
睨まれているのにも関わらず、軽薄そうな微笑みを浮かべているのは、白い髪に同じ白いローブ、そして杖を持つ冠位グラウンドを持った魔術師野郎ことマーリンである。

彼こそが立香「のみ」を理想郷アヴァロンに連れて来た張本人であり、それを立香も理解しているからこそマーリンに問い詰める。

「そりあ睨みもするよ、わざわざ俺だけをアヴァロンに連れて来るなんて……………それで、今

ハジメがどうなっているのか、どうせマーリンなら見えているんでしょ？」

「まあそうなんだけど、ちよつとは再会を喜んでくれてもいいんじゃないかい？」

「こんな状況じゃなければね。で、ハジメは無事なの？」

「ああそこは安心して良い、君の友人はちゃんと生きていますよ」

「生きていますよ」ね……マーリンのそれはあんまり安心出来ないけど……

拭えない不安を抱えながら、訝しげな表情でマーリンを見てみると、ふと思いついたようにマーリンが「そうだ」と

「マイ・ロード、折角なんだ紅茶を一杯入れてくれないかな」

「紅茶？　なんでまた……」

「まあまあ、良いじゃないか久し振りなんだから」

「はあ、わかった。一杯だけだよ？」

そうして、マーリンに紅茶を入れて……………

数時間がたった!!!

そうならば、ハジメが心配な立香は当然、

「いつまでこの状態なんだよ!! このロクデナシグランドキヤスターがあああああ
!!!」

こうなる。

~~~~~

場所は戻って奈落の底

ぴちよん……ぴちよん……

水滴が頬ほおに当たり口の中に流れ込む感触に、ハジメは意識が徐々に覚醒していくのを感じた。そのことを不思議に思いながらゆっくりと目を開く。

(……生きてる? ……助かったの?)

疑問に思いながらグツと体を起こそうとして低い天井にガツツと額をぶつけた。

「あぐつ!?!」

自分の作った穴は縦幅が五十センチ程度しかなかったことを今更ながらに思い出し、ハジメは、錬成して縦幅を広げるために天井に手を伸ばそうとした。

しかし、視界に入る腕が一本しかないことに気がつき動揺をあらわにする。

しばらく呆然とするハジメだったが、やがて自分が左腕を失ったことを思い出し、その瞬間、無いはずの左腕に激痛を感じた。幻肢痛というやつだ。

そして、表情を苦悶に歪めながら反射的に左腕を押さえて気がつく。切断された断面の肉が盛り上がって傷が塞がっていることに。

「な、なんで? ……それに血もたくさん……!」

暗くて見えないが明かりがあればハジメの周囲が血の海になっていることがわかっただろう。普通に考えれば絶対に助からない出血量だった。

ハジメが右手で周りを探れば、ヌルヌルとした感触が返ってくる。まだ辺りに流した血が乾いていないのだろう。やはり、大量出血したことは夢ではなかったようだし、血が乾いていないことから、気を失って未だそれほど時間は経っていないようである。

にもかかわらず傷が塞がっていることに、ハジメが疑問を感じていると再び頬や口元にびちよんと水滴が落ちてきた。それが口に入った瞬間、ハジメは、また少し体に活力が戻った気がした。

「……………まさか……………これが?」

ハジメは幻肢痛と貧血による気怠さに耐えながら右手を水滴が流れる方へ突き出し錬成を行った。

そうやってふらつきながら再び錬成し奥へ奥へと進んで行く。

不思議なことに、岩の間からにじみ出るこの液体を飲むと魔力も回復するようで、いくら錬成しても魔力が尽きない。ハジメは休まず熱に浮かされたように水源を求めて錬成を繰り返した。

やがて、流れる謎の液体がポタポタからチョロチョロと明らかに量を増やし始めた頃、更に進んだところで、ハジメは遂に水源にたどり着いた。

「ハ……これは……」

そこにはバスケットボールぐらいの大きさの青白く発光する鉱石が存在していた。

その鉱石は、周りの石壁に同化するように埋まっており下方へ向けて水滴を滴らせている。神秘的で美しい石だ。アクアマリンの青をもっと濃くして発光させた感じが一番しつくりくる表現だろう。

ハジメは一瞬、幻肢痛も忘れて見蕩れてしまった。

そして縋り付くように、あるいは惹きつけられるように、その石に手を伸ばし直接口

を付けた。

すると、体の内に感じていた鈍痛や靄がかかったようだった頭がクリアになり倦怠感も治まっていく。

やはり、ハジメが生き残れたのはこの石から流れる液体が原因らしい。治療作用がある液体のようだ。幻肢痛は治まらないが、他の怪我や出血の弊害は、瞬く間に回復していく。

ハジメは知らないが、実はその石は“神結晶”と呼ばれる歴史上でも最大級の秘宝で、既に遺失物と認識されている伝説の鉱物だったりする。

神結晶は、大地に流れる魔力が、千年という長い時をかけて偶然できた魔力溜りにより、その魔力そのものが結晶化したものだ。直径三十センチから四十センチ位の大きさで、結晶化した後、更に数百年もの時間をかけて内包する魔力が飽和状態になると、液体となって溢れ出す。

その液体を“神水”と呼び、これを飲んだ者はどんな怪我也病も治るといふ。欠損部位を再生するような力はないが、飲み続ける限り寿命が尽きないと言われており、そのため不死の霊薬とも言われている。神代の物語に神水を使って人々を癒すエヒト神の姿が語られているという。

ようやく死の淵から生還したことを実感したのか、ハジメはそのままズルズルと壁にもたれながらへたり込んだ。

そして、死の恐怖に震える体を抱え体育座りしながら膝に顔を埋めた。既に脱出しようという気力はない。ハジメは心を折られてしまったのだ。

敵意や悪意になら立ち向かえたかもしれない。助かったと喜んで、再び立ち上がったかもしれない。

しかし、爪熊のあの目はダメだった。ハジメを餌としてしか見ていない捕食者の目。弱肉強食の頂点に立つ人間がまず向けられることのない目だ。その目に、そして実際に自分の腕を喰われたことに、ハジメの心は砕けてしまった。

(誰か……立香……助けて……)

ここは奈落の底、ハジメの言葉は誰にも、立香にすら、届かない……

~~~~~

どれくらいそうしていただけるか。

ハジメは、現在、横倒しになりギョツと手足を縮めて、まるで胎児のように丸まっていた。

ハジメが崩れ落ちた日から既に四日が経っている。

その間、ハジメはほとんど動かず、滴り落ちる神水のみを口にして生きながらえていた。

しかし、神水は服用している間は余程のことがない限り服用者を生かし続けるものの空腹感まで消してくれるわけではなかった。死なないだけで、現在、ハジメは壮絶な飢餓が感と幻肢痛に苦しんでいた。

(どうして僕がこんな目に?)

ここ数日何度も頭を巡る疑問。

痛みと空腹で碌に眠れていない頭は神水を飲めば回復するものの、クリアになったがためにより鮮明に苦痛を感じさせる。

何度も何度も、意識を失うように眠りについては、飢餓感と痛みを目を覚まし、苦痛から逃れる為に再び神水を飲んで、また苦痛の沼に身を沈める。

もう何度、そんな微睡まどろみと覚醒を繰り返したのか。

いつしか、ハジメは神水を飲むのを止めていた。無意識の内に、苦痛を終わらせるもつとも手っ取り早い方法を選択してしまったのだ。

(こんな苦痛がずっと続くなら……いつそ……)

そう内心眩きながら意識を闇へと落とす。

それから更に三日が経った。

ピークを過ぎたのか一度は落ち着いた飢餓感だったが、嵐の前の静けさだったかのよう
に再び、更に激しくなつて襲い来る。幻肢痛は一向に治まらず、ハジメの精神を苛み
続ける。まるで、端の方から少しずつヤスリで削られているかのような耐え難き苦痛。

(まだ……死なないのか……ああ、早く、早く……死にたくない……)

死を望みながら無意識に生に縋る。矛盾した考えが交互に過る。ハジメは既に、正常
な思考が出来なくなつていた。支離滅裂なうわ言も呟くようになった。

それから更に三日が過ぎた。

既に神水の効力はなく、このままでは二日と保たずに死ぬかもしれない。食料どころ
か水分も摂っていないのだ。

しかし、少し前、八日目辺りからハジメの精神に異常が現れ始めていた。

ただひたすら、死と生を交互に願いながら、地獄のような苦痛が過ぎ去るのを待つて
いるだけだったハジメの心に、ふつつつと何か暗く澱んだものが湧き上がってきたの
だ。

それはヘドロのように、恐怖と苦痛でひび割れた心の隙間にこびりつき、少しずつ、少
しずつ、ハジメの奥深くを侵食していった。

(なぜ僕が苦しまなきゃならない……僕が何をした……)

(なぜこんな目にあってる……なにが原因だ……)

(神は理不尽に誘拐した……)

(クラスメイトは僕を裏切った……)

(ウサギは僕を見下した……)

(アイツは僕を喰った……)

次第にハジメの思考が黒く黒く染まっていく。白紙のキャンバスに黒インクが落ち
たように、ジワリジワリとハジメの中の美しかったものが汚れていく。

誰が悪いのか、誰が自分に理不尽を強いているのか、誰が自分を傷つけたのか……

無意識に敵を探し求める。激しい痛みと飢餓感、そして暗い密閉空間がハジメの精神を蝕むしばむ。暗い感情を加速させる。

(どうして誰も助けてくれない……)

(誰も助けてくれないならどうすればいい?)

(この苦痛を消すにはどうすればいい?)

九日目には、ハジメの思考は現状の打開を無意識に考え始めていた。

激しい苦痛からの解放を望む心が、湧き上がっていた怒りや憎しみといった感情すら不要なものと切り捨て始める。

憤怒と憎悪に心を染めている時ではない。どれだけ心を黒く染めても苦痛は少しもやわらがない。この理不尽に過ぎる状況を打開するには、生き残るためには、余計なものには削ぎ落とさなくてはならない。

(俺は何を望んでる?)

(俺は“生”を望んでる。)

(それを邪魔するのは誰だ?)

(邪魔するのは敵だ)

(敵とはなんだ?)

(俺の邪魔をするもの、理不尽を強いる全て)

(では俺は何をすべきだ?)

(俺は、俺は……)

十日目。

ハジメの心から憤怒も憎悪もなくなった。

神の強い理不尽も、クラスメイトの裏切りも、魔物の敵意も……

自分を守ると言った誰かの笑顔も……

全てはどうでもいいこと。

生きるために、生存の権利を獲得するために、そのようなことは全て些事だ。
ハジメの意思は、ただ一つに固められる。鍛錬を経た刀のように。鋭く強く、万物の
尽くを斬り裂くが如く。

すなわち……

（ 殺す ）

悪意も敵意も憎しみもない。

ただ生きる為に必要だから、滅殺するという純粹なまでの殺意。

自分の生存を脅かす者は全て敵。

そして敵は、

だが、そんなハジメでも一つだけ迷いがあった。

(それじゃあ………立香は?)

いつも自分を助けてくれた。今までの自分を親友だと言ってくれた、笑いかけてくれた。自分の手をとってくれた。

そんな立香を

(もし。もしもまだ立香が生きているのなら……いや、例えそうでなくても………立香だけは信じよう。生きているのなら俺の手をとってくれたアイツの手を、今度は俺がとってやろう)

ハジメは捨てることが出来なかった。

そうして、砕けた心は、再び一つとなった。ただし、ツギハギだらけの修繕された心ではない。奈落の底の闇と絶望、苦痛と本能で焼き直され鍛え直された新しい強靱な心

の群れを形成していた。

周囲を警戒しながら岩壁に隠れつつ移動し絶好の狩場を探す。二尾狼の基本的な狩りの仕方は待ち伏せであるからだ。

しばらく彷徨っていた二尾狼達だったが、納得のいく狩場が見つかったのか其々四隅の岩陰に潜んだ。後は獲物が来るのを待っただけだ。その内の一頭が岩と壁の間に体を滑り込ませジツと気配を殺す。これからやって来るだろう獲物に舌舐りしていると、ふと違和感を覚えた。

二尾狼の生存の要が連携であることから、彼らは独自の繋がりを持っている。明確に意思疎通できるようなものではないが、仲間がどこにいて何をしようとしているのかなんとなくわかるのだ。

その感覚がおかしい。自分達は四頭の群れのはずなのに三頭分の気配しか感じない。反対側の壁際で待機していたはずの一頭が忽然と消えてしまったのだ。

どういふことだと不審を抱き、伏せていた体を起こそうと力を入れた瞬間、今度は仲間間の悲鳴が聞こえた。

消えた仲間と同じ壁際に潜んでいた一頭から焦燥感が伝わってくる。何かに捕まり

脱出しようともがいているようだが中々抜け出せないようだ。

救援に駆けつけようと反対側の二頭が起き上がる。だが、その時には、もがいていた一頭の気配も消えた。

混乱するまま、急いで反対側の壁に行き、辺りを確認するがそこには何もなかった。残った二頭が困惑しながらも消えた二頭が潜んでいた場所に鼻を近づけフンフンと嗅ぎ出す。

その瞬間、地面がいきなりグニャアと凹み、同時に壁が二頭を覆うようにせり出した。

咄嗟に飛び退こうとするがその時には沈んだ足元が元に戻っており固定されてしまった。もつとも、これくらいなら、二尾狼であれば簡単に粉碎して脱出できる。今まで遭遇したことのない異常事態に混乱していなければ、そもそも捕まることもなかっただろう。

しかし、襲撃者にとってはその混乱も一瞬の硬直も想定したこと。二頭を捕らえるには十分な隙だった。

「グルウア!？」

悲鳴を上げながら壁に吞まれる二頭。そして後には何も残らなかった。

四頭の二尾狼を捕らえたのはもちろんハジメであった。反撃の決意をした日から飢餓感も幻肢痛もねじ伏せて、神水を飲みながら生きながらえ、魔力が尽きないのいいことに錬成の鍛錬をひたすら繰り返した。

より早く、より正確に、より広範囲を。今のまま外に出てもあつさり死ぬのがオチである。神結晶のある部屋を拠点に鍛錬を積み、少しでも武器を磨かなければならない。その武器は当然、錬成だ。

ねじ伏せたと言っても耐えられるというだけで苦痛は襲ってくる。しかし、飢餓感と幻肢痛は、むしろ追い立てるようにハジメに極限の集中力をもたらした。

その結果、今までの数倍の速さでより正確に、三メートル弱の範囲を錬成できるようになった。もつとも、土属性魔法のような直接的な攻撃力は相変わらず皆無だったが。

そして、神水を小さく加工した石の容器に詰め、錬成を利用しながら迷宮を進み、標

的を探した。

そうして見つけたのが四頭の二尾狼だ。

しばらく二尾狼の群れを尾行した。もちろん何度もバレそうになったが、その度に錬成で壁の中に逃げ込みどうにか追跡することができた。そして、四頭が獲物を待ち伏せるために離れた瞬間を狙って壁の中から錬成し、引きずり込んだのである。

「さて、生きてっかな？ まあ、俺の錬成に直接の殺傷力はほとんどないからな。石の棘を突き出したくらいじゃ威力も速度も足りなくてこの魔物は死にそうにないし」

ギラギラと輝く瞳で足元の小さな穴を覗のぞくハジメ。その奥には、まさに「壁の中」といった有様の二尾狼達が、完全に周囲を石で固められ僅かにも身動きできず、焦燥を滲ませながら低い唸り声を上げていた。

実は、以前、足元から生やした石の刺で魔物を攻撃したことがあったのだが、突き破る威力も速度も全く足りず、到底実用に耐える使い方ではなかった。やはり、そういうのは土属性魔法の領分のようなのだ。錬成はあくまで鉱物を加工する魔法であって、加工過

程に殺傷力を持たせるのは無理があるのだ。従って、こうして拘束するのが精一杯であつた。

「窒息でもしてくれりゃあいいが……俺が待てないなあ」

ニヤリと笑うハジメの目は完全に捕食者の目だつた。

ハジメは、右腕を壁に押し当てると錬成の魔法を行使する。岩を切り出し、集中して明確なイメージのもと、少しずつ加工していく。すると、螺旋らせん状の細い槍のようなものが出来上がった。更に、加工した部品を取り付ける。槍の手元にはハンドルのようなものが取り付けられた。

「さく、掘削くつさく、掘削！」

地面の下に捕らわれている二尾狼達に向かってハジメはその槍を突き立てた。硬い毛皮と皮膚の感触がして槍の先端を弾く。

「やつぱり刺さんないよな。だが、想定済みだ」

なぜナイフや剣にしなかったのか。それは、魔物は強くなればなるほど硬いというのが基本だからだ。もちろん種族特性で例外はいくらでもあるのだが、自分の無能を補うため座学に重点を置いて勉強していたハジメは、この階層の魔物なら普通のナイフや剣は通じないだろうと考えたのだ。

故に、ハジメは槍についているハンドルをぐるぐる回した。それに合わせて先端の螺旋が回転を始める。そう、これは魔物の硬い皮膚を突き破るために考えたドリルなのである。

上から体重を掛けつつ右手でハンドルを必死に回す。すると、少しずつ先端が二尾狼の皮膚にめり込み始めた。

「グルアアアアー!?!」

二尾狼が絶叫する。

「痛てえか？ 謝罪はしねえぞ？ 俺が生きる為だ。お前らも俺を喰うだろう？ お互い様さ」

そう言いながら、さらに体重を掛けドリルを回転させる。二尾狼が必死にもがこうとしているが、周りを隙間一つなく埋められているのだから不可能だ。

そして、遂に、ズブリとドリルが二尾狼の硬い皮膚を突き破った。そして体内を容赦なく破壊していく。断末魔の絶叫を上げる二尾狼。しばらく叫んでいたが、突然、ビクツビクツと痙攣したかと思うとパタリと動かなくなつた。

「よし、取り敢えず飯確保」

嬉しそうに嗤いながら、残り三頭にも止めを刺していく。そして、全ての二尾狼を殺し終えたハジメは錬成で二尾狼達の死骸を取り出し、片手に不自由しながら毛皮を剥がしていく。

そして、飢餓感に突き動かされるように喰らい始めた。

第十一歩「兵器誕生後に覚醒さ！（あくまでステータスのみ）」

暗闇の中、緑光石の明かりがぼんやりと辺りを照らす。

その明りが僅かな影を映し出した。その影は、一頭の獣を前にして蹲り何かを必死に咀嚼している。

「あが、ぐうう、まじいなクソツ！」

悪態を吐きながら二尾狼の肉を喰らっているのはハジメだ。

硬い筋ばかりの肉を、血を滴らせながら噛み千切り必死に飲み込んでいく。およそ二週間振りの食事だ。いきなり肉を放り込まれた胃が驚き、キリキリと痛みをもつて抗議する。だが、ハジメはそんなもの知ったことかと次から次へと飲み込んでいった。

その姿は完全に野生児といった様子だ。現代の人間から見れば酷くおぞましい姿に映っただろう。

酷い匂いと味に涙目になりながらも、ハジメは飢餓感が癒されていく感覚に陶然とする。飯を食べるということがこんなに幸せなことだったとは思ひもしなかった。夢中になって喰らい続ける。

どれくらいそうやって喰らっていたのか、神水を飲料代わりにするという聖教教会の関係者が知ったら卒倒するような贅沢をしながら腹が膨れ始めた頃、ハジメの体に異変が起こり始めた。

「あ？——ッ!? アガア!!!」

突如全身を激しい痛みが襲った。まるで体の内側から何かに侵食されているようなおぞましい感覚。その痛みは、時間が経てば経つほど激しくなる。

「ぐうあああつ。な、何がっ——ぐうううっ！」

耐え難い痛み。自分を侵食していく何か。ハジメは地面をのたうち回る。幻肢痛な
ど吹き飛ばすような遥かに激しい痛みだ。

ハジメは震える手で懐から石製の試験管型容器を取り出すと、端を噛み砕き中身を飲
み干す。直ちに神水が効果を発揮し痛みが引いていくが、しばらくすると再び激痛が襲
う。

「ひいぐがああ!! なんて……なおらなあ、あがああ！」

ドクンッ

ドクンッ

ミシツミシツメキメキツ

ハジメの体が痛みに合わせて脈動を始めた。体全体が脈打ち、至る所から耳を塞ぎたくなるような音が聞こえてくる。

しかし次の瞬間には、体内の神水が効果をあらわし体の異常を修復していく。修復が終わると再び激痛。そして修復。

神水の効果で気絶もできない。絶大な治癒能力がアダとなった形だ。

ハジメは絶叫を上げ地面をのたうち回り、頭を何度も壁に打ち付けながら終わりの見えない地獄を味わい続けた。いっそ殺してくれと誰ともなしに願ったが当然叶えられないわけもなくひたすら耐えるしかない。

すると、ハジメの体に変化が現れ始めた。

まず髪から色が抜け落ちてゆく。許容量を超えた痛みのせいか、それとも別の原因か、日本人特有の黒髪がどんどん白くなってゆく。

次いで、筋肉や骨格が徐々に太くなり、体の内側に薄らと赤黒い線が幾本か浮き出始

める。

超回復という現象がある。筋トレなどにより断裂した筋肉が修復されるとき僅かに肥大して治るといふ現象だ。骨なども同じく折れたりすると修復時に強度を増すらしい。今、ハジメの体に起こっている異常事態も同じである。

魔物の肉は人間にとって猛毒だ。魔石という特殊な体内器官を持ち、魔力を直接体に巡らせ驚異的な身体能力を発揮する魔物。体内を巡り変質した魔力は肉や骨にも浸透して頑丈にする。

この変質した魔力が詠唱も魔法陣も必要としない固有魔法を生み出しているとも考えられているが詳しくは分かっていない。

とにかく、この変質した魔力が人間にとって致命的なのだ。人間の体内を侵食し、内側から細胞を破壊していくのである。

過去、魔物の肉を喰った者は例外なく体をボロボロに碎けさせて死亡したとのことだ。実は、ハジメもこの知識はあつたのだが、飢餓感がすっかりその知識を脳の奥に押し込めてしまっていた。

ハジメもただ魔物の肉を喰っただけなら体が崩壊して死ぬだけだっただろう。

しかし、それを許さない秘薬があった。神水だ。

壊れた端からすぐに修復していく。その結果、肉体が凄まじい速度で強靱になっていく。

壊して、治して、壊して、治す。

脈打ちながら肉体が変化していく。

その様は、あたかも転生のよう。脆弱な人の身を捨て化生へと生まれ変わる生誕の儀式。ハジメの絶叫は産声だ。

やがて、脈動が収まりハジメはぐったりと倒れ込んだ。その頭髮は真っ白に染まっており、服の下には今は見えないが赤黒い線が数本ほど走っている。まるで蹴りウサギや二尾狼、そして爪熊のようである。

ハジメの右手がピクリと動いた。閉じられていた目がうつすらと開けられる。焦点の定まらない瞳がボーと自分の右手を見る。やがて地面を搔くようにギヤリギヤリと音を立てながら拳が握られた。

ハジメは、何度か握ったり開いたりしながら自分が生きていること、きちんと自分の意思で手が動くことを確かめるとゆつくり起き上がった。

「……そういや、魔物って喰っちゃダメだったか……アホか俺は……まあ、喰わずにはいられなかっただろうけど……」

疲れ果てた表情で、自嘲気味に笑うハジメ。

飢餓感がなくなり、壮絶な痛みに幻肢痛も吹き飛んだようで久しぶりになんの苦痛も感じない。それどころか妙に体が軽く、力が全身に漲っている気がする。

途方もない痛みに精神は疲れているもののベストコンディションといってもいいのではないだろうか。

腕や腹を見ると明らかに筋肉が発達している。実は身長も伸びている。以前のハジ

メの身長は百六十五センチだったのだが、現在は更に十センチ以上高くなっている。

「俺の体どうなったんだ？　なんか妙な感覚があるし……」

体の変化だけでなくハジメは体内にも違和感を覚えていた。温かいような冷たいような、どちらとも言える奇妙な感覚。意識を集中してみると腕に薄らと赤黒い線が浮かび上がった。

「うわあ、き、気持ち悪いな。なんか魔物にでもなった気分だ。……洒落になんねえな。そうだ、ステータスプレートは……」

すっかり存在を忘れていたステータスプレートを探してポケットを探る。どうやら失くしていなかったようだ。現在のハジメのステータスを確認する。体の異常について何か分かるかもしれない。

|||||

南雲ハジメ　17歳　男　レベル：8

天職：錬成師

筋力：100

体力：300

耐性：100

敏捷：200

魔力：300

魔耐：300

技能：錬成・魔力操作・胃酸強化・纏雷・言語理解

|||||

「……なんでやねん」

いつかのように驚愕のあまり思わず関西弁でツツコミを入れるハジメ。ステータスが軒並み急増しており、技能も三つ増えている。しかもレベルが未だ8にしかなっていない。レベルはその人の到達度を表していることから考えると、どうやらハジメの成長限界も上がったようだ。

「魔力操作？」

文字通りなら魔力が操作できるといふことだろうか。

ハジメは、「もしや先程から感じている奇妙な感覚は魔力なのでは？」と推測し、先程と同じく集中し「魔力操作」とやらを試みる。

ハジメが集中し始めると、赤黒い線が再び薄らと浮かび上がった。そして体全体に感じる感覚を右手に集束するイメージを思い描く。すると、ゆつくりとぎこちないながらも奇妙な感覚、もとい魔力が移動を始めた。

「おっ、おっ、おっ、おっ……？」

なんとも言えない感覚につい声を上げながら試していると、集まってきた魔力がなんとそのまま右手にはめている手袋に描かれた錬成の魔法陣に宿り始めた。驚きながら錬成を試してみるハジメ。するとあっさり地面が盛り上がった。

「マジかよ。詠唱いらずってことか？ 魔力の直接操作はできないのが原則。例外は魔

物。……やつぱり魔物の肉食ったせいでその特性を手に入れちゃったのか？」

大正解。ハジメは確かに魔物の特性を取得していたのだ。ハジメは、次に【纏雷】を試そうとする。

「えつと……どうやればいいんだ？ 【纏雷】ってことは電気だよな？ あれか？ 二尾狼の尻尾の……」

あれこれ試すがなんの変化もない。魔力のように感じるわけではないから取っ掛かりがなくどうすればいいのか分からないのだ。

「うーん」と唸りながら、そういえば錬成するときにはイメージが大事だということを思い出す。魔法陣に多くの式を書き込まなくてよい分、明確なイメージがそのまま加工物に伝わるのだ。

ハジメはバチバチと弾ける静電気をイメージする。すると右手の指先から紅い電気がバチツと弾けた。

「おお、できたよ。……なるほど、魔物の固有魔法はイメージが大事ってことか」

その後もバチバチと放電を繰り返す。しかし、二尾狼のように飛ばすことはできなかった。おそらく【纏雷】とあるように体の周囲に纏うか伝わらせる程度にしかできないのだろう。電流量や電圧量の調整は要練習だ。

最後の【胃酸強化】は文字通りだろう。魔物の肉を喰って、またあの激痛に襲われるのは勘弁だ。しかし、迷宮に食物があるとは思えない。飢餓感を取るか苦痛を取るか。その究極の選択を、もしかしたらこの技能が解決してくれるのではとハジメは期待する。

二尾狼から肉を剥ぎ取り【纏雷】で焼いていく。流石に飢餓感が癒された後で、わざわざ生食する必要もない。強烈な悪臭がするが耐えてこんがり焼く。

そして、意を決して喰らいついた。

十秒……

魔力を吸収する性質を持った鉱石。魔力を溜め込むと淡い緑色の光を放つ。また魔力を溜め込んだ状態で割ると、溜めていた分の光を一瞬で放出する。

なんと簡易な説明だ。だが、十分にありがたい情報である。

ハジメはニヤリと悪巧みを考えついたように笑った。それからもあちこち役立ちそうな鉱物を探して彷徨さまよっている、遂に、ハジメの相棒にして切り札となる武器を作るために必要な鉱物を発見した。

燃焼石

可燃性の鉱石。点火すると構成成分を燃料に燃焼する。燃焼を続けると次第に小さくなり、やがて燃え尽きる。密閉した場所で大量の燃焼石を一度に燃やすと爆発する可能性があり、その威力は量と圧縮率次第で上位の火属性魔法に匹敵する。

ハジメはこの説明を見た瞬間、脳内に電流が走ったような気がした。

燃焼石は地球で言うところの火薬の役割を果たせるのではないか？ だとしたら、攻撃には使えない錬成で最大限の攻撃力を生み出せるかもしれない！ と。

ハジメは興奮した。作製するには多大な労力と試行錯誤が必要だろうが、それでも今まで自分を幾度となく救ってくれた錬成で、遂に攻撃手段を得ることができるとも思えないということが堪たまらなく嬉しかったのだ。

そして、寝食を忘れてひたすら錬成の熟達に時間を費やした上、何千回という失敗の果てに、ハジメは遂にとある物の作製に成功した。

音速を超える速度で最短距離を突き進み、絶大な威力で目標を撃破する現代兵器。

全長は約三十五センチ、この辺りでは最高の硬度を持つタウル鉱石を使った六連の回転式弾倉。長方形型のバレル。弾丸もタウル鉱石製で、中には粉末状の燃焼石を圧縮して入れてある。

すなわち、大型のリボルバー式拳銃だ。

しかも、弾丸は燃烧石の爆発力だけでなく、ハジメの固有魔法【纏雷】により電磁加速されるといふ小型のレールガン化している。その威力は最大で対物ライフルの十倍である。ドンナーと名付けた。なんとなく相棒には名が必要と思ったからだ。

「……これなら、あの化け物も……脱出だって……立香を助けることだって……やれる！」

ハジメはドンナーの他にも現代兵器を参考に作った兵器を眼前に並べて獰猛な笑いを浮かべた。

ただ、剣や防具を上手く作るだけ、そんなありふれた天職【錬成師】の技能【錬成】が、剣と魔法の世界に兵器を産み落とした瞬間だった。

~~~~~



一方、場所が変わって理想郷では

「ぜえぜえ……………」

「落ち着いたかい？ マイ・ロード」

「この…………誰のせいだ、誰の」

立香<sup>第十歩</sup>の叫びから更に数分たっていたが未だに立香はトータスには戻れていなかった。

そう…………未だに戻れていなかった!!!

その事に、若干の苛つきと焦りを覚えながらも改めてマーリンに問いかける。

「それで？ 何時まで此処<sup>アヴァロン</sup>に留めておくつもりなの、マーリン」

「そこまで心配する必要は無いさ、時が来ればちゃんと返すから」

「…………その時」俺は知りたいんだけど…………まあ、聞いても答えないだろうからこの際それは一回置いとこう。今の俺じゃ自力で帰れない訳だし。取り敢えず、マーリン……………」

「ん？ なんだい？」

「どうせもう少し時間があるならこのふざけたステータスについて説明してくれる？」

そう言つて立香が取り出したステータスプレートに記されていたのは……

|||||

藤丸立香 17歳 男 レベル：3

天職：旅人（封印中）

筋力：23

体力：23

耐性：23

敏捷：27

魔力：28

魔耐：25

技能：魔術（ガンド）・言語理解

p.s. ステータスが封印されて色々と不便だろうけど君なら大丈夫だと信じている

よ！ 頑張ってくれ！

b y 花の魔術師

という、ハジメが見た時とは違うけれど立香の言うとおりのふざけた内容のステータスだった。

「最初に見た時、本当に焦ったんだからね。咄嗟にペンダントの中にある物で誤魔化したからバレることはなかったけど、ハジメ、違和感を抱いたような顔してたんだよ。マーリン、このステータスについて説明して」

そう言うのとマーリンは聞かれることがわかっていたのか先程と変わらない微笑みを浮かべながら立香のステータスについて説明を始めた。

「ああ勿論だとも。それも含めてここに連れてきた訳だからね。……マイ・ロード。君のステータスを封印したのは君の本来の力を隠すためなんだ」

「本来の力を隠すため？」

「そう、マイ・ロードの本来のステータスは色々と規格外だったからね。それを周囲に知られる訳にはいかなかったのさ、だからマイ・ロードのステータスを封印させてもらったんだ。まあまずは口で説明するより自分で見たほうが早いかな？ という訳で……  
そ〜れっ！」

マーリンが杖を振るうとステータスプレートが淡いピンク色に光る。暫くしてその光が消えると……

|||||

藤丸立香 17歳 男 レベル■■■■

天職：旅人／■■■■◆

筋力：測定不能

体力：測定不能

耐性：測定不能

敏捷：測定不能

魔力：■■■■■

魔耐：測定不能

技能：魔術（回復）応急手当・全体回復・浄化回復・強化瞬間強化・全体強化・幻想強化・緊急回避・ガンド・オーダーチェンジ・霊子譲渡・オシリスの塵・イシスの雨・メジエドの眼・予測回避）・対魔力（EX）・対毒（EX）・縁えにしの加護・結縁霊装・言語理解

|||||

「……なんでやねん」

封印が解かれた本来のステータスを見た立香の反応は、偶然にも親友と全く同じであつた。

そんな立香の反応を面白がりながら、マーリンは話を再開する。

「これがマイ・ロードの本来のステータスだよ？」

「いやいやいや！ 色々お可笑しいでしょ。ステータス表示が測定不能ってどういう事だよ。しかも天職が二つあるし、片方黒くなつててわからないし。しかもレベルと魔力も黒くなつてるし、他の技能は何か見覚えあるし！」

「おや、お気に召さなかつたかな？」

「お気に召すとかそういう問題じゃないでしょ、コレは……」

「それじゃあ、改めて「無視かよ」マイ・ロードのステータスの説明をしようか……」

以下、長くなるので割次回以降に持ち越し  
愛

………という訳だが、なにか質問はあるかな？」

こうして、立香のステータスについての説明が終わり立香は「少し複雑だなあ」と思  
いながらマーリンとの会話を続ける。

「は、あ、言いたい事は多いけど取り敢えずいいや。ステータスについては納得した、  
というか納得せざる負えない内容だったし………というかコレ、戻ったらまた何らかの  
形で誤魔化さないと」

「そうか、それなら良かった……あ、そうそう」

「まだ何かあるの？ マーリン」

「彼女達の事、気にならないかい？」

「ん？ あく、みんなは元気にしてる？」

マーリンが立香に聞くと、立香は特に驚いた様子もなく、まるで今も何処かに存在しているか確信しているかの様にすんなりと答えた。

立香の世界において本来、サーヴァントというのは『要石』としての役割を持つマスターからパスを通じて魔力を供給されなければ現世に留まることが出来なくなる。例外的に「単独行動」等のスキルを持つサーヴァントならば数日の間は現界できるがそれでも永久に現界し続ける事はほぼ不可能と言っていいだろう。例え魔力があつたとしても現界を保つために使用する魔力量も増え、いずれは消滅してしまう。

それ故、カルデアのサーヴァント達もマスターである立香が死に、その後新しいマスターを用意しなければ——その新しいマスターを受け入れるかは別問題だが——消滅すると思われるのが普通なのだが……

当然マーリンはそのことを指摘したが……

「ん、確かに令呪は無いらしいし、パスも繋がってない、みんなを召喚しようとしても駄目

だったから実際に確認出来たわけではないんだけど……」

そこで言葉を区切った立香は笑顔を浮かべながらも一度口を開く。

「なんとなく……そう、なんとなくだけど俺の家サーヴァント族は、俺が死んだ位ですんなり消滅する筈がない、今も何処かに居るってそう思えるんだよね。」

それを聞いたマーリンは今までの軽薄な笑みとは違う優しい微笑みを浮かべる。その表情の中には何処か安堵のようなものがあつたが、それを立香が見ることはなかった。

「オッホン！ さて、マイ・ロード」

表情を元に戻し、一回咳払いをすると場の空気をリセットし、立香に話しかける。

「なに、まだ何かあるの？」



「いや、もう私から話す事はないさ、やる事もやったからね。そして、もうそろそろ向こうトータスに戻れる頃だよ」

「ホントに？」

「ああホントだとも、だから、何時でも戻れるように準備したまえ」

「やっとかくわかった、そうさせてもらうよ」

そう言つて立香は何時でも戻れるようにテキパキと片付けや道具の確認などを始めた。

~~~~~

「そうだ、最後にいいかい？」

「今度はなn:!!」

「戻つたらハジメを探さない」と思いながら準備していた所を中断し、マーリンの声に振り向くとそこには……………今までで一番ニヤニヤとしたマーリンの顔があつた、それを見た立香に色んな意味での不安と警戒が襲つた。

しかし、マーリンのニヤニヤ顔は止まらず、そのまま言葉を紡ぐ。

「ハハハ、そう警戒しないでくれたまえ、君の（嫁）サーヴァント達からの伝言を伝えるだけだからね」

「皆から？」

『私達がマスターとご一緒出来ないのは悲しいですが、信じて待っていますから！』

「みんなあ」（*、ω、*）

その伝言を聞いて少し警戒を緩めた次の瞬間、マーリンかニヤニヤしていた理由が判明した。

『あつそれと、そつちで引つ掛けてきた現地妻をしつかりとこつちに連れてきてくださ
いね』（●⊗●）（ハイライトオフ）

「み、みんなあ」（——；）

「マーリンがニヤニヤしていたのは確実に修羅場が待っているからか！」そう思いながら立香は、この件が終わった後に彼女達を納めるのに全力を出すことが確定した事を自覚した。

「それじゃあ、元の世界に戻すからね」

「いや、ちよま……」「そっれっ！」……うわっ!!……

立香が今後の先行きに僅かな不安を抱いている隙にマーリンが杖を振るうと立香の足元に大きな穴が生まれ、抵抗も虚しくある意味でお約束通りにその穴へと落ちていった。

故に、立香は叫ぶ

このおろクデナシグランドキヤスターがああああ!!!

~~~~~

ヒユオオオオオ………スタツ！

「取り敢えずマーリンは後で過労死させるとして………つと。て、あれ？ 此処は………ん？」

先程は叫んでいたが、そこは立香クオリテイ。直ぐに切り替えて着地しマーリンへの仕返しを考えながら自分のいる場所を確認する。

しかし、そこは立香がアヴァロンに行く前に居た場所では無く、聖教教会の大神殿で見た大理石のように艶やかな石造りで出来ており、幾本もの太い柱が規則正しく奥へ向かって二列に並んでいた。

すぐに敵がどこから来ても対応出来る様に警戒しながらよく周囲を確かめているとその空間の一箇所に淡い光を放つ立方体があり、何とそこには一人の金髪の少女が埋まっていた。

「……………だれ？」

どうやら、先程言われたばかりなのにまた新しい出一会録いがあるようです。

第十二歩 「宿敵討伐されど（ヒロインの）フラグが折れる事は無し」

「むぐ、むぐ……ウサギ肉つてもマズイことに変わりねえな……はあ……立香の飯が食いてえ」

現在、ハジメは拠点にてモリモリとウサギ肉を喰っていた。そう、蹴りウサギの肉である。かつて自分を見下し嘲笑った蹴り技の達人は、今やただの食料だった。ウサギということでは多少はマシな味なのではと期待したハジメだったが、所詮は魔物の肉。普通に不味く、どうしようもなく立香のご飯が恋しくなる。

それでも丸一匹、ペロリと平らげる。

【胃酸強化】を手に入れてから食べようと思えばいくらでも食べられる気がするハジメ。特に固有魔法を使ったときは物凄く腹が減り、この蹴りウサギを殺った時も使ったので収支はトントンと言ったところだった。

神水があれば死にはしないが、使いすぎると再び飢餓感に襲われそうなので考えて使わなければならない。

ちなみに、蹴りウサギは畏を張って倒した。スタート地点の川から水を汲んできて蹴りウサギを誘導、爆進して来た蹴りウサギが撒き散らした水の上を通った瞬間、【纏雷】の最大出力で感電させる。

全身から煙を噴き上げながらも、案の定、突進してきたので、電撃で鈍ったところを正面からドンナーで撃ち抜いた。

流石に、電磁加速された秒速三・二キロメートルの弾丸は避けられなかったらしく頭が木端微塵に砕け散って絶命した。わざわざ感電させる必要もなかったかもしれない。それくらい、ドンナーの威力は凄まじかった。

「さて、初めて蹴りウサギの肉を喰ったわけだが……ステータスは……」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

南雲ハジメ 17歳 男 レベル：12

天職：錬成師

筋力：200

体力：300

耐性：200

敏捷：400

魔力：350

魔耐：350

技能：錬成「＋鉱物系鑑定」「＋精密錬成」「＋鉱物系探査」・魔力操作・胃酸強化・纏

雷・天歩「＋空力」「＋縮地」・言語理解

|||||

やはり魔物肉を喰うとステータスが上がるようだ。二尾狼ではもう殆ど上がらなかつたことを考えると喰ったことのない魔物を喰うと大きく上昇するらしい。

早速、「天歩」とやらを調べる。まず一番最初にイメージしたのは、蹴りウサギのあの踏み込みだ。焦点速度が間に合わなくて体がブレて見えるほどの速度。「天歩」の横に「＋縮地」とあるのはその技能ではないかと当たりを付ける。縮地といえば、全員が初めてステータスプレートを受け取った時に立香がやった地球でも有名な高速移動のことだ。

ハジメは足元が爆発するイメージで一気に踏み込んでみる。体内の魔力が一瞬で足



元に来まる。踏み込んだ足元がゴバツと陥没し……ハジメは吹き飛んで顔面から壁にダイブした。

「痛ッー!?! か、加減が難しいな、これ……」

だが、成功は成功である。これから鍛錬を続ければ蹴りウサギのような動きもできるようになるだろう。銃技と組み合わせれば、より強力な武器になる。

次は「+空力」だ。だが、これが中々発動しない。名称だけではどんな技能なのかわかりづらい。あれこれ試す内に、ハジメは蹴りウサギが空中を足場に使っていたことを思い出す。

早速、ハジメは、踏み出した空中に透明のシールドがあることをイメージする。そして、前方に跳躍してみた。

顔面から地面にダイブした。

「ぐうおおお!?!」

右手で顔面を押しえゴロゴロと地面をのたうち回る。しばらく身悶え、痛みが引くと  
儼然とした表情で神水を飲む。

「……………まあ、一応できたな……………」

前方に跳躍して顔面からダイブした原因は中途半端に足場ができたせいだった。要  
は躓いて転けたのである。どうやら「十空力」は空中に足場を作る固有魔法で間違いな  
いようだ。

なんだか一度に二つの固有魔法を手に入れた気分だが「天歩」という固有魔法の派生  
技能らしい。

得した気分でハジメは鍛錬を開始する。

目標は——爪熊。

おそらく、遠距離からの銃撃で片はつくだろうが、念の為に鍛えておく。あの化け物  
より強い魔物がふらりと現れる可能性も否定できないのだ。迷宮では楽観視した者か

ら死んでいく。爪熊を倒したら、この階層からの脱出口も探さなければならない。

ハジメは気合を入れ直した。

~~~~~

迷宮の通路を、姿を霞かすませながら高速で移動する影があつた。

ハジメである。「天歩」を完全にマスターしたハジメは、「縮地」で地面や壁、時には
【空力】で足場を作つて高速移動を繰り返し宿敵たる爪熊を探していた。

本来なら立香を探すことを優先すべきなのだろうが、ハジメはどうしても爪熊を殺り
たかつた。一度は砕かれた心、それをなした化け物を目の前にして自分がきちんと戦え
るのか試さずにはいられなかつたのだ。

「グルウア！」

途中、二尾狼の群れと遭遇そうぐうし一頭が飛びかかってくる。ハジメは冷静に、その場で跳躍し宙返りをしながら錬成した針金で右足の太ももに固定したドンナーを抜き発砲する。

ドパンツ！

燃烧粉の乾いた破裂音が響き、【纏雷】で電磁加速された弾丸が狙い変わらず最初の一頭の頭部を粉碎した。

そのまま空中で【空力】を使い更に跳躍し、飛びかかってくる二尾狼に向かって連続して発砲する。全て命中とまではいかなかったが、どうにか全弾撃ち尽くす前に仕留め切った。

ハジメは肘から先のない左腕の脇にドンナーを挟み、素早く装填する。そして二尾狼の死骸には一瞥もくれずに再び駆け出した。

しばらくそうやって出会う蹴りウサギや二尾狼を瞬殺していると、ようやく宿敵の姿を発見した。

爪熊は現在食事中のようだ。蹴りウサギと思しき魔物を咀嚼している。その姿を確認するとハジメはニヤリと不敵に笑い、悠然ゆげんと歩き出した。

爪熊はこの階層における最強種だ。主と言ってもいい。二尾狼と蹴りウサギは数多く生息するも爪熊だけはこの一頭しかいない。故に、爪熊はこの階層では最強であり無敵。

それを理解している他の魔物は爪熊と遭遇しないよう細心の注意を払うし、遭遇したら一目散に逃走を選ぶ。抵抗すらない。まして、自ら向かって行くなどあり得ないことだ。

しかし、現在、そのあり得ないことが目の前で起こっていた。

「よお、爪熊。久しぶりだな。俺の腕は美味かったか？」

爪熊はその鋭い眼光を細める。目の前の生き物はなんだ？ なぜ、己を前にして背を見せない？ なぜ恐怖に身を竦ませ、その瞳に絶望を映さないのだ？

かつて遭遇したことの無い事態に、流石の爪熊も若干困惑する。

「リベンジマッチだ。まずは、俺が獲物ではなく敵だと理解させてやるよ」

そう言つて、ハジメはドンナーを抜き銃口を真っ直ぐに爪熊へ向けた。

ハジメは構えながら己の心に問かける。「怖いか？」と。答えは否だ。絶望に目の前が暗くなることも、恐怖に腰を抜かしガタガタ震えることもない。あるのはただ、純粹な生存への渴望と敵への殺意。

ハジメの口元が自然と吊り上がり獰猛どうもうな笑みを作る。

「殺して喰つてやる」

その宣言と同時にハジメはドンナーを発砲する。ドパンツ！と炸裂音を響かせながら毎秒三・二キロメートルの超速でタウル鉱石の弾丸が爪熊に迫る。

「グウウ!!」

爪熊は咄嗟とつきに崩れ落ちるように地面に身を投げ出し回避した

弾丸を視認して避けたのではなく、発砲よりほんの僅かに回避行動の方が早かったことから、おそらくハジメの殺気に反応した結果だろう。流石は階層最強の主である。二メートル以上ある巨軀に似合わない反応速度だ。

だが、完全に避け切れたわけではなく肩の一部が挟まれて白い毛皮を鮮血で汚している。

爪熊の瞳に怒りが宿る。どうやらハジメを《敵》として認識したらしい。

「ガアアア!!」

咆哮を上げながら物凄い速度で突進する。二メートルの巨軀と広げた太く長い豪腕が地響きを立てながら迫る姿は途轍もない迫力だ。

「ハハ！ そうだ！ 俺は敵だ！ ただ狩られるだけの獲物じゃねえぞ！」

爪熊から凄まじいプレッシャーを掛けられながら、なお、ハジメは不敵な笑みを崩さない。

ここがターニングポイントだ。

ハジメの左腕を喰らい、心を砕き、変心の原因となった魔物を打ち破る。これから前へ進むために必要な儀式。それができなければ、きつと己の心は「妥協」することを認めてしまう。

そして「妥協」を認めてしまえばもう二度と立香の隣に立つことはできなくなる。

ハジメはそう確信していた。

突進してくる爪熊に、再度、ドンナーを発砲する。超速の弾丸が爪熊の眉間めがけて飛び込むが、なんと爪熊は突進しながら側宙をして回避した。どこまでも巨軀に似合わない反応をする奴である。

自分の間合いに入った爪熊は突進力そのままに爪腕を振るう。固有魔法が発動して

いるのか三本の爪が僅かに歪んで見える。

ハジメの脳裏に、かつてその爪をかわしたにもかかわらず両断された蹴りウサギの姿が過った。ハジメはギリギリで避けるのではなく全力でバックステップする。

刹那、一瞬前までハジメがいた場所を豪風と共に爪が通り過ぎ、触れてもいないのに地面に三本の爪痕が深々と刻まれた。

爪熊が獲物を逃がしたことに苛立つように咆哮を上げる。

と、その時、爪熊の足元にカラんと何か転がる音がした。釣られて爪熊が足元に視線を向けると直径五センチ位の深緑色をしたボール状の物体が転がっている。爪熊がそのことを認識した瞬間、その物体がカツと強烈な光を放った。

ハジメが作った【閃光手榴弾】である。

原理は単純だ。緑光石に魔力を限界ギリギリまで流し込み、光が漏れないように表面を薄くコーティングする。更に中心部に燃焼石を砕いた燃焼粉を圧縮して仕込み、その

中心部から導火線のように燃燒粉を表面まで繋げる。

後は【纏雷】で表に出ている燃燒粉に着火すれば圧縮してない部分がゆっくり燃え上がり、中心部に到達すると爆発。臨界まで光を溜め込んだ緑光石が砕けて強烈な光を発するといわけだ。ちなみに、発火から爆発までは三秒に調整してある。苦勞した分、自慢の逸品だ。

当然、そんな兵器など知らない爪熊はモロにその閃光を見てしまい一時的に視力を失った。両腕をめちゃくちゃに振り回しながら、咆哮を上げもがく。何も見えないという異常事態にパニックになっているようだ。

その隙を逃すハジメではない。再びドンナーを構えてすかさず発砲する。電磁加速された絶大な威力の弾丸が暴れまわる爪熊の左肩に命中し、根元から吹き飛ばした。

「グルウアアアアア!!」

その生涯でただの一度も感じたことのない激烈な痛みに凄まじい悲鳴を上げる爪熊。その肩からはおびただしい量の血が噴水のように噴き出している。吹き飛ばされた左腕がくるくると空中を躍り、やがて力尽きたようにドサッと地面に落ちた。

「こりやあ偶然にしてはでき過ぎだな」

ハジメとしては左腕を狙ったつもりはなかった。まだそこまで銃の扱いをマスターしているわけではない。直進してくる敵や何度もやりあった二尾狼等、その動きを熟知していない限り暴れて動き回る対象をピンポイントで撃ち抜くことは未だ難しい。

故に、かつて奪われ喰われたハジメと同じ左腕を奪うことになったのは全くの偶然だった。

ハジメは、痛みと未だ回復しきっていない視界に暴れまわる爪熊へ再度発砲する。

爪熊は混乱しながらも野生の勘で殺気に反応し横っ飛びに回避した。

ハジメは、【縮地】で爪熊を通り過ぎその後ろに落ちている左腕のもとへ行く。そして、少し回復したのか、こちらを強烈な怒りを宿した眼で睨む爪熊に見せつけるかのようには左腕を持ち上げ掲げた。

そして、おもむろに噛み付いた。魔物を喰らうようになってから、やたらと強くなった顎の力で肉を引き千切り咀嚼そしやくする。かつて爪熊がそうしたように目の前で己の腕が喰われるという悪夢を再現する。

「あぐ、むぐ、相変わらずマズイ肉だ。……なのにどうして他の肉より美味く感じるんだろうな？」

そんなことを言いながら、こちらを警戒しつつ蹲る爪熊を睥睨するハジメ。

爪熊は動かない。その瞳には恐怖の色はないが、それでも己の肉体の一部が喰われているという状況と回復しきっていない視力に不用意には動けないようだ。

それをいいことに、ハジメは食事続ける。すると、やがて異変が訪れた。初めて魔物の肉を喰らった時のように、激しい痛みと脈動が始まったのだ。

「ッ!?!」

急いで神水を服用するハジメ。あの時ほど激烈な痛みではないが、立っていられず片膝を突き激しい痛みで顔を歪める。どうやら、爪熊が二尾狼や蹴りウサギとは別格であるために取り込む力が大きく痛みが発生したらしい。

だが、そんな事情は爪熊には関係ない。チャンスと見たのか唸り声を上げながら突進する。

蹲るハジメは動かない。あわや、このまま爪熊に蹂躪され、かつての再現となるのかと思われたその時、ハジメの口元がニヤーと裂けた。

同時に、右手をスツと地面に押し付けた。そして、その手に雷を纏う。最大出力で放たれた「纏雷」は地面の液体を伝い、その場所に踏み込んだ爪熊を容赦なく襲った。

地面の液体とは、爪熊の血液のことだ。噴水の如く撒き散らされた血の海。ハジメは拾った爪熊の左腕から溢れでる血を、乱暴に掲げることですら撒き散らし、自分の場所と血溜りを繋いだのである。

伊達や酔狂で戦闘中に食事などしない。爪熊を喰らったことで痛みを襲われるとは思っていないが、最初から罠に嵌めるつもりだったのだ。わざわざ目の前で喰った

のも怒りを煽り真つ直ぐ突進させるためである。多少予定は狂ったが結果オーライだ。自らの流した血溜りに爪熊が踏み込んだ瞬間、強烈な電流と電圧が瞬時にその肉体を蹂躪する。神経という神経を侵し、肉を焼く。最大威力と言っても、ハジメが取得した固有魔法は本家には及ばない。

二尾狼のように電撃を飛ばせるわけではないし、出力も半分程度だろう。しかし、それでも一時的に行動不能にさせることは十分に可能だ。ちなみに、人間なら血液が沸騰してもおかしくない威力ではある。

「ルグウウウウ」

低い唸り声を上げながら爪熊が自らの血溜りに地響きを立てながら倒れた。その眼光は未だ鋭く殺意に満ちていてハジメを睨んでいる。

ハジメは真つ直ぐその瞳を睨み返し、痛み能耐ながらゆっくり立ち上がった。そして、ホルスターに仕舞っていたドンナーを抜きながら歩み寄り、爪熊の頭部に銃口を押し当てた。

「俺の糧になれ」

その言葉と共に引き金を引く。撃ち出された弾丸は主の意志を忠実に実行し、爪熊の頭部を粉碎した。

迷宮内に銃声が木霊する。

爪熊は最期までハジメから眼を逸らさなかつた。ハジメもまた眼を逸らさなかつた。

想像していたような爽快感はない。だが、虚しさもまたなかつた。ただ、やるべきことをやった。生きるために、この領域で生存の権利を獲得するために。

ハジメはスツと目を閉じると、改めて己の心と向き合う。そして、この先もこうやって生きることを決意する。戦いは好きじゃない。苦痛は避けたい。腹いっぱい飯を食いたい。立香と笑い合いたい。

そして……生きたい。

理不尽を粉碎し、敵対する者には容赦なく、全ては生き残るために。

そうやって生きて……

そして……

故郷に帰りたい。

立香と一緒に。

そう、心の深奥が訴える。

「そうだ……帰りたいんだ……俺は。立香と……一緒に帰りたい。他はどうでもいい。俺は……俺達は俺達のやり方で帰る。望みを叶える。邪魔するものは誰であろうと、どんな存在だろうと……」

目を開いたハジメは口元を釣り上げながら不敵に笑う。


~~~~~

「……………だれ？」

「(戻ってこれたと思つたら明らかに封印されている少女……………マジですか)」

立香がマーリンと別れた後に落とされたに最初に邂逅したのは親友であるハジメ……………ではなく、某ホラー映画の女幽霊……………でもなく、上半身から下と両手を立方体の中に埋めたまま顔だけが出ている状態にだいぶやつれて、垂れ下がった髪が少しばかりの不気味さを出している少女だった。

その容姿は年の頃は十二、三歳くらいだろう、長い金髪にその髪の隙間から低高度の月を思わせる紅眼の瞳が覗いている。

今はその金髪や肌が汚れてしまっているが、もしそれらを綺麗にして身なりを整えれば、幼い容姿ながらも街中で男女関係なく注目を集めることが想像出来る程の美少女だ。

そんな少女だが、しかし——立香は知らない事だが——其処は真のオルクス大迷宮5

0階層。そんな場所に封印されている様な状態、誰であろうと怪しみ疑うのが普通なのだが……………

「まあでも、まずは…………俺が誰か、だったね。俺は立香、藤丸立香。よろしく、君は？」

やはり、この男は普通主人公などでは無かった。怪しさ満点なこの状況下で平然と自己紹介を始めた。

更に、この場ハジメにツツコミ役やが居ない為、そのままの流れで進んでしまうのだった。

「私は……………わた……………は……………」

金髪の少女は立香に自分のことを問われ語ろうとしたが辛そうな顔となり、言葉が小さく途切れていき、最後には黙ってしまった。そんな表情を見た立香はこの空間や少女の状態から全てでは無いにせよ少女の過去が辛いものである事を察したのだろう、この空間に来て初めての行動を起こし、少女——と言うよりは少女が埋まっている立方体に

近づいていった。

「ま、何はともあれ、まずは君をそこから出さないとね」

「助けて、くれるの？」

「そんな顔をした君を見捨てるなんて出来ないからね、それに事情を聞くにせよそんな状態じゃ聞くに聞けないでしょ」

そう言いながら立方体に掌を当て解析する為に魔力を流し……しかし、魔力がうまく通らず弾かれてしまった。その結果に少しばかり目を見開いたが、すぐに切り替え、今の結果から立方体が持つ効果の仮説を立てる。

「恐らく魔力の浸透率が悪くして更に抵抗力を付けることによつて魔法や技能による拘束の解除をほぼ不可能にしたって所か……少し面倒だな」

「……大丈夫？」

「ん？ ああ問題無い、大丈夫だよ」

立香が語っているのを聞いて不安になったのだろう。その感情そのままに立香に問

うが立香は依然として表情を曇らせることなく優しい声音で少女を安心させるように話す。

「とは言え、あんまり時間を掛けたくないし……よし！　ねえ君」

「？」

「少しだけ揺れると思うけど我慢できる？」

「??　んっ、大丈夫」

「そっか、まあ君が傷つくことは無いようにはするから」

少女をどう助けるのかが決まったのだろう、未だ理解し切れていない少女にそう言った立香は立方体から一歩分離れると、左足を前に出し右足を後ろに引き、右手を振り絞る。そうそれは……

「セイツ!!」

ドゴオオオオオオオオオオン!!!

正拳突きだった。

「ふう、やってみればできるもんだな」

「……………」( )。D。( )ポカーン

今まで自分がどれだけやっても抜け出すことが叶わなかった立方体がただの( ? )正拳突きによって砕け散ってしまった事実<sup>に</sup>立方体から抜け出すことが出来た喜びよりも驚愕が上回ってしまい、少女はしばらく呆然としていた。

しばらくお待ちください  
閑話休題

少女が驚愕から立ち直り、先程のことを聞こうと立香の方を向いた瞬間ふわっと黒い布のようなものが体に掛けられる

「あれは……」

『万能布ハッサン』って言ってね、色んなことに使える便利な布でね、流石にずっと裸っ

ていうのは女の子的に、ね？」

「……………んっ、ありがとう……………暖かい」

立香の言葉を聞いて顔を赤くし、立香にジト目を向けるがハツサン布の暖かさが心を少し癒やしたおかげだろう、立香に告げる言葉は感謝のみだった。

「それは良かった。それで……………聞いてもいいかな、君のこと」  
「ん、わかった」

そうして立香は少女の過去を聞いた。

曰く、少女はとある国の王族であること

先祖返りの吸血鬼であること。

不死身であり、怪我などもすぐ治り、首を落とされてもその内に治るものであること。

魔力を直接操ることが可能であり、陣も不要であること。

その力で国の皆のためにと様々な事をしたこと。

しかし、ある日叔父がこれからは自身が王であると告げられ、家臣達からも少女はもう必要ないと言われたこと。

少女はそれを受け入れたが、少女の力を危険視しけれど殺すことが出来ないからこの場所に封印されたこと。

少女の話を聞いて立香は「なるほどね」と一人納得した。

立香の場合は自身の魔術回路を用いることによって技能の【魔術】を発動している為、陣や詠唱を不要としているが一般的には適正があつても直径十センチほどの魔法陣や長い詠唱を必要とする。

それに対しこの少女のように魔法適性があれば、周りがチンタラと詠唱やら魔法陣やら準備している間にバカスカ魔法を撃てるとするならば、正直、勝負にならない。しかも、不死身。おそらく絶対的なものではないだろうが、それでも勇者すら凌駕しそうなチートである。

確かに自身が王になろうと企てる奴らにとつては最大級の障害となるだろう。

立香が一人で思索に耽り一人で納得していると、自身の手に柔らかな感触が伝わる。視線を向ければそれは少女の両手であり立香の手を包むように握っていた。

立香が「どうしたの？」と問うと無表情ながら、その奥にある紅眼に彼女の気持ち溢れんばかり宿し。



そして、先ほどとは違う、震えていて小さく、しかしはっきりとした声で少女は告げる。

「……ありがとう」

その言葉を聞いた立香は優しい微笑みを浮かべながら握られていない手で少女の頭を優しく撫でる。

撫でられたことに一瞬体を震わせるが繋がった手はギュツと握られたままだ。いったいどれだけの間、ここにいたのだろうか。少なくとも立香の知識にある吸血鬼族は数百年前に滅んだはずだ。この世界の歴史を学んでいる時にそう記載されていたと記憶している。

話している間も彼女の表情は動かなかった。それはつまり、声の出し方、表情の出し方を忘れるほど長い間、たった一人、この暗闇で孤独な時間を過ごしたということだ。

しかも、話しぶりからして信頼していた相手に裏切られて。よく発狂しなかったものである。もしかすると先ほど言っていた自動再生的な力のせいかもしれない。だとすれば、それは逆に拷問だっただろう。狂うことすら許されなかったということなのだか

ら。

そんな事を考えていた立香は自然と手に力を入れて握り返す。少女はそれにピクンと反応すると、再びギュギュと握り返してきた。

そんな少女の愛らしい行動を見ていた立香は「……あ、そういえば」と言いながら思いついたように少女に問う。

「今更だけどき、君の名前は？」

少女は、問われた名前を答えようとして、しかし思い直したように立香にお願いをした。

「……名前、付けて」

「ん？ 付けるって。もしかして忘れた……とか？」

長い間幽閉されていたのならあり得るかもと聞いてみる立香だったが、少女はふるふると首を振る。

「もう、前の名前はいらぬ。……立香の付けた名前がいい」

「……成程、名前、名前ねえ」

おそらく、前の自分を捨てて新しい自分と価値観で生きる。この女の子は自分の意志で変わりたいと思い、その一步が新しい名前なのだろう。

女の子は期待するような目で立香を見ている。立香はうくと、少し考える素振りを見せて、彼女の新しい名前を告げた。

「なら、＼ユエ＼なんてどう？ ネーミングセンスに自信ないからお気に召さないなら別のを考えるけど……」

「ユエ？ ……ユエ……ユエ……」

「ああ、ユエって言うのはね、俺の故郷で『月』を表すんだ。最初、君とき、君のその金色の髪とか紅い眼が夜に浮かぶ月みたいに見えたから……どう？」

思いのほかきちんとした理由があることに驚いたのか、女の子がパチパチと瞬きする。そして、相変わらず無表情ではあるが、どこことなく嬉しそうに瞳を輝かせた。

「……んっ。今日からユエ。ありがとう」

「うん改めて、俺は立香、よろしく」

ユエは「立香、立香」と、大事なものを内に刻み込むように繰り返して呟いた。

そうして、場が和みつつあった状況下で立香は自身の両手をユエから離れさせた。それに対しユエは「あっ」と寂しそうな声を出す。直ぐにその声は途切れることとなる。

何と立香がハッサン布の上からユエをお姫様抱っこしたのだ！これには思わずユエも顔を赤くするが、これもまた直ぐに顔の色が変化し青くなってしまう。

立香がユエをお姫様抱っこして立ち上がり移動を始めたのとソレが天井より降ってきたのはほぼ同時だった。

咄嗟に、立香は全力で技術による『縮地』をする。一瞬で移動した立香が振り返ると、直前までいた場所にズドンツと地響きを立てながらソレが姿を現した。

その魔物は体長五メートル程、四本の長い腕に巨大なハサミを持ち、八本の足をわしゃわしゃと動かしている。そして二本の尻尾の先端には鋭い針がついていた。

一番分かりやすいたとえをするならサソリだろう。二本の尻尾は毒持ちと考えた方が賢明だ。立香が最後に相対したベヒモスとは最早比べることすら馬鹿らしいと感じる程の強者の気配を感じる。

部屋に來た時から感覚による気配感知ではなんの反応も捉えられなかった。だが、今はしつかり捉える事ができている。

ということとは、少なくともこのサソリモドキは、ユエの封印を解いた後に出てきたということだ。つまり、ユエを逃がさないための最後の仕掛けなのだろう。つまり、ユエを置いていけば立香だけなら逃げられる可能性があるということだ。

しかし………

「ま、そんな事、たとえば3度目があつてもするわけ無いんだけどね」

そう言いながら絶賛お姫様抱っこ中のユエをチラリと見る。彼女は、サソリモドキになど目もくれず一心に立香を見ていた。凧いだ水面のように静かな、覚悟を決めた瞳。その瞳が何よりも雄弁に彼女の意思を伝えていた。ユエは自分の運命を立香に委ねたのだ。

その瞳を見た瞬間、立香の口角が吊り上がり、いつもの優しげな笑顔とは違う不敵な笑みとなる。

その笑みのままユエを下ろすとユエの手を握りそのまま……

「【靈子讓渡】」

と告げる。すると

「!？」

衰え切った体に活力が戻ってくる感覚にユエは驚いたように目を見開いた。

立香は見違えるように状態の良くなったユエに目を合わせユエの手に白い動物のぬいぐるみを握らせる。

「見ていてユエ、『完膚なきまでに完全な勝利』つてやつを見せてあげるから」

そう言うのと立香はサソリモドキと戦うために向かっていく。しかし、ユエは動かない。

それは恐怖によるものか——否

それは絶望によるものか——否

それは諦めによるものか——否

それは信頼だ、立香なら絶対に勝てるという絶対の信頼があるからこそそこから動くことなく見届けるのだ。

信頼の眼差しを受け止め、立香は始める戦うた為に瞳を閉じて思い出す。

普段は常にクールだが、自分の料理やジャンクフードを食べている時はクールな表情が崩れ笑みを溢し。

戦場では黒きドレス鎧を纏い禍々しくも美しい黒き聖剣を振るう一人の騎士少女を。

そして告げる、己が紡いだ縁絆、それを形にする言葉を。

「【結縁霊装・クラス：セイバー】」

「【アルトリア・ペンドラゴン「オルタ」】」

その言葉が空間に響いた瞬間



空気が震え

圧倒的強者となつた立香が現れた

立香の姿は黒き鎧を身に纏い黒き剣を手にし。

漏れ出る威圧感で敵対者に無意識にサソリモドキ一步、後ろに下がらせるといふ。

今までの立香とはまるで違う、正に戦う者としての姿と表せる出で立ちとなった。

そんな立香がギチギチと音を立てながら怯えを表すサソリモドキに向けて開戦の宣言を叫ぶ。

「さて、始めるとしようか！」

今ここに暴虐の時間が始まる。

クラスメイトside1（よそ見的一幕：1）「失意と決意と……百合の花と。デュフフフ」

さて、前書きにてぐだぐだしたが、それは置いといて……時間を少し遡ろう。

ハイリヒ王国王宮内、召喚者達に与えられた部屋の一室で、八重樫雫は、暗く沈んだ表情で未だに眠る親友を見つめていた。

あの日、迷宮で死闘と喪失を味わった日から既に五日が過ぎている。

王国に戻るまでは雫も気を失っていた為、恵里達から聞いた話になるがあの後、宿場町ホルアドで一泊し、早朝には高速馬車に乗って一行は王国へと戻ったようだ。

とても迷宮内で実戦訓練を続行できる雰囲気ではなかったし、何より、無能扱いだったとは言え勇者の同胞が二人も死んだ以上、国王にも教会にも報告は必要だったらしい。

そして、厳しくはあるが、勇者一行にはこんな所で折れてしまつては困るのだ。致命

的な障害が発生する前に、勇者一行のケアが必要だという判断もあった。

雫が目を覚ましたのはそこから王国に着いて直ぐだった、そのことを聞いたメルド達はまた取り乱し、暴走するのではと警戒していたが、実際は拍子抜けするほど大人しかった。

しかし、安心した光輝が近づいた瞬間、刃の如き威圧感を放ち。最後まで誰も近づくことが叶わず、そのまま雫は自分の部屋に籠もってしまった。

そこから雫は自室にて3日間自分の感情の整理に費やし、4日目にしてようやく自室から出てクラスメイトと会話できるまでに回復した。

——心に空いた穴が満たされることはなかったが——

雫は、自分が動けるようになってからのことを思い出し、香織に早く目覚めて欲しいと思いつながらも、同時に眠ったままで良かったとも思っていた。

帰還を果たし立香とハジメの死亡が伝えられた時、王国側の人間は誰も彼もが愕然としたものの、それが【無能】の立香とハジメだと知ると安堵の吐息を漏らしたのだ。

国王やイシュタルですら同じだった。強力な力を持った勇者一行が迷宮で死ぬこと等あつてはならないこと。迷宮から生還できない者が魔族に勝てるのかと不安が広

がっては困るのだ。神の使徒たる勇者一行は無敵でなければならぬのだから。

だが、国王やイシユタルはまだ分別のある方だっただろう。中には悪し様に立香とハジメを罵る者までいたのだ。

もちろん、公の場で発言したのではなく、物陰でこそこそと貴族同士の世間話という感じではあるが。やれ死んだのが無能でよかったのだ、神の使徒でありながら役立たずなど死んで当然だの、それはもう好き放題に貶していた。まさに、死人に鞭打つ行為に、何より立香を侮辱されたことに雫は憤激に駆られて何度も手が出そうになり自分を抑えるのに苦労した。

実際、もし香織が眠りから覚めていなければ、雫はその貴族達に斬りかかってもおかしくなかった。

その位、雫にとって立香という存在は大きいのだ。

その後、二人を罵ったことを聞いた光輝が激しく抗議したことで国王や教会も悪い印

象を持たれてはマズイと判断したのか、二人を罵った人物達は処分を受けたようだが  
.....

逆に、光輝は無能にも心を砕く優しい勇者であると噂が広まり、結局、光輝の株が上がっただけで、立香とハジメは勇者の手を煩わせただけの無能であるという評価は覆らなかった。

あの時、自分達を救ったのは紛れもなく、勇者も歯が立たなかった化け物をたつた二人で食い止め続けた立香ハジメだというのに。そんな彼等を死に追いやつたのはクラスメイトの誰かが放った流れ弾だというのに。

クラスメイト達は図つたように、あの時の誤爆の話をしらない。自分の魔法は把握していたはずだが、あの時は無数の魔法が嵐の如く吹き荒れており、「万一分の魔法だったら」と思うと、どうしても話題に出せないのだ。それは、自分が人殺しであることを示してしまうから。

結果、現実逃避をするように、あれは二人が自分達で何かしてドジつたせいだと思うようにしているようだ。死人に口なし。無闇に犯人探しをするより、二人の自業自得にしておけば誰もが悩まなくて済む。クラスメイト達の意見は意思の疎通を図ることも

なく一致していた。

メルド団長は、あの時の経緯を明らかにするため、生徒達に事情聴取をする必要があらうと考えていた。生徒達のように現実逃避して、単純な誤爆であるとは考え難かったこともあるし、仮に過失だったのだとしても、白黒はつきりさせた上で心理的ケアをした方が生徒達のためになると確信していたからだ。

こういうことは有耶無耶にした方が、後で問題になるものなのである。なにより、メルド自身、はつきりさせたかった。『助ける』と言っておいて、立香とハジメを救えなかったことに心を痛めているのはメルド団長も同様だったからだ。

しかし、メルド団長は行動すること叶わなかった。イシユタルが、生徒達への詮索を禁止したからだ。メルド団長は食い下がったが、国王にまで禁じられては堪えるしかなかった。

「あなたが知ったら……怒るのでしょうか？」

あの日から一度も目を覚ましていない香織の手を取り、そう呟く雫。

医者診断では、体に異常はなく、おそらく精神的ショックから心を守るため防衛措

置として深い眠りについているのだろうということだった。故に、時が経てば自然と目を覚ますと。

雫は香織の手を握りながら、「どうかこれ以上、私の優しい親友を傷つけないで下さい」と、誰ともなしに祈った。

その時、不意に、握り締めた香織の手がピクツと動いた。

「!? 香織! 聞こえる!? 香織!」

雫が必死に呼びかける。すると、閉じられた香織の目蓋がふるふると震え始めた。雫は更に呼びかけた。その声に反応してか香織の手がギュツと雫の手を握り返す。

そして、香織はゆつくりと目を覚ました。

「香織!」

「……雫ちゃん?」



ベッドに身を乗り出し、目の端に涙を浮かべながら香織を見下ろす雫。

香織は、しばらくボーと焦点の合わない瞳で周囲を見渡していたのだが、やがて頭が活動を始めたのか見下ろす雫に焦点を合わせ、名前を呼んだ。

「ええ、そうよ。私よ。香織、体はどう？ 違和感はない？」

「う、うん。平気だよ。ちよつと怠いけど……………寝てたからだろうし……………」

「そうね、もう五日も眠っていたのだもの……………怠くもなるわ」

そうやって体を起こそうとする香織を補助し苦笑いしながら、どれくらい眠っていたのかを伝える雫。香織はそれに反応する。

「五日？ そんなに……………どうして……………私、確か迷宮に行つて……………それで……………」

徐々に焦点が合わなくなっていく目を見て、マズイと感じた雫が咄嗟に話を逸らそうとする。しかし、香織が記憶を取り戻す方が早かった。

「それで……あ……………藤丸くんは？」

「ッ……それは」

苦しげな表情でどう伝えるべきか悩む雫。そんな雫の様子で自分の記憶にある悲劇が現実であったことを悟る。だが、そんな現実を容易に受け入れられるほど香織はできていない。

「……嘘だよ、ね。そうでしょ？ 雫ちゃん。私が気絶した後、藤丸くんも、それに南雲くんも助かったんだよね？ ね、ね？ そうでしょ？ ここ、お城の部屋だよね？ 皆で帰ってきたんだよね？ 二人は……訓練かな？ 訓練所にいるよね？ うん……私、ちよつと行つてくるね。二人にお礼言わなきゃ……だから、離して？ 雫ちゃん」

現実逃避するように次から次へと言葉を紡ぎ立香とハジメを探しに行こうとする香織。そんな香織の腕を掴み離そうとしない雫。

雫は悲痛な表情を浮かべながら、それでも決然と香織を見つめる。

「……香織。わかっているでしょう? ……ここに二人はいないわ」

「やめて……」

「香織の覚えている通りよ」

「やめてよ……」

「彼等は、立香と南雲君は……」

「いや、やめてよ……やめてつたら!」

「香織! 二人はあの時、あの場所から落ちて居なくなつたのよ!」

「ちがう! ちがう、ちがうちがう! 絶対、そんなことない! どうして、そんな酷い

こと言うの! いくら雫ちゃんでも許さないよ!」

イヤイヤと首を振りながら、どうにか雫の拘束から逃れようと暴れる香織。雫は絶対離してなるものかとキツく抱き締め。ギョツと抱き締め、凍える香織の心を温めようとする。

「離して! 離してよお! 二人を、藤丸くんを探しに行かなきゃ! お願いだからあ

……絶対、生きてるんだからあ……離してよお」

いつしか香織は「離して」と叫びながら雫の胸に顔を埋め泣きじやくっていた。

縫り付くようにしがみつきの喉を枯らさんばかりに大声を上げて泣く。雫は、ただただひたすらに己の親友を抱き締め続けた。そうすることで、少しでも傷ついた心が痛みを和らげますようにと願って。

どれくらいそうしていたのか、窓から見える明るかった空は夕日に照らされ赤く染まっていた。香織はスンスンと鼻を鳴らしながら雫の腕の中で身じろぎした。雫が、心配そうに香織を伺う。

「香織……」

「……雫ちゃん……二人は……落ちたんだね……ここにはいないんだね……」

囁くような、今にも消え入りそうな声で香織が呟く。雫は誤魔化さない。誤魔化して甘い言葉を囁けば一時的な慰めにはなるだろう。しかし、結局それは、後で取り返しがつかないくらい傷となって返ってくるのだ。これ以上、親友が傷つくのは見ていられない。

「……………そうよ」

「あの時、南雲くんは私達の魔法が当たりそうになってた……………そして……………藤丸くんには……………誰だったの？」

「わからないわ。誰も、あの時のことには触れないようにしてる。怖いのね。もし、自分だったらって……………」

「そっか」

「恨んでる？」

「……………わからないよ。もし誰かわかったら……………きつと恨むと思う。でも……………分からないなら……………その方がいいと思う。きつと、私、我慢できないと思うから……………」

「そう……………」

俯いたままポツリポツリと会話する香織。やがて、真っ赤になった目をゴシゴシと拭いながら顔を上げ、雫を見つめる。そして、決然と宣言した。

「雫ちゃん、私、信じないよ。藤丸くんは生きてる。死んだなんて信じない」

「香織、それは……………」

香織の言葉に再び悲痛そうな表情をする雫。しかし、香織は両手で雫の両頬を包むと、微笑みながら言葉を紡ぐ。

「わかってる。あそこに落ちて生きていると思う方がおかしいって。……でもね、確認したわけじゃない。可能性は一パーセントより低いけど、確認していないならゼロじゃない。……私、信じたいの」

「香織……」

「私、もっと強くなるよ。それで、あんな状況でも今度は守れるくらい強くなって、自分の目で確かめる。藤丸くんのこと。……雫ちゃん」

「なに?」

「力を貸してください」

「……」

雫はじつと自分を見つめる香織に目を合わせ見つめ返した。香織の目には狂気や現実逃避の色は見えない。ただ純粹に己が納得するまで諦めないという意志が宿っている。こうなった香織はテコでも動かない。雫どころか香織の家族も手を焼く頑固者に

なるのだ。

普通に考えれば、香織の言っている可能性などゼロパーセントであると切つて捨てていい話だ。あの奈落に落ちて生存を信じるなど現実逃避と断じられるのが普通だ。

おそらく、幼馴染である光輝や龍太郎も含めてほとんどの人間が香織の考えを正そうとするだろう。

でも……

「もちろんいいわよ。それに……」

「雫ちゃん?」

「香織が言わなければ、私から言おうと思つてたんだから」

「……雫ちゃん!」

香織は雫に抱きつき「ありがとう!」と何度も礼をいう。「礼なんて不要よ、親友でしょ?」と、どこまでも男前な雫。現代のサムライガールの称号は伊達ではなかった。

そこで、不意に雫が「……私だつて」と口を開く。

「立香に伝えたい事がいっぱいあるんだから」

「ん？」

その言葉を香織が聞いた瞬間空気が変わった。

香織は雫が伝えたいことを聞き出そうとするが頬を少し赤く染めるだけで話そうとはしなかった。その反応を見た香織は何かを感じ取ったのだらう更に問いただそうと詰め寄った……その時。

その時、不意に部屋の扉が開けられる。

「雫！ 香織はめざ……め……」

「おう、香織はどう……だ……」

扉を開いたのは光輝と龍太郎だ。香織の様子を見に来たのだらう。訓練着のまま来たよう、あちこち薄汚れている。



あの日から、二人の訓練もより身が入ったものになった。二人も立香とハジメの死に思うところがあつたのだろう。何せ、撤退を渋った挙句返り討ちにあい、あわや殺されるという危機を救ったのは立香とハジメなのだ。もう二度とあんな無様は晒さないと相当気合が入っているようである。

そんな二人だが、現在、部屋の入り口で硬直していた。訝しそうに雫が尋ねる。

「あんた達、どうし……」

「す、すまん！」

「じゃ、邪魔したな！」

雫の疑問に対して喰い気味に言葉を被せ、見てはいけないものを見てしまったという感じで慌てて部屋を出ていく。そんな二人を見て、香織もキョトンとしている。しかし、聡い雫はその原因に気がついた。

現在、香織は雫の膝の上に座り、雫の両頬を両手で包みながら、今にもキスできそうな位置まで顔を近づけているのだ。雫の方も、香織を支えるように、その細い腰と肩に

手を置き抱き締めているように見える。

しかも、香織が問い詰めようとした事で更に近くなり、見ようによつては本当にキスをしているようにも見える。

つまり、激しく百合百合しい光景が出来上がっているのだ。ここが漫画の世界なら背景に百合の花が咲き乱れていることだろう。

雫の視界の端に、何故か黒い髭の大男がサムズアップする幻覚が見えた気がするが

それはともかく  
閑話休題

雫は深々と溜息を吐くと、未だ事態が飲み込めずキョトンとしている香織を尻目に一回彼女を引き離し、声を張り上げた。

「さっさと戻ってきなさい！ この大馬鹿者ども！」